ストライク・ザ・ブラッド 10
冥き神王の花嫁

第三真祖が統治する中米の帝国〝混沌界域〟で、突如内戦が勃発した。反政府勢力の背後にいる黒幕の存在を予感して、不安を覚える古城たち。そんな古城の自宅に届いたのは、〝混沌界域〟から送られてきた謎の荷物。差出人はディミトリエ・ヴァトラー。荷物の中身は、眠り続ける異邦の少女、セレスタだった。

ヴァトラーを命の恩人と慕うセレスタの毒舌に辟易しつつも、古城と雪菜は彼女の面倒を見ることに。しかしザザラマギウの〝花嫁〟と呼ばれるセレスタには、本人も知らない恐るべき秘密が――！

世界最強の吸血鬼が、常夏の人工島で繰り広げる学園アクションファンタジー、待望の第十弾！

み-3-41

ストライク・ザ・ブラッド10
冥き神王の花嫁

三雲岳斗

電撃文庫

9784048664288

1920193005905

ISBN978-4-04-866428-8
C0193 ¥590E

ASCII MEDIA WORKS
アスキー・メディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価:本体590円
※消費税が別に加算されます

三雲岳斗（みくもがくと）

大分県出身。主に小説などを書いている人。本作のアニメ放送期間中、多忙と緊張で、なにもしてないのに体重が六キロ減って現在リバウンドを恐れる日々。アニメご視聴くださった皆様ありがとうございました！

【電撃文庫作品】

コールド・ゲヘナ①～④
コールド・ゲヘナ あんぷらぐど
レベリオン 全5巻
i.d. Ⅰ～Ⅲ
道士さまといっしょ
道士さまにおねがい
アスラクライン①～⑭
ストライク・ザ・ブラッド 1～10
サイハテの聖衣（シュラウド） 1～2

イラスト：マニャ子（こ）

佐賀県出身、神奈川県在住。フリーのイラスト・原画描きです。最近はソーシャルゲームのイラストを沢山描いてます。…いつも同じプロフィールを使っていたら、謎の着る毛布愛好家みたいになってました…。因みに今も着ています。

ストライク・ザ・ブラッド10

冥き神王の花嫁

三雲岳斗

電撃文庫

2714

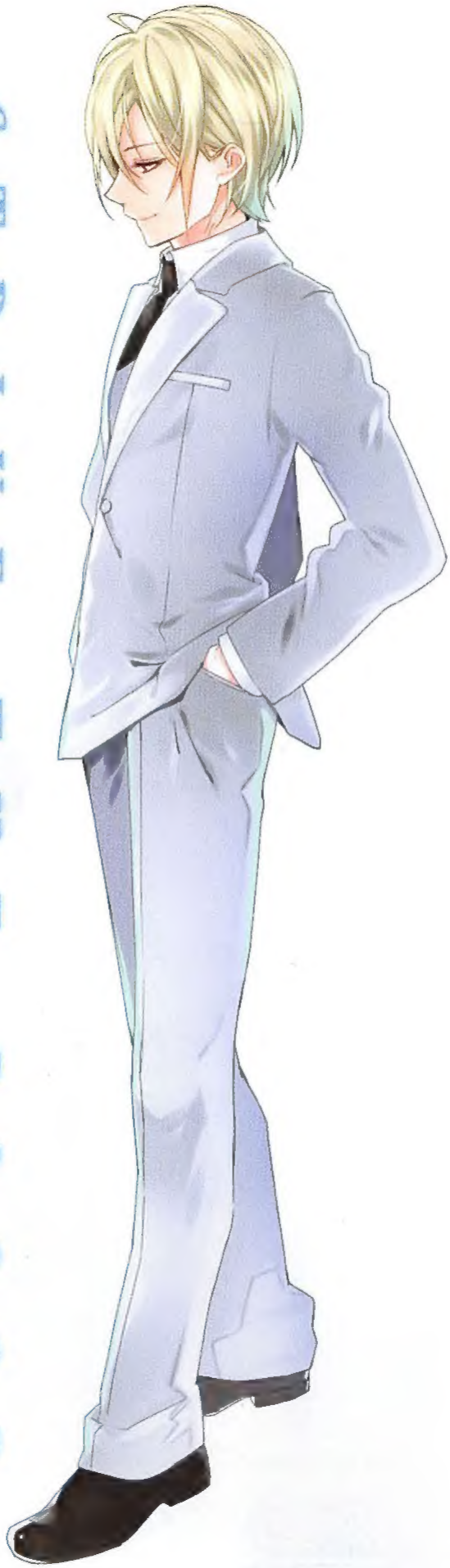
DENGEKI BUNKO

ストライク・ザ・ブラッド 10

STRIKE THE BLOOD

冥き神王の花嫁

三雲岳斗
illustration マニャ子

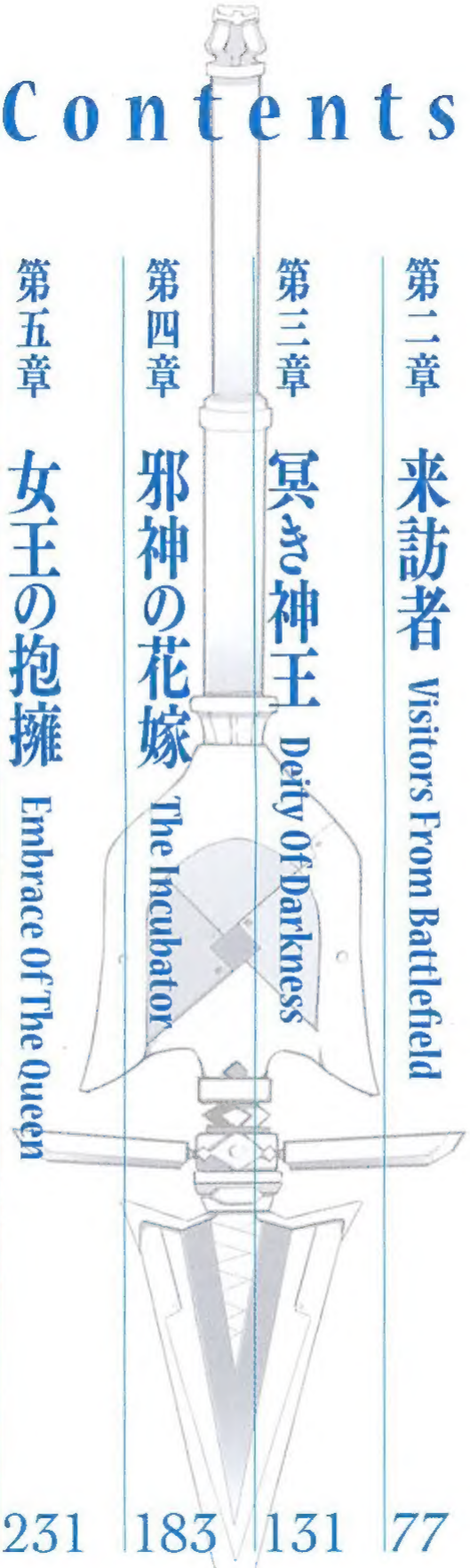


暁古城「あかつき こじょう」
『第四真祖』The Fourth Primogenitor
世界最強の〝怠惰な〟吸血鬼
姫柊雪菜「ひめらぎ ゆきな」
『剣巫』Swords Shaman
獅子王機関の可憐な監視者

叶瀬夏音［かなせかのん］
『模造天使』Faux-Ange
心優しき中等部の聖女
ニーナ・アデラード
『古の大錬金術師』
The Great Elder Alchemist
錬金の極致たる不滅の金属生命体
アスタルテ
『人工生命体』Homunculus
眷獣を宿した無垢なる人形

セレスタ・シアーテ
『邪神の花嫁』Bride Of Evil Deity
異邦より訪れた神王の依り代
キラ・レーベデフ
『幻影使い』Vampire Of The Phantom
戦王領域の麗しき闇の貴公子
トビアス・シャガン
『魔眼使い』Vampire Of The Evil Eye
戦王領域の苛烈なる炎の貴公子

Contents



序　章　Intro　11

第一章　火種　The Premonition　21

第二章　来訪者　Visitors From Battlefield　77

第三章　冥き神王　Deity Of Darkness　131

第四章　邪神の花嫁　The Incubator　183

第五章　女王の抱擁　Embrace Of The Queen　231

終　章　Outro　303

あとがき　318

デザイン／渡邊宏一（有限会社ニイナナニイゴオ）

ストライク・ザ・ブラッド

冥き神王の花嫁

10

序章

Intro

世界が白く染まっていた。
濃い霧が夕暮れの森を覆っている。
曇り空から降りそそぐ粉雪が、景色を純白に塗り替えていく。
そんな寒々しい雪道を、頼りない足取りで歩む人影がある。
六、七歳ほどの幼い少女だ。綺麗な顔立ちの娘だった。
淡い陽光に照らされた彼女の頬も、小さな唇から洩れる息も白い。
サイズの合わないぶかぶかのコートを着ているが、その姿もまた可愛らしい。
しかし唇を固く引き結んだ彼女の横顔に、年相応のあどけなさはなかった。
凍える指先の痛みにも構わずに、少女は無言で歩き続けている。感情を映さない大きな瞳は、美しいガラス細工を見ているようだ。
無表情な少女の手を引いているのは、巫女装束を着た若い女だ。
幼い少女の体力を気遣いながら、視界の利かない夕暮れの山道を、女は迷うことなく進んでいく。彼女の肩に背負われているのは、巫女装束には不似合いな黒い楽器用のケースだ。
互いに言葉を交わすこともなく、二人は降りしきる雪の中を歩いていく。
そのままどれだけの時間、歩き続けたのだろうか――
やがて女が、道の途中で足を止めた。
迫り来る邪な気配に気づいたように、彼女は自分たちの背後を振り返る。

風に舞う新雪の助けもあって、二人の足跡は残っていない。臭いを辿ることも難しいはずだ。それでも誰かが自分たちを追いかけてきていると、女ははっきり知覚していた。

「この道を真っ直ぐに進めば、お社があります。お行きなさい――私は彼らを足止めします」

屈みこんで少女の目を見つめながら、巫女装束の女が優しく告げた。

その瞬間、それまで無感動だった少女の瞳に、初めて不安の色が浮かんだ。女の手を離すまいとするように、細い指先に力をこめてくる。

そんな少女の反応に、巫女装束の女はフッと優しげな微笑を浮かべてみせた。

少女は優れた霊視力の持ち主だ。この先に待ち受けている運命を、今の一瞬に垣間見てしまったのかもしれない。

「あなたなら一人でも大丈夫。これを持っていって。御守りよ」

そう言って女は、傍にあった低木の枝を折り、少女のコートの胸元にそっと飾った。

鋭い棘のような葉と、赤く熟した実をつけた小枝。魔除けの力を持つとされるヒメヒイラギの枝である。残されたわずかな呪力を使って、女はその枝に術をかける。その即席の護符が、少女を導いてくれるだろう。高神の杜の結界まで――

「獅子王機関があなたのことを護ってくれます。お行きなさい」

力強い口調で語りかけながら、巫女装束の女は背中のケースへと手を伸ばした。

ケースの中に入っていたのは、武器だった。銀色の金属で成型された薙刀だ。無数の刃毀れ

が刻まれた刀身が、これまでの彼女たちの戦いの苛烈さを物語っている。
女が少女の背中を押す。少女は唇を噛みしめて、そのまま無言で走り出した。
何度も雪に足を取られながら、少女は必死に走り続ける。
強い風が少女の髪を乱し、零れ落ちた涙も白く凍る。
雪が激しさを増していく——

†

真夏の森——
そこは灼熱の熱帯雨林だった。
むせ返るような湿った空気。強烈な陽射し。
密生する木々が地上を覆い、外界からの侵入者を拒んでいる。極彩色の鳥たちが空を舞う。
落ち葉に覆われた地面を這い回っているのは、屍肉を求める虫たちだ。
大気を満たしているのは、熟れた果実と、名も知れぬ絢爛な花たちの芳香。そして硝煙と炎の臭い。生々しく剝き出しの生と死の気配が、密林全体に色濃く染みついている。
古い石造りの祭壇の上から、彼女はその光景を眺めている。
密林の奥に隠された小さな神殿。その中央にある祭壇に、一人の少女がつながれているのだ。

きめ細やかな褐色の肌と、蜂蜜色の髪。幼さを残した美しい顔立ち。純金で彩られた豪華な衣装は、神殿の支配者としても相応しく感じられる。

しかし彼女の表情は、恐怖と絶望に凍りついていた。

少女の視界を埋め尽くしているのは、おびただしい量の鮮血だ。神殿を守護していたはずの神官たちが、無惨な死体となって少女の周囲に積み上げられているのだ。

神官たちを虐殺したのは、軍服を着た兵士たちだった。

彼らは統率された動きで神殿を制圧し、少女のいる祭壇の間へと雪崩れこんでくる。

生き残ったわずかな神官が必死の抵抗を続けていたが、それが無益であることは明らかだった。強力な銃器と魔術で武装した数人の兵士に、神官たちは為すすべもなく蹂躙されていく。

逃げなければ、と少女は思う。

しかし少女は動けない。彼女の全身は石のように硬直して、自分の意思では指先ひとつ動かせない。瞼を閉じることもできぬまま、視界に映る惨劇を、彼女はただ呆然と眺めている。

やがて神殿を襲ってきた兵士の一人が、彼女を見つけた。

無骨な対魔族用ライフルを構えたまま、兵士は祭壇へと近づいてくる。

そしてライフルの銃口が、彼女の胸元へと向けられた。

黄金の毛並みを持つ俊敏な影が、怒号とともに飛びこんできたのは、その直後だった。

「無礼者がァァァ――！」

影の正体は魔族だった。神官の衣装をまとった、豹頭の獣人だ。祭壇に辿り着くまでに、過酷な戦闘をくぐり抜けてきたのだろう。獣人の両腕は返り血に濡れ、そして彼自身もまた無数の傷を負っている。

「その御方に触れるな、侵略者ァッ！」

「――っ!?」

獣人の接近に気づいた兵士が、咄嗟にライフルを構え直す。しかし獣人の攻撃のほうが速い。圧倒的な筋力にものをいわせて、兵士の頭を祭壇の壁へと叩きつける。

兵士が被っていたヘルメットが、不快な音とともに砕け散った。

そのまま頭蓋骨が潰れていても不思議ではない痛烈な一撃だ。獣人の渾身の打撃を喰らって、まともな人間が生きていられるはずがない。

にもかかわらず、兵士は動きを止めない。むしろ平然と笑っている。

ひび割れたゴーグルを引きちぎり、血まみれの顔で獰猛に笑い続けている。それに気づいた獣人の表情が凍りつく。そして互いに密着した姿勢から、兵士はライフルを連射した。

「ぐぉ――」

獣人の口元から血塊がこぼれた。祭壇近くにまで吹き飛んだ獣人へと、兵士はさらに容赦なく銃弾を叩きこむ。

眼前で繰り広げられる凄惨な死闘に、少女の意識が絶望に呑まれていく。それでも彼女は動

けない。悲鳴を上げることも、目を逸らすこともできず、恐怖だけに支配されていく。

獣化状態を維持できなくなった獣人が、傷ついた老人の姿へと変わった。

いかに回復力に優れた魔族といえども、これだけの傷を負っては絶命は時間の問題だ。戦闘はおろか、もはや立ち上がることすら不可能だ。

それを確認して、兵士はゆっくりと起き上がる。そして再び、祭壇上の少女へと銃を向けた。

「――目覚めろ」

半壊した顔面を歪めて、兵士が奇妙な言葉を紡いだ。少女は、人形のように硬直したまま、その非現実的な光景を見つめている。

「目覚めろ、ザザラマギウ！」

引き金にかけられた兵士の指に、力がこもる。少女は今度こそ確実な死を覚悟する。

しかし恐れていた衝撃が、彼女を襲うことはなかった。

少女に向けられていたライフルは、それを構えていた兵士の腕ごと、前触れもなくごっそりと消失していたからだ。

「なっ!?」

兵士が驚愕の声を洩らす。

そんな彼の全身に、銀色の輝きが巻きついた。

輝きの正体は蛇だった。鋭い牙を持つ無数の蛇が、兵士の全身に音もなく絡みついている。

そのことに兵士が気づいたときには、もうすべてが終わっていた。
数え切れないほどの蛇たちに生きたまま喰われて、兵士の身体が消えていく。
なにもかもが一瞬の出来事だ。血の一滴すらこぼすことなく兵士の全身を喰い尽くし、蛇たちは出現したときと同様に、虚空へと姿を溶けこませて消えた。
硬直していた身体から力が抜け、少女は祭壇の上に倒れこむ。
彼女の耳に聞こえてきたのは、緊張感のない優雅な足音。そして場違いに軽薄な声だった。
「――無様だねェ、族長殿。聖域に、こんな無粋な連中の侵入を許すなんて。ザザラマギウの神官も堕ちたものだ」
神殿の廊下を抜けてきたのは、熱帯雨林には不似合いな、純白の三つ揃えを着た若い男。金髪碧眼の美しい青年だ。
血溜まりの中に倒れた神官服の老人を見下ろして、青年は、哀れむように笑っている。
「ディミトリエ・ヴァトラー……か。まさか貴様に……頼ることになるとは……な」
苦しげな呼吸を続けながら、老人が自嘲するように呟いた。
青年は苦笑混じりに首を振り、そんな老人を無言で眺めている。
神殿の周囲での戦闘は、いつの間にか終わっていたらしい。銃声はもう聞こえない。大気に漂う死臭だけが、濃さを増したように思えるだけだ。
「……奴ら……は？」

途切れ途切れの口調で老人が訊く。
神殿の外に目を向けて、ヴァトラーは無造作に首を振った。
「ボクの部下が制圧した。ただし聖域を護っていたキミの一族は全滅だヨ。残念だけどね」
「そうか……」
咳きこんだ老人の喉から、鮮血がこぼれた。彼の命はすでに尽きかけているのだ。
残された最後の力を振り絞り、老人は頼りなく手を伸ばす。祭壇の上の少女に向けて――
「頼む……ヴァトラー……その御方を連れ出してくれ……花嫁を……」
かすれた声でそう言い残し、ついに彼は事切れた。
ヴァトラーは、そんな老神官の最期を無表情に眺めている。
爆発音とともに、神殿が揺れた。兵士たちが仕掛けていた爆弾が起動したのだろう。
石造りの柱が倒壊し、神殿全体が炎に包まれていく。
眩い炎を背景に、金髪碧眼の青年貴族が顔を上げ、祭壇に横たわる少女を睥睨する。
その美しくも恐ろしい青年の姿に目を奪われたまま、少女は声もなく呟いた。
「ディミトリエ……ヴァトラー……」

第一章 预感
The Premonition

1

「ねえ、古城。あの子って――」
藍羽浅葱に呼び止められて、「ん？」と暁古城は視線を巡らせた。
十二月の第三週。冬休み直前、最後の登校日だ。
どことなく浮ついた忙しない空気の中、退屈な午後の授業を終えて、彩海学園の生徒たちがぞろぞろと下校を始めている。
そんな人々の流れに逆らうように、一人の少女が校門の前に立っていた。
白いワンピース型のセーラー服を着た小学生である。
明るい色の猫っ毛の髪に、学校指定とおぼしきベレー帽がよく似合う。気難しいネコを連想させる、大人びた顔立ちの可愛らしい少女だ。
下校中の古城の姿を見つけると、彼女は、大きな目を見開いて華やかに笑った。
そして遠慮がちに手を振りながら、古城たちのほうへと小走りに駆け寄ってくる。
「古城さん！」
「結瞳？　俺を待ってたのか？」
古城は驚きながら立ち止まる。

江口結瞳というのが、少女の名前だ。今から一週間ほど前に、ブルーエリジアムと呼ばれるリゾート施設で、古城たちは彼女と知り合った。結瞳が持つ〝夜の魔女〟の力を利用されそうになっていたところを、成り行きで助けることになったのだ。

それ以来、結瞳は妙に古城に懐いてくれている。時折、必要以上ではないかと思えるほどに。浅葱が彼女のことを警戒しているのも、そんな結瞳の態度が原因だ。

「すみません。編入の手続きが早く終わって、少し時間があったので……迷惑でしたか？」

結瞳が、ベレー帽を押さえながら、少し不安そうに訊いてくる。

「いや、おまえが迷惑ってわけじゃないんだが――」

慌てて首を振る古城だが、その額にはうっすらと脂汗が浮いていた。

なにしろ今は下校時刻になったばかりで、正門前は混み合っている。

そこで古城を待ち受けていた可愛らしい小学生の存在は、異様なほどに目立っていた。当然、結瞳に慕われている古城の姿も、凄まじい勢いで周囲の注目を集めている。

だからといって、結瞳を追い返すわけにもいかず、古城は曖昧に言葉を濁すしかない。

「そうそう、おまえのせいじゃないって。古城の日頃の行いが悪いのが原因だからな。まあ、気にすんな、結瞳坊」

古城の隣にいた矢瀬基樹が、そう言って乱暴に結瞳の頭を撫でた。

結瞳は、そんな矢瀬の手を払いのけ、乱れた帽子を直しながら不満そうに頬を膨らます。

「勝手に変なあだ名をつけないでください。馴れ馴れしく触られるのも不愉快です」
「ぐ……」
このガキ、と思わず口を歪める矢瀬。
それをたしなめるようにして、浅葱が結瞳と古城の間に割りこみ、
「編入手続き……？　あ、じゃあ、結瞳ちゃんが着てるその服って、もしかして――」
「あ、はい。天奏学館の制服です」
結瞳は少し得意げな表情でそう言った。おそらく結瞳が彩海学園に来たのも、新しい制服を真っ先に古城に見てもらおうと考えたからなのだろう。
「天奏学館？　たしかメチャメチャ偏差値高かっただろ？」
古城が感心したように息を吐く。天奏学館は、人工島西地区にある小中高一貫教育の名門校だ。一般人が生徒の大半を占める彩海学園などとは違って、天奏学館には登録魔族が多い。中には貴族級の吸血鬼や、上位種の獣人の子女も通っているという。ほかの生徒もそれなりの家柄や成績の持ち主ばかり。全寮制の超お嬢様学校というやつである。
「そうですね。でも人工島管理公社と魔族総合研究院の推薦がもらえましたから。そこの失礼な人のお兄さんのおかげで、生活の面倒も見てもらえることになりましたし」
そう言って結瞳は、おざなりな態度で矢瀬に頭を下げた。失礼なのはおまえだ、と矢瀬が結瞳を指さして唸る。古城は怪訝な表情で、そんな友人の横顔を眺め、

「ああ、そっか。矢瀬ん家の兄貴って、魔総研の仕事もやってるんだっけか」
「そう。だからあたしが基樹に推薦しろって言っておいたの。結瞳ちゃんなら確実に魔族保護育成プログラムの特待生に選ばれると思って」
浅葱が少し得意げに胸を張る。
矢瀬基樹の兄である幾磨は、北米連合の大学院を飛び級で卒業した秀才だ。まだ二十代の半ばでありながら、人工島管理公社で重要な役職を任されている。矢瀬の幼なじみということで、浅葱は幾磨とも顔見知りなのだ。
〝魔族特区〟である絃神島には、身寄りのない魔族のための支援政策が充実している。魔族総合研究院の特待生もそのひとつだ。世界最強の夢魔である結瞳なら、当然その資格を満たしている。少なくとも絃神島にいる限り、この先、彼女が生活に困ることはないはずだ。
「まあ、いいんじゃねーか。幾磨は、利用価値があるものは利用する、ってのがモットーだしな。結瞳坊が相手なら丁重に扱うだろ」
矢瀬が素っ気ない口調で呟いた。実の兄に借りを作ってしまったことがよほど不本意だったのか、どことなく拗ねたような表情である。変なあだ名で呼ばれた結瞳も、同じように顔をしかめている。気が合っているのか合わないのか、よくわからない二人である。
古城は、やれやれと肩をすくめて結瞳を見下ろし、
「そうか……とにかく、よかったな。これで堂々と絃神島にいられるんだろ？」

「はい。だから待っててくださいね！」
結瞳がキラキラと瞳を輝かせながら古城を見上げてくる。
その純粋で真っ直ぐな視線に、古城はなぜか気圧された。
「え？　待つって、なにをだ？」
「約束してくれましたよね。私のことを一生幸せにしてくれるって。結婚できる歳になるまで、あと五年もかかっちゃいますけど……」
左手の薬指に触れながら、もじもじと頬を赤らめて呟く結瞳。隣でそれを聞いていた浅葱が、ピキ、と頬を強張らせる。
「ま……待て！　違う！　いや、違わないけど、あれはそういう意味じゃなくてだな――」
古城の表情に焦りが浮かんだ。呪いにも似た〝夜の魔女〟の魂を封印するため、自ら死を選ぼうとした結瞳を救ったのは、彼女を幸せにするという古城のひと言だった。ただしそれは古城の意図とは、だいぶズレた形で結瞳に伝わってしまったのだが――
その誤解を解こうとする古城の言葉は、自分の世界に入りこんでしまった結瞳の耳には届かない。胸の前で小さな拳を握り締め、彼女は力強く宣言する。
「私だって、いつまでも子どもじゃありませんし、その、頑張りますから！」
「頑張らなくていい！　普通にしてろ！」
必死の説得を続ける古城を、下校中の見知らぬ女子生徒たちが横目でチラチラと睨みながら

通り過ぎて行く。背中に突き刺さる彼女たちの視線とヒソヒソ声の呟きに、古城の胃が疼痛を訴えてきた。

さらには事情を知っているはずの浅葱までもが、ジトッとした半眼になって、

「古城……あんた、それって、やっぱり年下の小さい子が好きとか、そういうこと……!?」

「なんでそうなる!?　悪意のこもった解釈をすんなっ！」

古城は思わず涙目になって浅葱に怒鳴る。安堵の表情を浮かべつつも、疑惑の目つきを隠さない浅葱。見かねた矢瀬が、クックッと喉を鳴らしつつ二人の間に割りこんで、

「まあまあ、こんなところでも立ち話もなんだし、どこか落ち着けるところに行こうぜ」

「ああ、まあ、俺はべつに構わないけど、結瞳はいいのか？　その、門限とか――」

「はい、大丈夫です。古城さんと一緒なら、どこでも行きます」

結瞳はそう言って、古城の隣にぴったりと寄り添った。それを見た浅葱が、一段と険しい表情を浮かべる。矢瀬は興奮した様子で古城に顔を寄せ、

「おい、古城……どこでもついてきてくれるってよ。意味深だな。どこでもいいんだぞ！」

「勝手に深読みしてんじゃねえよ！　ったく！」

「いえ、行きます！　私、頑張りますから！」

「頑張らなくていいって言ってるだろっ！」

頭上に広がる青空を見上げて、勘弁してくれ、と古城はうめいた。

ともあれ世界最強の吸血鬼――〝第四真祖〟暁古城の冬休みは、そんなふうにして始まったのだった。

2

絃神島は、太平洋のド真ん中に浮かぶ常夏の島だ。冬休みといっても気温は二十度を超えて、降りそそぐ陽射しも強烈だった。街路樹の葉は青々と生い茂り、路上に濃い影を落としている。

そんな街路樹の幹に身を潜めて、気配を殺している怪しい人影がいる。

それはベースギター用のギグケースを背負った、制服姿の女子中学生だった。

顔立ちは人形のように端整で体つきも華奢だが、何気ない身のこなしの端々に、しなやかな力強さを感じさせる少女である。獅子王機関の剣巫、姫柊雪菜だ。

「まったくもう……なにをやってるんですか、あの人は」

植えこみの隙間から頭だけを出して、雪菜は不満そうに独りごちる。

彼女の視線の先にいるのは、下校中の暁古城だった。

古城の隣に密着しているのは、真新しい制服姿の江口結瞳だ。その結瞳を牽制するように、藍羽浅葱が二人のすぐ背後にくっついている。そんな三人のギスギスした関係を、少し離れた安全な場所から矢瀬基樹が楽しそうに見守っており、さらには下校中の無関係な人々までもが、

興味本位の視線を彼らに向けていた。

その光景が、雪菜を不機嫌にさせている。

本来、古城の隣にいるべきなのは、監視役である雪菜のはずなのだ。しかし衆人環視のこの状況で、彼らの間に割りこむのはさすがに難しい。そのせいで雪菜の苛立ちは募る一方だ。

「いくら相手が結瞳ちゃんだからって、小学生相手にデレデレして――！」

雪菜の怒りの矛先は、当然ながら古城に向けられていた。結瞳の積極的なアプローチに戸惑う古城の姿も、雪菜の目には、だらしなく小学生の言いなりになっているとしか映らない。

雪菜の指先に無意識に力がこもり、哀れな街路樹の枝がめきめきと音を立てて軋んでいる。

「そういう雪菜ちゃんも、なにをやってるんだかなあ」

そしてその雪菜の背後から、少し呆れたような声が聞こえてくる。

声の主は暁凪沙だった。古城の実の妹で、雪菜にとってはクラスメイトだ。こそこそと古城を尾け回す雪菜を見下ろして、彼女は苦笑混じりの溜息をついている。

「古城君たちに用があるのなら、普通に話しかけてくればいいのに」

「う、うん……でも、さすがにこのタイミングではちょっと……」

至極もっともな凪沙のアドバイスに、雪菜は頼りなく言い訳した。

名門小学校の制服を着た結瞳はもちろん、美形で華やかな容姿の浅葱も負けず劣らず人目を惹く。その二人が、古城の奪い合いのような真似を演じているのだ。どう考えても目立たない

わけがない。そこに雪菜がのこのこと入っていったら、さらなる混乱を招くのは必然だった。第四真祖の監視役としては、そのような振る舞いは極力避けなければならないのだ。

だからといって、結瞳に誘惑されている古城をこのまま放置しておくのも危険に思える。

そんなジレンマに苦悩する雪菜を、凪沙は愉快そうに観察しながら、

「まあ、あたしはべつにいいんだけどね。そういう雪菜ちゃんを見てるのも楽しいし」

「え……と、ごめんね、なんだか……」

尾行につき合わせることになってしまった凪沙に、雪菜は神妙に頭を下げた。しかし凪沙は、屈託のない笑顔で首を振り、

「いいよいいよ。それより、見て！　古城君たち、叢雲珈琲店に入るつもりだよ！　あたし、あの店の黒糖生チョコラテが好きなんだよね、いいなー。でもさすがに今から同じお店に入ったらバレるよね。あ、そうだ。せめて代わりにコンビニで、なにか飲み物買ってくるよ。雪菜ちゃんはなにがいい？　スポドリ系？　炭酸系？　果汁系？」

「え……っと、じゃあ、なにか冷たいお茶を――」

「オッケー、任せて」

凪沙は姿勢を低くしたまま、コンビニに向かって駆け出していく。そんな彼女を見送って、雪菜は弱々しく苦笑した。凪沙の口数の多さにも最近は慣れてきたつもりだったが、やはりいきなりだと圧倒されてしまう。

一方の古城たちは、凪沙が予想したとおり、公園沿いのカフェに入ったようだった。雪菜は公園の案内板に隠れて、カフェの店内にいる古城たちの監視を続行しようとする。と、

「あー……悪い、そこの女子中学生ちゃん」

「え？」

背中から突然声をかけられて、雪菜は咄嗟に身構えた。

そこに立っていたのは、だらしなくシャツを着崩した長身の中年男性だった。

年齢の割には姿勢がよく、筋肉の付き方にも無駄がない。

しかし彼の顎はうっすらと無精髭で覆われて、全体的に気怠い雰囲気を漂わせている。隙だらけで威圧感とは無縁の男だ。

だが、そのことに雪菜は困惑した。男までの距離は、ほんの二メートル足らず。雪菜が得意とする近接格闘戦の間合いである。その間合いの内側に男が踏みこんでくるまで、雪菜は彼の気配に気づくことすらできなかったのだ。

「このベンチ、空いてるかい？」

そう言って男は、案内板の脇にある平たいベンチを指さした。ベンチで座って休息する前に、近くにいた雪菜に気を遣って声をかけてきたらしい。

「あ、はい。どうぞ」

雪菜は、そう言って男にベンチを勧める。

気配の無さには困惑したが、男に敵意は感じられない。むしろ不審な行動をしているのは、こそこそと隠れている雪菜のほうである。

「ありがとう。いや、助かったよ。歳喰うと、このクソ暑い中うろつくのはしんどくてなー」

男は無造作にベンチに座り、着古した中折れ帽の鍔を上げた。あらわになった彼の顔を見て、雪菜は奇妙な既視感を覚える。通りすがりの人物のはずだが、初対面という気がしない。雪菜が知っている誰かによく似ているのだ。

「で、女子中学生ちゃんは座らないのか？」

戸惑う雪菜とは裏腹に、男が緊張感のない声で訊いてくる。

はい、と雪菜は硬い表情でうなずいて、

「大丈夫です。お構いなく」

「ふーん。ところで、そのケース……なにが入ってるのかな？　きみのその背中のやつ」

だらしなく頬杖をつきながら、男はさらに質問を続ける。のらりくらりとした口調のせいで、回答を拒否するタイミングがつかめない。

雪菜は、自分の背中のギグケースにぎこちなく手を回し、

「こ、これは楽器です。えーと……ベースギターというやつが」

「へぇ……ベースか。女子中学生ちゃんは音楽が好きなのかい？　ジャンルは？」

男が思いがけない勢いで話に喰いついてくる。

雪菜の背中を冷や汗が伝った。彼女の背中のケースの中身は、もちろんベースギターなどではない。その正体は獅子王機関の七式突撃降魔機槍――〝雪霞狼〟の銘を持つ破魔の槍なのだ。

「い、いえ……その、最近の音楽にはあまり興味がなくて……」

内心の焦燥を隠しつつ、雪菜はどうにかそれだけを口にする。

すると男は、ハハッと愉快そうに声を上げて笑い、

「いいねェ、その答え。今どきの若い子にしてはパンクだねェ」

「ど、どうも」

タイヤの破裂と音楽になんの関係があるのだろう、と困惑しつつも、雪菜はとりあえず相槌を打つ。中折れ帽の男は、うんうん、と満足そうに腕を組み、

「ああ、いやね。俺も若い頃は音楽に嵌まって、ライブハウス通いをしてたからさ。ちょっと気になっただけなんだよ。まあ気にしないでくれ」

「そうですか。パンク……がお好きだったんですか？」

雪菜のほうから質問したのは、これ以上、男にあれこれ詮索されるのを防ぐためである。どうせならさっさと逃げ出したいところだが、コンビニに行った凪沙が戻ってくるまでは、この場を離れるわけにはいかない。それまでなんとか、この馴れ馴れしい中年男を適当にやり過ごすしかないだろう。そんな雪菜の思惑を知ってか知らずか、男は懐かしそうに目を細め、

「うんにゃ、地下アイドルってやつ。ほら、軟骨妖精愚連隊とか、微香性メガテリウムとか、

知らないかな？　知らねーか……」
「す、すみません」
なぜか理由もなく謝ってしまう雪菜。それは本当にアイドルグループの名前なのだろうか、と内心、本気で困惑する。
そんな雪菜の思考の一瞬の空白を衝いて、男がぼそりと質問した。
「ところで、女子中学生ちゃんは――暁古城とどういう関係なのかな？」
「え!?」
雪菜が小さく声を洩らした。しまった、と思ったときには手遅れだった。
もはや誤魔化せる状況ではない。彼女が古城を監視していたことは、完全に男にバレている。
「ど、どうして、暁先輩の名前を……!?」
声を上擦らせて雪菜が訊く。男はニヤニヤととぼけた笑みを浮かべて、
「いやあ、女子中学生ちゃんが、さっきから凄い目で古城のことを睨んでるから、もしかして嫉妬……あ、いや、ジェラシってるんじゃないかと思ってな。当たってたか？」
「当たってません！」
なぜわざわざ英語で言い直したのか、と雪菜は混乱しながら男を睨む。
「わ、わたしは、ただ暁先輩のことを監視していただけで、そんな、嫉妬とか、そういうことではありませんから！」

「監視か。監視ね。それってつまりストーキング的な片想いってことか」

ヘェ、と男が感心したように呟いた。予期せぬ彼の反応に、雪菜は一瞬固まって、

「は、はい!?」

「いいねェ、監視。青春だよな。やっぺ、初々しくてたまんねェ……甘酸っぺえええぇ！」

「ど、どうしてそういう話になるんですか!? そんなことよりも、あなたはいったい……!?」

耳まで顔を赤くしながら、雪菜が男を問い詰める。そのとき雪菜たちのすぐ背後で、誰かが立ち止まる気配がした。

「が、牙城君!?」

ペットボトルを抱きかかえた凪沙が、中折れ帽の中年男を見て目を丸くしている。激レアなモンスターにばったり遭遇してしまったオンラインゲームプレイヤーのような表情だ。

「牙城……君？」

彼女の呟きに、雪菜はハッと息を呑む。目の前の男が誰に似ているのか、ようやくその答えを思い出したのだ。

「おお、凪沙！　元気かっ？」

中折れ帽の男が立ち上がり、大袈裟に両腕を広げて満面の笑みを浮かべた。人間がここまでデレデレの表情ができるのかと驚くばかりの変貌ぶりである。

「相変わらず可愛いな、おまえは！　どこの女神かと思ったぜ！　いやあ、おまえがコンビニ

に走ってくのが見えたから、この女子中学生ちゃんに挨拶しながら待ってたんだよ」
「あ、そうなんだ……ていうか、牙城君、なんでいるの？　いつ日本に帰ってきたの？　お仕事は？　深森ちゃんにはもう会った？　雪菜ちゃんとなんの話してたの？」
男の仰々しい賛辞を、凪沙は慣れた態度でさらりと受け流す。
矢継ぎ早な凪沙の質問に、男はなぜか自慢げに顎を上げ、
「絃神島に着いたのはさっきかな。遺跡の発掘調査にカリブ海のほうに行ってたら、いきなり内戦が始まっちまってなー、ハハッ、まいったまいった。んで、深森さんの職場に行ったら、邪魔だって追い出されちまったから、ここで女子中学生ちゃんの恋愛相談に乗ってたわけさ」
「恋愛相談!?」
なにそれずるい、と凪沙が雪菜をキラキラとした瞳で見つめてくる。雪菜は必死に首を振り、
「ち、違っ……！」
「ああ、そうそう。自己紹介がまだだったっけな……お？」
そして冤罪の主原因である男は、なにを思ったのかいきなりその場で手を挙げた。
彼が見つめていたのは、公園沿いのカフェのテラス席である。
そこには注文を終えて店を出てきた古城たちの姿がある。尾行に気づかれそうになって焦る雪菜。しかし男は堂々と彼らに手を振って、
「おーい、古城。こっちだ、こっち」

「げっ……!?　なんでおまえがいるんだ、クソ親父!?」

男の存在に気づいた古城が、脊髄反射で悪態をつく。

古城の言葉を聞いた雪菜は、唖然としながら彼ら二人の顔を見比べた。

そう。この中折れ帽の中年男は、暁古城によく似ている。ほかならぬ雪菜の監視対象に似ているのだ。顔立ちそのものだけでなく、仕草や気怠げな雰囲気までもが。

「あ、暁先輩の……お父様……？」

半信半疑の口調で雪菜が訊く。凪沙が驚いていた理由も今ならわかる。どうしてこのタイミングで、そのような人物と遭遇するのかわからない。

そして男は、硬直する雪菜を面白そうに眺めて不敵に微笑み、

「古城と凪沙の父親です。暁牙城。ヨロシク」

なぜか怪しげなイントネーションでそう言った。

3

「やれやれ、いくら女にモテないからって、まさか小学生に手を出すとはな――」

リビングのソファに寝転がって、暁牙城が肩を揺らしながら笑っている。

暁家の自宅マンションである。牙城がここに帰ってきたのは、実に一年数カ月ぶりのことだ

った。そのせいか、この部屋の空気から、一人だけ浮いているような印象がある。
「手ェなんか出すか！　あれは結瞳のやつがいろいろ勘違いしてるだけだ！」
拗ねた子どものような不機嫌な顔で、古城が答えた。
古城たちが公園で暁牙城に遭遇してから、まだ三十分も経っていない。
しかし父親の顔を見るや否や、古城はすぐさま自宅に戻ることを決断した。牙城が友人たちに接触することを恐れたのだ。矢瀬や浅葱はまだしも、危険なのは結瞳である。迂闊に二人を接触させたら、牙城が彼女になにを吹きこむか、まったくわかったものではない。
しかし古城たちに声をかけてきたときには、牙城は、すでにひととおりの情報収集を終えていたらしい。結瞳との関係だけでなく、ありとあらゆる弱みについて散々からかわれ、古城はげっそりとやつれた表情を浮かべている。
「……勘違い、ねェ」
凪沙が運んできた麦茶を美味そうにすすって、牙城が意味ありげに笑う。
「まあ、気にするな。俺も深森さんとは十歳以上離れてるしな。犯罪者呼ばわりされるのも、あと十年ばかりの辛抱だ」
「誰が犯罪者だ……っ！　話がややこしくなるから黙ってろよ、おまえは！」
父親の的外れな励ましに、古城がうんざりと唇を曲げる。
しかし牙城は息子の抗議を気にも止めずに、好奇の視線を雪菜へと向けた。

牙城は、なぜか雪菜のことを気に入ったらしく、固辞する彼女を、強引に自宅に招き入れたのだ。

「ところで姫柊ちゃんだっけ。さっきは悪かったな。ジェラシってるとか、ストーキングとか、失礼なことを言っちまって」

「い、いえ。気にしてませんから」

少し緊張した面持ちの雪菜が、牙城の言葉に首を振る。

初対面の女子中学生にオマエはいったいなにを言ってるんだ、と思わず頭を抱える古城。

それでも牙城は、反省した素振りなど微塵も見せずに、古城の肩を馴れ馴れしく叩くと、

「ホント悪いね。きみみたいな可愛い子が、この古城の彼女とは思わなかったからさ」

「え!?」

牙城の無遠慮な物言いに、雪菜は反応できずに固まった。硬直しているのは古城も同じだ。ただ一人、牙城だけが、やたら浮かれたように目を細めて

「いや、それにしても、古城なんかのどこがよかったんだ？　姫柊ちゃんなら、もっとほかにいいのがいくらでも選べそうなのにな――」

「だから姫柊は彼女じゃねえ！　くだらない妄想してんじゃねえよ、クソ親父！」

古城が、そんな父親の耳元で怒鳴り返す。聞こえないふりをして麦茶をすすり続ける牙城。

「も、妄想……」

古城の発言を聞いた雪菜が、ムッと眉の付け根を寄せた。
しかし古城は雪菜の変化に気づかず、
「姫柊はただの後輩だよ。たまたまうちの隣に住んでるだけ。家に寄りつかないおまえは知らなかっただろうけどな！」
「ふーん、ただの後輩ねェ……」
牙城は、ニヤニヤ笑いを浮かべたまま脚を組み直した。至近距離から睨みつけてくる古城を、鬱陶しげに追い払い、
「ところで姫柊ちゃん、古城とはもうヤッた？」
「へ!?」
「だから人の話を聞けよ、てめェは――！」
軽くブチ切れた古城が、父親の顔面を目がけて渾身の右フックを放った。ほとんど手加減抜きの一撃だ。まともに入れば、牙城の頭蓋骨を粉砕しかねない。
しかし吸血鬼の腕力で放たれた息子の攻撃を、牙城は余裕の動きで回避する。
「おおっと……危ない危ない。恐い恐い」
「こんのエロ中年が――！」
大きく体勢を崩しながらも、小刻みな左ジャブを連打する古城。その渾身の連続攻撃は、牙城の動きに翻弄されて虚しく空を切る。

それでも牙城は、少し感心したように唇を吊り上げて笑い、
「ほー……しばらく会わないうちに、いい動きをするようになったじゃねえか。さすがは俺の息子だな。まあ、まだまだだけどな」
「なっ!?」
牙城の予期せぬ行動に、雪菜ですら不意を衝かれて反応が遅れた。いつの間にか牙城の手の中には、テーブルの隅に置かれていたはずのタバスコの瓶が握られていたのだ。
そして古城の死角から、牙城は瓶の中身を思いきり息子の顔面へとぶちまけた。
このタイミングで、飛来する液体のすべてを完全によけるのは、吸血鬼の反応速度をもってしても不可能だ。タバスコをもろに眼球に浴びて、古城はたまらずのたうち回る。
「ぐおおおおっ……目があっ、目があっ！」
「せ、先輩……!?」
雪菜が素早く立ち上がり、濡らしたおしぼりを持って古城に駆け寄った。
甲斐甲斐しく古城の介抱を始めた彼女を、牙城は、興味深そうに無言で観察する。
「――ちょっと!?　なにやってるの、古城君!?　牙城君!?」
キッチンから駆けつけてきた凪沙が、タバスコの飛び散った部屋の惨状を見て絶句する。
充血した目をこすりながら、古城はよろよろと上体を起こして、
「くっそ……おまえ、本当にいったいなにしに来たんだよ!?　普段は頼んでも帰ってきやがら

ないくせに！」

「だから、凪沙を迎えに来たんだよ。な」

そう言って牙城は、娘の頭にポンと手を置いた。

凪沙はそのままの姿勢で父親を見上げて、拗ねたように頬を膨らます。

「もう、来るなら来るって、もっと早く言ってよね。凪沙にもいろいろ予定があったんだから。牙城君のぶんの晩ご飯の材料も買ってこなきゃだし」

「……凪沙をどこに連れてく気だ？」

どうにか視界を取り戻した古城が、牙城を睨め上げて低い声で訊いた。

牙城はこれまでにも何度か、凪沙を自分の仕事に利用したことがある。以前、凪沙が事故に遭ったのも、元はといえば牙城に呼びつけられたことが原因なのだ。

さすがに凪沙が入院してからは、そんな横暴もなりを潜めていたが、だからといって油断はできない。古城には父親を警戒する理由がある。

しかし牙城は、敵意を剝き出しにした息子を呆れ顔で眺めて、

「あのなあ、季節を考えろよ。帰省だよ、帰省」

「……帰省？」

想定外の牙城の言葉に、古城は肩透かしにあったような気分で沈黙した。

たしかに年末年始といえば、世間一般では帰省の時期である。本土から遠く離れたこの絃神

島でも、そろそろ帰省ラッシュが始まるはずだ。
「もうすぐ正月だろ。丹沢の婆さんが、たまには帰ってこいってうるせーんだよ。去年までは凪沙が入院してて、それどころじゃなかったしな。明日の朝イチの飛行機だからな」
「なんだよそれは……いきなりだな。俺、なんも準備してねーぞ」
古城が仏頂面で文句を言う。
牙城の母親、すなわち古城たちの祖母は関東在住。丹沢の奥地にある小さな神社で神職のようなことをやっている。彼女に会いに行くことには不満はないが、それにしてもやはり唐突な印象はぬぐえない。が、
「あ？　誰がおまえを連れてくっていったよ」
息子の抗議を、牙城はあっさりと受け流してそう言った。
「帰んのは俺と凪沙だけだ。深森さんは婆さんと仲悪ィしな」
「凪沙だけ!?」
「当然だろ。この時期、本土までの航空チケットがいくらすると思ってんだ？　絃神島の離島許可証だって安くねーんだぞ」
「ぐ、ぐぬ……」
牙城の現実的な説明に、古城は反論の言葉を失う。
空港の発着枠が限られていることもあって、絃神島から本土までの航空運賃は高い。繁忙期

ともなると尚更だ。おまけに〝魔族特区〟である絃神島への出入りには、面倒な手続きが必要で、その手数料も別途加算されることになる。牙城の言い分ももっともだ。

「それに凪沙を連れて帰るのにはワケがあんだよ。あいつを一度、婆さんに祓ってもらおうと思ってな。凪沙の霊能力が消えた原因、一度ちゃんと調べておいたほうがいいだろ？」

「あ、ああ……そうか……そうだな」

古城は渋々と父親の言葉を受け入れた。今となっては古城たち家族しか知らないことだが、かつての凪沙は国内でも指折りの強力な霊能力者だったのだ。

彼女が霊能力を失うことになったきっかけは、四年前の魔族がらみの事故である。

事故の傷もどうにか癒えて、無事に退院した凪沙だが、彼女の力は失われたままだ。その原因は今も不明。凪沙本人は能力を失ったことをまったく気にしていないのだが、一方で彼女を時折襲ってくる謎の体調不良のこともある。古城としても、信頼できる霊能力者に凪沙を調べてもらうことには賛成だった。

「待ってください、先輩。凪沙ちゃんを本気で調べるなら、獅子王機関に任せたほうが――」

雪菜が小声で、古城の耳元に囁いてくる。いつになく真剣な表情だ。

自身も優秀な霊能力者である雪菜は、除霊の危険性をよく知っている。素人が手を出して、凪沙に悪影響が出る可能性を懸念しているのだろう。

「ああ、いや、たぶん大丈夫だと思う。心配してくれるのはありがたいけど、前も言ったろ。

うちの祖母さんは未登録の攻魔師もやってたって。その手の仕事には慣れてるから」

「……だったら余計に危険かもしれません。嫌な予感がするんです。わたしの想像が間違ってなければ、凪沙ちゃんに憑いているのは、もしかしたら先輩の――」

「ん？　古城のなにがどうしたって？」

雪菜の言葉を無理やり遮って、牙城が会話に割りこんでくる。

うっ、と驚いて黙りこむ雪菜。それでも牙城はしつこく雪菜の顔をのぞきこみ、

「なになに、なんの話？　おじさんにも聞かせてくれないか？」

「あ、あの……いえ、すみません。なんでもないんです」

ついに牙城のプレッシャーに敗北した雪菜が、言葉を濁して古城から離れた。

なおも強引に雪菜に詰め寄ろうとする父親の襟首を、いい加減にしろ、と古城がつかんで止める。牙城は、ちぇ、と残念そうに肩をすくめて、

「まあ、心配要らないよ。祖母さん本人の霊視の腕はともかく、正月だし、弟子連中も遊びに来てるだろうからさ。刻御門のハゲとか、志渡澤のオッサンとか」

「と、刻御門師範……!?　それに志渡澤会長ですか？」

二人の名前を聞いた瞬間、雪菜が表情を強張らせた。

「知り合いか？」

怪訝な口調で古城が訊く。雪菜は慌てて首を横に振り、

「獅子王機関の元主席教官と攻魔師協会の会長です。とてもわたしが会えるような立場の方々ではないんですけど――」

「へえ……あのオッサンたち、偉い人だったんだな」

古城が感心したように呟いた。雪菜はただ呆然と首肯する。しかし、凪沙の除霊についての雪菜の不安は、いちおうの解決を見たらしかった。それだけの実力者が近くにいるのなら、雪菜としても、凪沙の除霊にあえて反対する理由はないのだろう。

その古城と雪菜のやりとりを、牙城は何喰わぬ表情で眺めていた。

そしてなにを思ったのか、彼は、突然身を乗り出して真顔で雪菜を見つめ、

「ところで、姫柊ちゃん。ここからは真面目な相談なんだが――」

「は、はい」

牙城の真剣な視線に気圧されて、雪菜が思わず姿勢を正す。

その瞬間、牙城は、ニヤリと相好を崩し、

「俺、孫の顔が早く見たいんだよね。どうせなら、女の子がいいかな――」

「はい？」

言葉の意味が理解できずに凍りつく雪菜のすぐ横を、砲弾のような勢いでなにかが駆け抜けた。古城が父親の顔面を目がけて、思いきりクッションを投げつけたのだ。

ゴッ、とクッションの直撃を顔面に喰らって、隙だらけだった牙城の上体が仰け反る。

「……危ねえなあ、小僧。実の親に手を上げるなよ」
赤くなった額をさすりながら、のんびりと抗議する牙城。そんな父親に向かって、古城は追い打ちの跳び蹴りを放ち、
「うるせえ、黙れ！　殺すぞ、セクハラ中年！」
「ま、おまえには無理だな。十年早ェ」
牙城は落ち着いて息子の蹴りをいなすと、そのまま古城の足首の関節を極めてみせた。
凄まじい激痛に襲われて、古城は為すすべもなく床に倒れ伏す。
「痛だだだだ！」
「ちょっ……!?　なにやってるの、古城君！　牙城君！」
突然暴れ出した男たちに気づいて、慌てて止めに入ったのは凪沙だ。
「こ……これが、先輩のお父様……」
いまだに半ば硬直したままの雪菜は、その光景に圧倒されながら、弱々しく呟くだけだった。

4

翌日――
早朝の絃神島中央空港で、私服姿の古城は大きなあくびを洩らしていた。

時刻は午前七時前。夜行性である吸血鬼にとっては、一日でもっともつらい時間帯である。そんな状態で空港まで来たのはもちろん、朝イチの飛行機で本土に出発する凪沙の見送りと、今イチ信用できない父親の監視が目的だった。

水平線からのぞく太陽が、ガラス張りの空港ロビーを眩く照らし出している。紘神島は今日も暑くなりそうだ。

「じゃあ、まあ、ちょっくら行ってくるわ。姫柊ちゃんと仲良くな」

「うるせえな。いいからさっさと行け」

色褪せたトレンチコートを着た牙城が、冷やかし半分の口調で息子に声をかけ、古城はそんな父親を鬱陶しげに睨みつける。

飛行機の出発予定時刻まではあと一時間足らず。〝魔族特区〟特有の面倒な検疫検査のことを考えると、そろそろ手荷物検査のゲートをくぐらなければならない頃合いだ。

一方の凪沙は、古城と一緒に見送りにきた雪菜と、和やかな別れの挨拶を交わしている。

「気をつけてね。本土は寒いみたいだし」

祖母への土産を大量に抱えた凪沙を気遣って、雪菜が言う。どことなく雪菜の表情が疲れてみえるのは、その土産を選ぶための空港中の売店巡りを凪沙につき合わされたせいである。

ありがとね、と凪沙は朗らかに微笑んで、

「雪菜ちゃんのほうこそ心配だなあ。古城君が迷惑かけなきゃいいけど」

「ん、大丈夫。先輩のことは、ちゃんと見張っておくから安心して。藍羽先輩や結瞳ちゃんを困らせたりしないようにするから」

力強い決意をこめて雪菜がそう答える。

雪菜が少しでも目を離すと、すぐに見知らぬ女性と知り合って、血を吸ったり死にかけたりするのが〝第四真祖〟暁古城だ。凪沙がしばらく不在になるぶん、自分がもっとしっかり彼を監視しなければ、とあらためて心に誓う雪菜である。

しかし凪沙は、そんなふうに張り切る雪菜を、ますます不安そうな表情で眺めて、

「……あのね、雪菜ちゃん。ミイラ取りがミイラになるってことわざ、知ってる？」

「え、うん。え……？」

どうしてそんなことを言うのか、と軽く困惑する雪菜。そんな雪菜の無自覚な反応に、凪沙は、あきらめたように溜息をついた。

空港のロビー内に、乗客の手荷物検査を促すアナウンスが流れてくる。

「わ、じゃあね。行ってきます！　雪菜ちゃんも古城君のこと、あんまり甘やかさないでね。古城君も雪菜ちゃんに無理やり変なことしちゃ駄目だよ！」

「あ、甘やかしてないから！」

「するかっ！」

思わず乱暴に言い返しながら、古城たちは検査ゲートへと向かう凪沙と牙城を見送った。

騒々しい父娘の姿が見えなくなると、急に空気が薄くなったように周囲が静かになる。
「やれやれ、朝っぱらからつき合わせて悪かったな、姫柊」
古城が気怠げに背伸びしながら雪菜に言った。
雪菜はいつもの生真面目な表情で首を振り、
「いえ、先輩の監視がわたしの任務ですから」
「まあ、そうなのかもしれないけど、うちの父親にもずいぶんからかわれてたみたいだし」
「そうですね……いくらなんでも、さすがに彼女と思われたままというのは、その……」
うっすらと頬を赤らめながら、雪菜は照れたようにうつむいている。
しかし古城は、心底迷惑そうに小さく舌打ちして、
「あいつの冗談は昔っから笑えないんだよな。くだらなすぎて」
「冗談ですか……そうですか……くだらないですか」
雪菜の瞳から光が消えて、表情が暗く凍りつく。
古城は、そんな雪菜の変化に気づかないまま明るく笑い、
「悪かったな、嫌な思いをさせて。姫柊は彼女なんかじゃないって、あいつが帰ってきたらきっちり言い聞かせておくから、今回は許してやってくれ」
「そうですか。よくわかりました」
「あ、ああ？」

「彼女なんかじゃないただの後輩のせいで、ご迷惑をおかけしてすみませんでした」
「あ、おい。姫柊……？」
自分を置き去りに突然早足で歩き出した雪菜を、古城は慌てて追いかける。
「もしかしてなんか怒ってるのか？」
「いえ、全然」
立ち止まった雪菜が、なぜか恨みがましい視線を古城に向けてくる。
もちろん古城には、その原因がわからない。牙城にあれこれ冷やかされたことが、よっぽど嫌だったのだろう、と他人事のように考える。
「ところで、気のせいかもしれないけど、今日はやたらみんなピリピリしてないか？」
「だから怒ってませんってば」
「いや、姫柊のことじゃなくて。ほら、空港警備の連中とか」
「え……？」
古城の呟きを聞いて、雪菜がようやく足を止めた。
実は空港に着いた直後に気づいたことだ。おそらく雪菜にもわかっていたはずだ。
出発ゲートや出入り口を見張る空港職員の数が、普段に比べてずいぶん多い。彼らの表情や仕草から、厳重に警戒しているという雰囲気が伝わってくる。
「そう……ですね。もしかしたら、あれが原因かもしれません」

そう言って雪菜は、空港の待合所に置かれている大型テレビを指さした。
テレビの画面に映し出されているのは、衛星中継とおぼしき目の粗い映像だ。
日本語字幕のない、海外のニュース映像である。見知らぬ外国の街を背景に、砲撃や爆弾によって傷ついた建物や負傷者の姿が見える。
「あれ……って、戦争か？」
表情を険しくした古城の隣で、はい、と雪菜がうなずいた。
獅子王機関で専門教育を受けた雪菜は、すでに高校卒業程度の学力を持っている。ニュースで使われている程度の英語なら、普通に聞き取ることができるらしい。
「〝混沌界域〟で、内戦が起きているようですね。アメリカ連合国との国境付近に配備されていた軍の部隊が武装蜂起して、自治独立を求めていると言ってます」
「〝混沌界域〟……？」
聞き覚えのあるその地名に、古城が眉を寄せた。
「それって、あのジャーダって女がいる国じゃなかったか？」
「はい。第三真祖〝混沌の皇女〟が支配する、中南米エリアの夜の帝国です」
「……そうか……なんか意外だな」
翠玉色の髪と翡翠色の瞳を持つ美しい吸血鬼の姿を思い出し、古城がぼそりと独りごちた。
公式に存在を認められた、わずか三人の真祖の一人――ジャーダ・ククルカン。古城が彼女に

遭遇したのは、ほんのひと月ほど前のことである。常軌を逸した彼女の戦闘能力と、凄まじいまでのカリスマ性は、身に沁みてよくわかっている。

「意外？」

「ああ。だって反乱が起きるってことは、国民に不満が溜まってるってことだろ？　あいつ、もしかして、いわゆる暴君ってやつなのか？」

そうは見えなかったけどな、と古城は首を傾げた。

古城が出会った第三真祖は、真祖を名乗るのに相応しい圧倒的な威厳と力を備えていたが、話の通じない怪物という感じではなかった。むしろ計算高さと茶目っ気を感じさせる人間臭い吸血鬼だったという印象がある。魅力的な人格と表現しても、そう的外れではないだろう。

そんな古城の感想を裏付けるように、雪菜が小さく首を振り、

「いえ、たしかに真祖は、それぞれの夜の帝国の名目上の統治者ですけど、直接、国を治めているわけではないんです。議員選挙や官僚試験も行われているはずですし、そもそも第一真祖や第二真祖は、何十年も国民の前に姿を現していませんから」

「そうなのか？」

古城はますます困惑を覚える。だが、いわれてみれば、古城は、第一真祖や第二真祖の顔を知らない。写真などでも目にした記憶がなかった。

「そんな中で〝混沌の皇女〟だけは、普段から帝国内をうろつき……いえ、視察して回ったり、

平民にも気さくに声をかけたりするということで、国民から熱狂的な支持を受けてるはずなんです。国内の治安や経済状態も決して悪くないはずですし。そのぶん監視役の方々は苦労されているみたいですけれども――」

途中でうっかり本音を洩らしつつも、雪菜が丁寧に説明する。

なるほどな、と納得する古城。やはり古城がジャーダに対して抱いた第一印象は、それほど間違ってなかったらしい。それだけに、やはり〝混沌界域〟の現状には違和感がある。

「だったら、どうして反乱なんかが起きるんだ？」

「それは、おそらく――」

言いかけた雪菜が、なにかに気づいたように不意に言葉を切った。

驚いている彼女の視線を追って、古城も何気なく背後へと顔を向ける。

空港の中央入り口から、到着ロビーへと向かう通路である。

そこに立っていたのは、左腕に魔族登録証を嵌めた銀髪の男だ。冷たい刃物を連想させる美しい少年。古城もよく知っている相手だった。どちらかといえば会いたくない側の人物だ。

「あ!?　おまえ――」

「先輩、下がって！」

驚く古城を庇うように、雪菜が素早く前に出た。背中のギグケースに手をかけて、いつでも槍を抜けるよう身構える。

銀髪の少年は、そんな雪菜と古城の反応を、蔑むように眺めて嘆息し、
「貴様か、暁古城。相変わらず小娘の尻に敷かれているようだな」
挑発的な口調でそう言った。
それを聞きつけた古城と雪菜が、同じタイミングで怒鳴り返す。
「敷かれてねえ！」
「敷いてません！」
完全にハモった二人を見つめて、ふっ、と銀髪の少年が冷淡に笑った。
古城はそんな彼を、敵意剝き出しで睨みつけ、
「おまえ、ヴァトラーの船にいた、キラくんの相方の吸血鬼の――」
「トビアス・ジャガンだ！　いい加減に覚えろ！」
今度は銀髪の少年が怒鳴り返す番だった。
トビアス・ジャガンは欧州〝戦王領域〟出身の貴族。第一真祖〝忘却の戦王〟直系の、旧き世代の吸血鬼である。
同じく〝戦王領域〟の貴族である〝アルデアル公〟ディミトリエ・ヴァトラーの側近として、この絃神島に滞在しているが、立場的には古城の敵に近い。さらには個人的にも、なぜか古城を憎んでいるような素振りがある。とにかく油断のならない吸血鬼なのだった。
「なんでおまえが、こんなところにいるんだよ!?」

雪菜の肩越しにジャガンを睨んで、古城が訊いた。
しかしジャガンは嘲るように鼻を鳴らし、
「俺が貴様の質問に答える義理などあるか、馬鹿め」
「ああ!?」
激昂した古城が、ジャガンに詰め寄る。そんな古城を、雪菜は慌てて押し留めて、
「先輩、少し落ち着いてください！」
「……到着ロビーに向かってる……ってことは、誰かが来るのを待ってるのか？」
意外に冷静な古城の指摘に、ほう、とジャガンが目を細めた。
古城が見せた抜け目のなさに、警戒しているような表情だ。
「ふん。貴様にもいちおう幼稚園児程度の知性はあったわけか……驚いたな」
「驚くなっ！」
本気で感心しているようなジャガンの口調に、古城の苛立ちがさらに増す。
しかしジャガンにはもうそれ以上、古城の相手をするつもりはないらしかった。
「退け、邪魔だ」
道を遮る古城たちを強引に押しのけて、ジャガンはそのまま通路を歩き出す。
だが彼は、途中で思い直したように足を止めて振り返り、不承不承といった表情で口を開いた。感情と理性が葛藤して、かろうじて理性が勝ったという雰囲気だ。

「いいか、暁古城。俺の用件は貴様との不毛な戦闘じゃない。この島にも直接の関係はない」

「え？」

「だから余計な心配をせず、おとなしくしていろ。少なくとも閣下が戻ってくるまではな！」

一方的にそれだけ言い残し、彼は今度こそ古城たちを無視して歩き去っていった。

遠ざかる彼の背中を睨みつけながら、なんだあいつ、と古城は肩をすくめる。

「閣下ってのはヴァトラーのことか？　戻ってくるまでってどういう意味だ？」

「わかりません……まるでアルデアル公が絃神島にいないような口振りでしたけど……」

雪菜が静かに目を伏せて考えこむ。そして彼女は、なにか思い出したように顔を上げ、建物の外に向かって走り出した。古城はわけがわからないまま彼女を追う。

雪菜が向かっていたのは、海に面した空港内の展望スペースだ。

「先輩、あれを――」

そう言って雪菜は、港湾地区の大桟橋を指さした。中央空港と並ぶ絃神島の玄関口であり、人工島東地区の象徴にもなっている巨大な国際客船ターミナルだ。

その周囲には、今も数多くのクルーズ客船が停泊している。

中でもひときわ目立つのが、ディミトリエ・ヴァトラー所有のメガヨット〝オシアナス・グレイヴⅡ〟だった。個人所有の船としては破格の、軍用駆逐艦に匹敵する規模の外洋クルーズ船である。

だが今は、その荘厳な城のようなメガヨットの姿はない。
見逃すはずもない巨大な船の姿が、絃神港から消えている。
古城たちの気づかないうちに、〝オシアナス・グレイヴⅡ〟は出港していたのだ。船主であるヴァトラーを乗せて、何処かへと。
「ヴァトラーの船が……ない？」
古城は呆然と呟いた。
〝混沌界域〟の内戦。そしてジャガンの謎の行動。不吉な出来事が続いたせいか、ヴァトラーの不在という喜ばしいはずの事実が、逆に古城を不安にさせる。タイミングが悪すぎる。
だからといって、ヴァトラーの真意を確かめるすべは古城にはない。
「……」
隣にいる雪菜と顔を見合わせて、どちらからともなく溜息をつく。
どうやら古城たちは、ヴァトラーがいてもいなくても、彼に振り回される運命らしかった。

5

結局、古城たちがマンションに戻ってきたのは、正午近くになってからのことだった。
空港でジャガンを探したり、大桟橋に行って〝オシアナス・グレイヴⅡ〟の所在を確かめて

いるうちに、時間が過ぎてしまったのだ。
しかしヴァトラーの行方については、最後まで手がかりがつかめないままだった。ネットにアクセスしても、獅子王機関に問い合わせても、詳細は不明。
結果的に古城たちは、まったく無駄な時間を使ってしまったことになる。
そして現在――

暁家のキッチンで無骨なコンバットナイフを構える雪菜を、古城は困惑の表情で眺めていた。

「ここはわたしがやります。先輩は、先に行ってください――」
そう言って雪菜は、ガッ、と乱暴にナイフを振り下ろす。
研ぎ澄まされた刃が喰いこんで、肉の塊が音もなく裂けていく。
「駄目だ。姫柊一人に任せておけるわけないだろ！」
そう言って古城は彼女を懸命に制止する。
古城の右手に握られているのも鋭利な刃物。ステンレス製の万能包丁だ。
「どうしてわたしに任せてくれないんですか!?」
雪菜がめずらしく感情をあらわにして古城を睨む。彼女の手元では、銀色の両手鍋が、弱

火のコンロにかけられたまま、コトコトと音を立てている。
「姫柊こそ、その手に持ってるマヨネーズをどうする気だ!?」
「か、隠し味です！」
エプロン姿の雪菜が、マヨネーズを後ろ手に隠したまま、ギクッと肩を震わせた。
古城は器用な手つきで、大根を薄くかつら剝きにしながら、
「いや、変だろ！　肉じゃがだぞ！」
「マヨネーズには高い栄養価があるんです。遭難した登山者が、持っていたマヨネーズを舐めることで空腹に耐えて生還した例もあるんですから！」
「その喩えは全然わけがわからねえよ！」
必死の説得が功を奏したのか、雪菜が渋々とマヨネーズを置く。
それを見て、古城はホッと安堵の息を吐いた。
時刻は午後零時四十分。少し遅めの昼食の準備中である。
凪沙がしばらく不在ということもあり、古城はレトルトやコンビニ弁当で適当に済ませるつもりだったのだが、雪菜がそれに反対したのだ。
出来合いの食品だけでは栄養が偏るというのがその理由である。どうやら雪菜は、凪沙がいない間の古城の健康管理は、自分の責任だと思いこんでいるらしい。
もちろん自炊という選択自体には、古城もそれほど不満はないのだが――

「だからって、姫柊が無理に俺を手伝う必要はないんだって。最近は凪沙に任せっきりだけど、中学のころは俺もそれなりに料理をしてたし」

「いえ、わたしも料理については、獅子王機関でサバイバル訓練を受けてますから」

任せてください、と得意げに答えてくる雪菜。彼女が包丁代わりにコンバットナイフを振り回しているのは、どうやらその訓練とやらに原因があるらしい。

「まあいいや。肉じゃがの味付けはあとにして、姫柊は刺身を盛りつけてくれ」

「わかりました。では」

古城が差し出した皿を受け取って、雪菜はコンバットナイフを置いた。

代わりに彼女が手に取ったものを見て、古城は一瞬、我が目を疑い、

「ちょっと待て！　なんでそこでマヨネーズを握る！」

「……ケチャップのほうがよかったですか？」

「どっちもやめろ、目玉焼きじゃないんだから！　せめて俺のぶんだけは――」

「ふふっ、冗談です。わたしもそこまで味オンチではありませんから」

本気で焦りまくる古城を見て、雪菜がクスクスと悪戯っぽく笑った。

「……勘弁してくれ」

古城は脱力して頼りなく息を吐く。相変わらず雪菜の冗談はよくわからない。

さすがにやり過ぎたと思ったのか、それからしばらくは、雪菜も真面目に料理の盛りつけに

集中していた。古城も黙々と大根を剝く。

静まり返ったキッチンに肉じゃがの煮える音と、二人の作業する音だけが響いている。

その静寂が、密室に二人きりである、という現状を、不意に古城たちに意識させた。

「な、なんだか、凪沙ちゃんがいないと静かですね」

なぜかぎこちない口調で、雪菜が言う。彼女なりに緊張を和らげようとしたのかもしれない。

しかし言葉にしてしまったせいで、凪沙がいない、という事実があらためて古城たちの意識に刻みこまれる結果となった。そう。今日はもう凪沙は帰ってこない。夜まで二人きりなのだ。

「あ、あいつは口数が多すぎるんだよな。そのぶん、いなくなると余計にな……」

冷静になれ、と古城は自分に言い聞かせる。

雪菜と二人きりになったからといって、今さら特別に意識する理由はないはずだった。雪菜は第四真祖の監視役。こうして古城の傍にいるのは、それが彼女の任務だからだ。

古城が緊張する理由はない。にもかかわらず、いつになく雪菜を意識してしまうのは、牙城が昨日、孫の顔が見たい、などと馬鹿げたことを口走ったせいだと思う。

「ったく、なにが孫だ、あの阿呆……」

古城が無意識に口の中でうめいた。雪菜が、ぎくっ、と怯えたように身を硬くして、

「ま、孫……？」

「いや、ち、違う！　まご……そう、卵！　冷蔵庫に卵が余ってたから、早めに使ったほうが

いいんじゃないか、と思ってな」

「な、なるほど」

雪菜が強張った笑顔でうなずいた。

いちおう警戒は解けたようだが、一度ぎくしゃくとしてしまった居心地の悪い空気はそのままだ。そのぎこちなさが気になって、ますます緊張感が高まってしまう。

「あ、悪い」

布巾を取ろうとした古城の指先が、同じく布巾に手を伸ばしていた雪菜の手に触れた。

互いの手と手を重ねたまま、古城と雪菜は動きを止める。

「す、すみません！」

「いや、こっちこそ」

硬直した身体を無理やり動かして、古城と雪菜は手を離す。ほんの一瞬の出来事が、異様に長く感じられた。再び襲ってきた沈黙が重い。

「テ、テレビでもつけるか」

「そ、そうですね」

静寂に耐えきれなくなった古城たちは、そう言ってリビングに移動する。たまたま最初に映ったチャンネルでは、二人が空港で見たのと同じ、海外のニュース映像が流れていた。

「内戦か……」

過酷な現実を目の当たりにして、古城はようやく頭が冷えていくのを感じる。

遠い外国での出来事とはいえ、古城の同類である吸血鬼の真祖が絡んだ戦争だ。自分は無関係だと割り切る気にはなれない。

不幸中の幸いといえるのは、内戦といっても、まだ全面的な武力衝突の段階ではないということだった。市民に犠牲が出たという報告は、今のところ聞こえてきていない。

「そういえば、さっきの話だけど、この反乱が起きてる理由ってなんだったんだ？」

画面を凝視したまま、古城が訊いた。空港で雪菜が言いかけていた情報だ。

「国境紛争です。おそらく、ですけど」

「……国境紛争？」

「はい。北米大陸には、〝混沌界域〟以外にも、アメリカ連合国と北米連合というふたつの大国がありますよね。直接〝混沌界域〟と国境を接しているのは、アメリカ連合国だけですけど」

「ああ……そういや地理の授業でやった気がするな」

古城はうろ覚えの世界地図を思い出す。

アラスカから五大湖周辺までの各州で構成される北米連合と、大陸中央部を版図とするアメリカ連合国。そして北米大陸南岸から中米、カリブ海地域を支配する〝混沌界域〟――それら三国が北米大陸を構成する主要な国家だ。

「〝混沌界域〟とアメリカ連合国の国境近くには、大量の地下鉱物資源が埋蔵されてるといわれてます。なので、国境地帯の帰属をめぐって両国の間では何度も争いが起きてるんです。ただし、背後に北米連合があるせいで、アメリカ連合国としては大規模な戦争を仕掛けるわけにはいきません」

「挟み撃ちされるとまずいから、ってことか」

古城は、雪菜の説明の意図を理解する。

アメリカ連合国の背後には、強大な北米連合が控えている。〝混沌界域〟との戦争によって消耗すれば、不利になるのはアメリカ連合国だ。

「はい。ですからアメリカ連合国は、〝混沌界域〟内の反乱分子をそそのかして内戦を引き起こしたのだと思います。いくら〝混沌の皇女〟の人気が高いといっても、夜の帝国の内部には、吸血鬼に支配されることを快く思っていない獣人優位主義者や、自治独立を求めている少数民族もいますから」

「隣のアメリカ連合国が、反乱軍の黒幕ってわけか……いわれてみれば、ありそうな話だな」

古城は大げさに顔をしかめてうなずいた。

そういう理屈なら、第三真祖が支配する〝混沌界域〟で反乱が起きた理由もわかる。

どれだけ王が善政を施しても、不平不満を抱く輩は必ず出現するものだ。そんな連中に敵対国家が接触し、武力や資金を与えれば、反乱をそそのかすのは容易だろう。

「そうですね。ただ、ひとつだけ気になることが――」
「え？」
「いくらアメリカ連合国（CSA）からの資金援助や武器供与があったとしても、第三真祖が本気になれば、地方都市に駐留する程度の部隊なんて、一人で簡単に壊滅できるはずなんです。夜の帝国（ドミニオン）の軍人が、真祖の恐ろしさを知らないはずがないのに――」
不安げに表情を沈ませて、雪菜が言う。彼女のその言葉で、古城も気づいた。
「それでも反乱を起こした……ってことは……」
「はい。なにか真祖に対抗できるだけの切り札を彼らが手に入れたということではないかと」
「そう……か……」
古城はふとクリストフ・ガルドシュという男のことを思い出す。
黒死皇派（こくしこうは）を名乗るテロリストの残党。彼らは、〝戦王領域（せんおうりょういき）〟を支配する第一真祖に対抗するため、古代兵器ナラクヴェーラを手に入れようと画策（かくさく）していた。
結果的にガルドシュの計画は失敗したものの、たしかにナラクヴェーラの戦闘（せんとう）能力は脅威（きょうい）だった。真祖に対抗できるという触れこみも決して嘘（うそ）ではなかった。藍羽浅葱（あいばあさぎ）の機転がなかったら、たった数機のナラクヴェーラのせいで絃神島（いとがみじま）は壊滅していたはずだ。
〝混沌界域〟の反乱軍が、ガルドシュと同様に真祖への叛逆（はんぎゃく）を目論（もくろ）んでいるのだとしたら、彼らがナラクヴェーラに匹敵する兵器を所有していたとしてもおかしくはない。雪菜はそのこと

を恐れているのだろう。と、

「せ、先輩、お鍋が！」

物思いに耽っていた古城の傍で、雪菜が叫ぶ。ふと見れば、コンロにかけっぱなしだった肉じゃがの鍋が、ぐつぐつと煮えたって吹きこぼれていた。

「やべっ……って、熱っち！」

「先輩!?」

慌ててコンロに駆け寄って火勢を弱めようとした古城が、うっかり鍋の蓋に触れてしまう。それを見た雪菜が息を呑み、

「大丈夫ですか!?　すぐに冷やさないと――」

「あ……いや、大丈夫だろ。このくらいの火傷ならすぐ治るから……」

「駄目です。いくら吸血鬼だからって、きちんと応急処置をしておけば、治癒するまでの時間も短くなるんですから――」

渋る古城の手を引いて、強引に流し台の前まで連れて行く雪菜。

図らずも雪菜と密着することになった古城を、再びさっきまでの緊張が襲ってくる。

「先輩？　どうしたんですか？」

身体を硬くした古城を見上げて、雪菜が怪訝顔で訊いてきた。

至近距離にある彼女の大きな瞳から、古城は思わず目を逸らし、

「いや、姫柊と二人きりでキッチンに立ってるのは、なんか変な気分だな、と思って――」

「ふ、二人きり……」

実質的に古城に背中を抱かれている自分自身の体勢に気づいて、雪菜の頬がカーッと紅潮する。しかし治療中という名目のため、古城を突き放して離れることもできない。

古城の目の前にあるのは、後ろ髪を束ねた雪菜の真っ白な首筋だ。

雪菜の髪の甘い匂いが、古城の鼻腔を刺激する。背中越しに彼女の心臓の鼓動が伝わってくる。緊張の気配はあるものの、雪菜に抵抗の素振りはない。激しい喉の渇きを覚えて、古城はゴク、と唾を呑む。そして、

ピンポーン――

「う、うおっ!?」

「ひゃっ!?」

突然鳴り響いたインターフォンのチャイムの音に、古城たちは電流に打たれたように離れた。緊張から解放された二人が、同時に大きく息を吐く。ドクドクと耳元で脈打つ心臓の鼓動がやかましい。古城は照れ隠しのように、玄関の方角を不機嫌そうに睨みつけ、

「誰だよ、こんな時間に――」

「荷物の配達みたいです。出ましょうか？」

「いや、いいよ。俺が出る」

エプロンを外そうとした雪菜を制止して、古城は玄関へと向かった。

ロクに相手を確認もせずに玄関ドアを開けると、そこに立っていたのは、見慣れない制服を着た男性の配達員だった。彼の足元には、伝票を直に貼りつけた大型のスーツケースが置かれている。国際宅配便の伝票だ。

「お荷物のお届けにあがりましたー。こちらに受け取りのサインをお願いします」

「あ、はいはい」

配達員が差し出してきた伝票には、流麗な筆記体の英語で荷物の中身が記入されていた。かろうじて読み取れたのは、マンションの住所と古城の名前だけ。おそらく荷物の送り主は、牙城だろうと想像する。こんな怪しげな国際便を送ってくる人物にはほかに心当たりがない。

「毎度ー」

古城がぎこちなく署名を終えると、配達員は伝票を奪い取るような勢いでそのまま立ち去っていった。玄関に残されたのは巨大な荷物だけだ。

ずっしりと重い金属製のケースである。重量は百キロ近くありそうだ。吸血鬼化した古城の腕力をもってしても、片手で持ち運ぶのは少々厳しい。

「なんだ、このでかいスーツケース……えーっと……っ!?」

荷物の隣に屈みこんで、古城はもう一度伝票を確かめる。

そして差出人の名前を解読し、古城は、うげっ、と嗄れた悲鳴を上げた。

「ちょっと待ってくれ！　この荷物は要らない。ていうか、持って帰って欲しいんだけど！」

裸足のまま玄関を飛び出して、古城が配達員に呼びかける。しかしマンションの通路には、すでに配達員の姿はない。とっくに立ち去ってしまったあとだった。

「――って、もういねえし！　くそっ！」

古城は脱力して膝を突いた。差出人を確認しないまま、書類にサインしてしまった古城のミスだ。この荷物は、なんとしてでも受け取り拒否して、送り返すべきだったのだ。

「先輩？　どうかしたんですか？」

古城の様子がおかしいことに気づいて、雪菜が声をかけてくる。

苦悩するように頭を抱えながら、古城はスーツケースを指し示し、

「どうもこうもねえよ。見てくれよ、これ」

「……え!?　ディミトリエ・ヴァトラー……って、アルデアル公が送り主なんですか!?」

貼りつけられた伝票を見つめて、雪菜が表情を強張らせた。

そこに書かれていたのは、それほどまでに意外な人物の名前だったのだ。

スーツケースの送り主はディミトリエ・ヴァトラー――〝戦王領域〟出身の戦闘狂の吸血鬼だ。彼がわざわざ古城に送りつけてきたというだけで、この荷物の中身が、ろくでもないものだということは予想できる。

「うっかり受け取りのサインしちまったぜ。ああ、クソ、失敗した……」

「こ、困りましたね。送り返すにしても、アルデアル公の船は港にいませんでしたし……」

戸惑いの表情を浮かべて、雪菜が呟く。

ヴァトラーが暮らしていた巨大クルーズ船は、出港済みで現在は行方不明だ。スーツケースが国際便で送られてきたことを考えても、彼が日本国外にいるのは間違いないだろう。

「このまま見て見ぬふりをする……ってわけにもいかないよな」

表情を歪めながら、呟く古城。ヴァトラーが送りつけてきた荷物の中身など、知りたくもないというのが本音なのだ。しかし雪菜は諦観したようにうなずいて、

「そうですね。中身が確認できなければ対策の立てようもないですし、このまま開封しなければ安全という保証もありませんし」

「まあ、たしかにな……だからって開けた途端に爆発されても嫌だが……」

古城はそう言って、スーツケースに迷惑そうな視線を向けた。

雪菜は、そんな古城を励ますように真顔で首を振り、

「いえ、その心配は無用だと思います。どうせ先輩は全身をバラバラにされてもすぐに生き返るはずですし、呪いや魔術の類は〝雪霞狼〟とわたしがすべて無効化しますから――それを知っているアルデアル公が、そんな無駄なことをするとは思えません」

「理屈じゃそうかもしれないけど、あいつは自分が面白ければなんでもやるんだよ」

「いわれてみれば、たしかに……」

きっぱりと断言する古城に感化されて、雪菜も怯えたように唇を噛む。

「とはいえ、迷ってても仕方ないか。姫柊、頼む」

「はい」

古城が覚悟を決めたように立ち上がり、スーツケースをリビングへと運んだ。その間に雪菜は愛用のギグケースを開けて、中から銀色の槍を引っ張り出す。

獅子王機関の秘奥兵器、七式突撃降魔機槍――ありとあらゆる結界を斬り裂き、魔力を無効化する破魔の槍だ。たとえスーツケースに魔術的な罠が仕掛けられていたとしても、雪菜がその槍を起動している限り、周囲への被害は最小限で済むはずだった。物理的な攻撃に対しては、古城の眷獣がどうにかしてくれると祈るしかない。

雪菜の準備が済んだことを確認して、古城がスーツケースの取っ手に手をかける。

古城の魔力に反応したのか、それだけでケースのロックが解除された。やはりこのケースはヴァトラーが、古城だけのために送ってきたものなのだ。

「いくぞ。三……二……一……！」

ゼロ、のカウントともに、古城が勢いよくケースを開けた。

その瞬間、ケースの中から噴き出してきたのは、濃い純白の霧だった。

さすがにこの展開は想定外だ。雪菜も反応できずに戸惑っている。

「寒っ……なんだこれ!?　ドライアイスか!?」

純白の霧に包まれて、室内の温度が一気に低下した。しかし危険は感じない。異臭や刺激も特にない。ただやたらに冷たいだけである。スーツケースの内側にはびっしりと霜がこびりつき、迂闊に素手で触れれば肌が貼りつく。間違いなくケース内の温度は冷凍庫以下だ。

濃密な霧に阻まれて、ケースの中身はわからない。古城はケースの取っ手に手をかけたまま、為すすべもなく霧が晴れるのを待っていた。そして――

「下がってください、先輩！　この中にいるのは――！」

雪菜が、突然、槍の切っ先をケースに向ける。

冷たい霧の隙間からケースの中身がかすかにのぞく。凍えるような冷気の中、ケースに収められていたのは人間だ。小柄な美しい人影である。

「お、女……!?」

古城が呆然と呟いた。

ケースの中を満たしていた純白の霧が晴れ、その人影が完全にあらわになる。

きめ細やかな褐色の肌と、眩い太陽のような蜂蜜色の髪。しなやかな四肢と、幼さを残した顔立ち。そして引き締まった腰つきと、意外なほど豊かな胸の膨らみ――

ケースの中に横たわっていたのは、異国人の若い娘だった。一糸まとわぬ姿の美しい少女だ。

しかし彼女は動かない。まるで死んだように冷たく眠り続けている。

「な、なんでいつまでも見てるんですかっ!?」

少女に見とれていた古城の横っ面を、雪菜が掌底で張り飛ばした。
ぐほっ、と鼻先を押さえて古城が仰け反る。あまりにも理不尽な雪菜の仕打ちに、古城はさすがに怒りを覚えた。全裸の少女を見つめていたのは事実だが、この状況ではやむを得ない行為だと思う。どう考えても不可抗力だ。
「そんなこと言われても……あ……！」
抗議の声を上げようとした古城の鼻から、勢いよく鮮血が流れ出した。
古城の前にあるのは、素っ裸でケースの中に横たわる異国の少女だ。それを見下ろしながら鼻血を噴き出した古城を、雪菜がムッと睨みつける。
「先輩……」
「ち、違う。これは姫柊が俺を殴ったから――」
だらだらと鼻血を流しながら、古城が必死に言い訳する。
そんな古城を、雪菜は冷ややかな眼差しで眺め、
「いやらしい」
感情のこもらない平坦な声でそう言い捨てた。そして軽蔑したように溜息をつく。
なんでだあああっ、と思わず絶叫する古城。
そんな二人の見つめる中で、異国人の美しい少女は静かに眠り続けていた。

Visitors From Battlefield

1

家具の少ない殺風景な部屋の片隅に、シンプルなデザインのベッドがぽつんと置かれている。雪菜のマンションの寝室だ。

清潔なパステルブルーのシーツの上に横たえられているのは、スーツケースに詰めて送られてきた異国人の少女である。意識のない彼女を、古城の手元に置いておくわけにはいかない、と主張して、雪菜が自分の部屋に運びこんだのだ。

少女が身に着けているのは、古城が貸したTシャツと短パンだ。主に胸回りのサイズが原因で、雪菜の服を彼女に着せることはできなかったのだ。

人種の違いか、あるいは単なる個人差なのかはわからないが、バストサイズの戦闘力では、異国人の少女は雪菜を圧倒的に凌駕している。

そして、そんな異国人の少女の隣には、藍色の髪の小柄な人工生命体が、聴診器を片手に、ちょこんと座っていた。

世界で唯一の眷獣共生型人工生命実験体――アスタルテである。

「――体温正常。心拍数異常なし。外傷なし。背景脳波にシータ波及びデルタ波を検出。推定。睡眠深度ステージ3」

抑揚の乏しい平坦な口調で、人工生命体の少女が言った。
今日の彼女は、いつものメイド服の上に白衣という、ややマニアックな服装である。
本来は医療用の人工生命体として製薬会社で設計されたアスタルテは、医師免許保有者と同等程度の医療知識を、デフォルトで刷りこみされているらしい。そこで古城たちは彼女を呼んで、意識の戻らない異国人の少女の診察を頼んだのだった。
「どういうことだ、アスタルテ？」
困惑に眉を寄せながら、古城が人工生命体の少女に訊く。
アスタルテは無表情に振り返り、ぼそり、と答えた。
「熟睡中、です」
「……彼女は眠っているだけ、ということですか？」
雪菜の表情にも戸惑いが浮かんだ。
なにしろこの異国人の少女は、スーツケースに詰めこまれて、冷凍されて、宅配便で送られてきたのである。そこまでされて命があっただけでも、普通に考えれば奇跡に近い。不老不死といわれる吸血鬼でも、そんな無茶に耐えられる個体は多くないはずだ。
しかしアスタルテは、淡々と事実だけを指摘する。
「肯定。魔術や薬物による昏睡ではありません」
「容れ物のほうに、なにか仕掛けがあったってことか？」

「そうですね。おそらく」

部屋の片隅に立てかけたスーツケースを眺めて、雪菜が古城の呟きに同意する。

生きたままの人間を封印し、開封後は瞬時に蘇生させる――見た目に反して、かなり高度な技術で造られたシステムだ。それなりの費用もかかっているはずだ。

いくら酔狂なヴァトラーといえども、意味もなくそんな高価なケースを使って、古城宛に、ただの女の子を送ってくるとは思えない。

「アスタルテ、ほかになにかわかることはないか？　こいつの正体や、身元が特定できそうな情報があるとありがたいんだが。たとえば、特殊な魔族だったりとか――」

「否定。患者の生体パターンは既知のいかなる魔族とも一致しません」

期待をこめた古城の質問に、アスタルテはあっさり首を横に振った。

少女が、結瞳のような稀少な魔族であるという可能性も、これで否定されたことになる。

「人種的には、ラテンアメリカ先住民族およびヨーロッパ系コーカソイドの特徴が確認できます。肉体年齢は十五歳。健康状態は良好。身長百六十一センチ。体重四十六キロ。スリーサイズは上から八十六――」

「待て待て！　そういう生々しい数字はいいから！」

少女の個人情報を明かそうとしたアスタルテを、古城が慌てて制止した。

するとアスタルテは、少し意外そうに首を傾げて、

「質問。それらの数値はすでに確認済みということでしょうか？」
「まさか……！」
雪菜までもが、いつの間に、と驚いた表情で古城を見る。
「違うわっ！　姫柊も本気にするな！」
そんなもの確認してどうする、と古城は思わず声を荒らげた。
少女が年齢に似合わない見事なボディの持ち主なのは事実だが、だからといって、ちょっと見ただけでスリーサイズを言い当てられるほど古城は器用ではない。
「とにかく、ほかの情報はないのかよ！　胸のサイズとか、そういうの以外で！」
「――彼女の個体名は〝セレスタ・シアーテ〟と推定」
荒々しく息を吐く古城に対して、アスタルテはマイペースに言葉を続けた。
思いがけない情報に、「え!?」と古城と雪菜が動揺する。
「どうしてわかった？」
「伝票に記載、と回答」
「あ……」
アスタルテが指さしたスーツケースを見て、古城は思わず脱力する。
あまりにも堂々と書かれていたせいで逆に見落としていたのだが、宅配便伝票の品名欄には、たしかに『セレスタ・シアーテ、数量1』という記述があった。

「そのまんまじゃねえか……まあいいや。とにかくありがとな、アスタルテ。おまえが来てくれて助かった」

気怠く肩をすくめながら古城は礼を言う。

アスタルテは古城からの突然の呼び出しに、理由も聞かずに応じてくれたのだ。

彼女の医療知識がなければ、古城たちは今ごろ、眠り続けるセレスタを抱えたまま途方に暮れていただろう。

「謝辞は不要です。私の診断は簡易的なものであり、正確な検査ではありません。念のため、正規の医師による診察を推奨します」

「こいつがただの行き倒れだったら、迷わず病院に連れてくところなんだけどな。送り主がヴァトラーの野郎だからな……」

セレスタの寝顔を眺めながら、古城は鬱陶しげに前髪をかき上げた。

あのディミトリエ・ヴァトラーが、古城を名指しで送りつけてきた少女だ。見た目どおりの無害な存在であるという保証はどこにもない。彼女を病院に連れこむことで、無関係な病院関係者や患者に危険が及ぶ可能性もある。

その一方でヴァトラーの思惑どおり、このままセレスタを匿い続けていいのか、という不安もあった。あの男の悪事の片棒を担がされているような気がして不愉快だ。

「ほう。ディミトリエ・ヴァトラー……〝戦王領域〟の蛇遣いか。懐かしい名を聞いたな」

どうしたものか、と葛藤していた古城の背後から、不意にのんびりとした声が聞こえてくる。やけに尊大で、どこか浮き世離れした口調である。

「お知り合いでしたか、院長様？」

その呟きに答えたのは、聖女のような優しげな雰囲気を漂わせた、銀髪碧眼の少女だった。雪菜の同級生の叶瀬夏音だ。そして夏音の膝の上には、身長三十センチほどのオリエンタルな美貌の人形が、あぐらをかいて座っている。

その人形は、豊かな胸を揺らしながら、朧気な記憶を辿るように首を傾げて、

「直接会ったのは百年ほど前に一度きりだがな……いや、二百年前だったか……？」

「……で、叶瀬たちのその恰好はなんなんだ？」

古城がうんざりとした表情で、夏音たちを眺めて訊いた。

夏音が身に着けているのは、見慣れた彩海学園の制服ではなく、スカート丈の長い、純白のエプロンドレスだった。欧州大戦当時の従軍看護師を思わせる衣装である。

まさに白衣の天使という感じのその姿は、夏音には異様なほどによく似合っている——が、さすがにそのコスプレが、彼女の普段着だとは思いたくない。

「ア……アスタルテさんの助手でした」

ナースキャップを押さえながらうつむいて、夏音が照れたような小声で言った。

「助手？」

はあ、と曖昧にうなずく古城。

叶瀬夏音とアスタルテは、南宮那月の自宅で一緒に居候として暮らしている。古城がアスタルテに連絡したときに、電話を取り次いでくれたのも夏音だった。とはいえ、ただの中学生に過ぎない夏音に、アスタルテの助手が務まるとも思えないのだが――

「あまり夏音を責めてくれるな、古城。此奴は、アスタルテが往診を頼まれたと聞いて、てっきり主が倒れたのだと勘違いしてな。主の看病をする気でやってきたのだ」

そう言って夏音を庇ったのは、彼女の膝の上に座っている人形だった。

いや正確に言えば、それは人形などではない。かつてニーナ・アデラードと呼ばれていた、古の大錬金術師の成れの果てである。

〝賢者の霊血〟事件で、肉体の大部分を失ったニーナは、それ以来、この小動物めいたサイズになって、夏音に飼われているのだった。しかしそんな姿になってもなお、尊大な態度を崩さないのが、彼女の偉大なところかもしれない。

「い、院長様！」

透けるような白い肌を真っ赤に染めて、あうあう、と夏音が激しく狼狽する。

ニーナは、うろたえる夏音を怪訝そうに見上げて、

「なんだ？　真実のことであろう？」

「そうか……ありがとな、叶瀬」

縮こまって恥じらう夏音に、古城は素直に感謝した。

なにしろ夏音は捨て猫を放置できずに、何十匹もまとめて面倒を見ていたこともあるのだ。

そんな彼女だから、病気の知り合いを放っておけるわけがないよな、と普通に納得してしまう。

「いえ、お兄さんのため……でしたから」

そう言って幸せそうに微笑む夏音。そんな二人のやりとりを聞いていた雪菜が、コホン、とわざとらしく咳払いする。

「それで、これから彼女をどうするつもりですか、先輩？」

「そうだな……この手の厄介事は、できれば那月ちゃんに任せたかったんだけどな」

古城が顔をしかめて言う。正直セレスタの扱いは、古城たちの手に余る問題だ。信頼できるプロの攻魔官に、さっさと押しつけてしまいたいというのが本音だった。

しかし――

「南宮教官は、特区警備隊の要請を受けて特別警戒任務中です」

アスタルテが事務的な口調で答えてくる。古城は嫌な予感を覚えて目を細め、

「……特別警戒任務？」

「肯定。未登録魔族の密入国の痕跡が発見された、との情報があります」

「密入国……って、まさかこいつのことじゃないよな……？」

古城がセレスタを指さして訊き返した。なにしろ彼女は、箱詰めになって宅配便で送られて

きたのだ。まともな入国手続きを済ませているとは思えない。

とはいえ特別警戒が必要なほどの危険が、はたしてセレスタにあるのだろうか――

「不明。データ不足につき回答不能」

「だよな……」

アスタルテのシンプルな回答に、古城は反論しなかった。雪菜も無言でうなずくだけだ。

「しばらく様子を見るしかないな。こいつ……セレスタだっけ、ただ眠っているだけなら、そのうち目を覚ますんだろ？　その前にヴァトラーのやつから連絡があるかもしれないし。アスタルテは悪いけど、那月ちゃんに連絡を取ってみてくれないか？」

「命令受諾」

人工生命体の少女が首肯した。形式上、アスタルテは、南宮那月の保護観察下に置かれていることになっている。特区警備隊に那月宛の伝言を残すなら、やはり彼女が適任だろう。

「では、妾と夏音は、その間に晩餐の準備をしておいてやろう。このとおり、材料の買い出しも済ませておいたしな」

恩着せがましい口調で宣言したのは、ニーナだった。夏音が運びこんできた大量の荷物の中身は、夕飯の材料だったらしい。

「それはありがたいけど……意外だな。叶瀬はともかく、あんたも料理できたのか？」

古城が驚いてニーナに訊いた。ニーナはたしかに優れた錬金術師だが、彼女の普段の言動

からは、まともな料理を作れるというイメージがまったく湧いてこない。
そんな古城の素朴な疑問に、ニーナは獰猛な笑みで応えて、
「侮るな。妾は大いなる作業を極めし者ぞ。主らに我が故郷パルミア料理の真髄を見せてくれるわ。二百年ぶりに腕が鳴るわい」
「二百年ぶりって、大丈夫なのか、それ!?　大丈夫なのか!?」
背中に嫌な汗を滲ませながら、古城はうめいた。
「……姫柊、悪いけど叶瀬たちの料理の監視を……姫柊？」
古城が小声で呼びかけるが、雪菜はすぐには反応しなかった。彼女は、どこか遠くを見ているようなぼんやりとした瞳で、そのくせ妙に真剣な表情を浮かべて息を止めている。
少し遅れて、彼女はようやく古城に気づき、
「あ、先輩。すみません」
「……なにかあったのか？」
古城が真面目な顔で訊く。雪菜は微笑んで首を振り、
「いえ、大丈夫です。なんとなく誰かに見られているような気がしただけです。気のせいだと思います。このマンションには侵入者避けの結界が張ってありますし」
「そ、そうなのか？」
「はい。だからニーナさんの料理の味付けも任せてください」

そう言って雪菜は得意げに顔を上げた。彼女が指さした姫柊家のキッチンには、なぜか大量のマヨネーズのストックが置かれている。

「お、おう……」

力強く腕まくりする雪菜を眺めて、古城が頼りなくうなずいた。

その隣では、異国人の少女が、夢にうなされるような表情で静かに眠り続けていた。

2

南宮那月はその着信を、空港最上階にある展望ラウンジで受け取った。携帯電話の画面に表示されていたのは、登録した覚えのない番号だ。

『よう、先生ちゃん。元気か？　俺だ、俺――！』

スピーカーから流れ出してきたのは、やけに馴れ馴れしい中年男性の声だった。聞き覚えのある声音ではある。無駄にいい声なのが余計に腹立たしい。

「……」

那月は無感動に眉を寄せ、黙って通話を切断した。

そのまま電話機をバッグに戻そうとするが、その前に再び着信音が鳴り始める。やれやれ、と長い溜息を洩らし、那月は仕方なく電話を耳に押し当てた。

『おいおい、挨拶もなしにいきなり切ることねーだろ。うちの馬鹿息子を世話してもらってる礼くらい言わせろよ』

「……なんの用だ、盗掘屋。貴様らとの三者面談の予定はないぞ」

那月が冷ややかな口調で言い返す。

電話の発信者は暁牙城。那月から見れば、教え子の父親という立場の男である。

もっとも那月は、彼の息子が彩海学園に入学してくる以前から、暁牙城という人物のことを知っていた。暁牙城は考古学者。それも世界各国の紛争地帯を巡って、戦闘のどさくさに発掘品をかすめ取ってくるような、火事場泥棒と紙一重のフィールドワーカーだ。

那月は、そんな彼と、ある〝戦場〟で出会ったことがあったのだ。

『ちょっとした情報提供だよ。参考になるといいんだが――』

その暁牙城が、めずらしく真面目な態度で言う。

那月は露骨に警戒した表情を浮かべた。噂によれば、暁牙城は、つい先日まで〝混沌界域〟付近の遺跡に発掘調査に出かけていたはずだ。

「情報提供、か。貴様、どこにいる？」

『さっき羽田空港に着いたとこだ。例の内戦がらみで発掘調査がドタキャンになっちまってな。娘を連れて里帰り中なんだよ。しかし、日本の空弁ってのは、高価ェんだな。機内サービスのビールもいつの間にか値上がりしてて参ったぜ、ホント』

「いいからさっさと用件を言え。過去の悪行を、貴様の嫁にバラされたくなければな」
那月の声が刺々しさを増した。電話回線の向こう側で、牙城が苦笑する気配がある。
『オーケイ、わかった。本題だ。あんた、アンジェリカ・ハーミダという女を知ってるか？』
「……いや、知らんな」
那月は少し考えて首を振った。
仕事柄、腕の立つ攻魔師や魔導犯罪者の名前は、一度聞いたら決して忘れない自信がある。
しかしアンジェリカ・ハーミダという名前は初耳だった。
だろうな、と牙城が素っ気なく言う。
『無理もない。こいつは、いわゆる普通の魔導犯罪者じゃないからな』
「何者だ？」
『ゼンフォース――アメリカ連合国陸軍特殊部隊の中隊長様だよ』
「軍人だと？」
『そうだ。階級は少佐。四年前のアンデス連邦の内戦じゃ、政府側に軍事顧問として参戦。四十四名の部隊を率いて、二千人近いゲリラを殺したといわれてる。ついたあだ名が〝血塗れ〟アンジェリカ――少々ごついが、美人だぜ。ブランド物のリッチなコートを着てたら、セレブな若奥様で通用するな』
「……なぜおまえがそんなことを知っている、暁牙城？」

まるで見てきたかのような牙城の言葉に、那月が顔つきを険しくした。
まあな、と牙城は真剣味のない態度で失笑し、
『ついさっき、すれ違ったばかりだからな』
「なに……!?」
『羽田の出発ロビーで絃神島行きの航空機を待ってたぜ。もうそろそろそっちに着くころだな。同行者は確認できなかったが、最低でも四名構成の分隊で行動してるはずだ』
世間話のような何気ない調子で、牙城が言う。那月は不機嫌そうに唇を歪めた。
「貴様は、なにもせずにそいつらを見送ってくれたわけか？」
『当然だろ。民間人になにを期待してんだよ。娘の安全が最優先に決まってんじゃねーか』
ちっ、と那月が乱暴に舌打ちする。
あり得ないくらい腹立たしいことだが、理があるのは牙城の言い分のほうだった。
いかに傭兵並の戦闘スキルを持っているとはいえ、牙城はあくまでも民間人だ。彼にアンジェリカ・ハーミダと敵対する理由はない。
「アメリカ連合国か……最近、〝混沌界域〟の周りでキナ臭い動きをしているそうだな」
『わかってるなら話が早いな。まあ、そういうことだから、そっちは任せるわ』
じゃあな、と言い残して、牙城が勝手に電話を切る。
静かになった電話機を睨んで、那月はもう一度舌打ちした。

暁牙城が指摘したとおり、羽田発の定期便は、ほんの数分前に絃神島に着いたところだった。その便の乗客たちは今ごろ、入島審査のカウンターに向かっているはずだ。

アンジェリカ・ハーミダの目的はわからない。しかし、他国の特殊部隊の人間が、用もなく極東の〝魔族特区〟を訪れるとは考えにくい。〝混沌界域〟の内戦が関係していると考えて、ほぼ間違いないだろう。

中米〝混沌界域〟は、第三真祖〝混沌の皇女〟が治める夜の帝国だ。

そしてこの絃神島には、第四真祖がいる――

「……間に合うか？」

那月は、特区警備隊に連絡するための、専用の無線機を取り出した。

考えるのは後回しだ。アンジェリカ・ハーミダを絃神島に入れてはならない。彼女たちが市街地に出る前に、空港内で拘束する。特区警備隊の責任者にそう命令しようとした、その直後――

那月の耳に聞こえてきたのは、突然の凄まじい銃声と、逃げ惑う人々の悲鳴だった。

3

「あー……」

雪菜のマンションのキッチンで、二人の中学生と一体の人形が、黙々と調理を続けている。

古城はそれを不安げな表情で、冷や汗混じりに見つめていた。

一人暮らしの雪菜が所有しているのは、必要最小限の調理器具だけだ。野菜の皮むきから、骨付き肉の解体、さらには缶詰の開封まで、すべてコンバットナイフ一本で済ませている。

今はちょうどダシ取り用の牛骨を、力任せに砕いているところだ。狭いキッチン内で巨大なナイフを振り回す雪菜の姿は、料理というよりも、もっと凄惨なにかを連想させた。

そんな雪菜の隣では、夏音が中華鍋で炒め物をしている。

特に意外というほどでもないが、夏音の調理スキルは、中学生の平均レベルだった。作業は丁寧だが、お世辞にも手際がよいとはいえない。はっきりいって危なっかしい。鍋の重みに振り回される彼女を、古城はハラハラしながら眺めている。幼稚園児のお使いをこっそり見守る父親にでもなった気分だ。

「あ……あのさ。なにか、俺に手伝えることはないか？」

ついに我慢の限界に達して、古城が二人に声をかける。と、

「あ、お兄さん。すみません。邪魔……でした」

「え？　うおあっ!?」

呼ばれて振り返った古城の目の前で、夏音が握っていた中華鍋が火を噴いた。鍋の中で熱くなった油が、コンロの火を拾って燃え上がったのだ。

眼前で立ち上る壮絶な火柱に、古城は上体を仰け反らせながら、
「なんだ、それ。料理か!?　料理なのか!?」
「案ずるな。焦がしと呼ばれる調理技術だ。パルミア料理では火が命だからな。一流の料理人なら、このとおり炎を手足のように自在に操るものよ」
動揺する古城を呆れたように眺めて、ニーナは訳知り顔でそう言った。
「いや……まったく操れてる気がしないが。ていうか、それパルミアじゃなくて、ただの中華料理じゃねえか。だいたい叶瀬に調理させといて、なんでおまえが威張ってるんだよ?」
「妾のサイズでは、鍋が振れないのだ。仕方あるまい。それよりも次の食材だ。夏音、肉の支度をせよ。雪菜、主は魚の下ごしらえを頼む」
「はい、院長様」
ニーナの指示に柔順に従って、冷蔵庫から生肉を引っ張り出してくる夏音。感謝の祈りを捧げるように、彼女は生肉に向かって黙禱を始める。よくわからないシュールな光景だ。
その一方で雪菜は、まな板の上に謎の物体を横たえて、
「先輩、少し離れてもらえますか」
「ああ……って、なんだ、これは!?」
「深海魚の一種だと思います」
そこに置かれていたのは、まるでゼラチンの塊のようなブヨブヨとした不定型の物体だった。

全体は黒っぽい斑点に覆われ、ぎょろりとした目玉は愛嬌があると言えなくもない。申し訳程度の小さな尾びれがなければ、とても魚とは思えなかっただろう。フグとナマズとアンコウとスライムを足して四で割ったような、謎の生き物だ。

「く、喰えるのか、これ？」

「案ずるな。妾の生まれ故郷では最高級の食材だぞ」

自慢げなニーナの解説に、本当かよ、と古城はうめく。

「おい、姫柊」

「も、問題ありません。獅子王機関でサバイバル訓練を受けてますから……！」

コンバットナイフを握り締めた雪菜が、自分自身に言い聞かせるようにそう言った。食材をさばく自信があるというよりも、ほとんど意地になっているらしい。

しかし雪菜が突き立てたナイフは、深海魚を覆う謎の粘液によって阻まれる。

思わぬ苦戦に眉を吊り上げた雪菜が、半ばムキになってもう一本のナイフを抜いた。左右の二刀を交互に振るって、深海魚との死闘を再開する。

「……悪い。任せた」

古城はそう言ってキッチンを後にした。どうやら古城の手に負える状況ではなさそうだ。あとは無事に食べられるものが出てくることを祈るだけである。こんなときに凪沙がいてくれたら、と思わずにはいられない。

「はー……」

溜息をこぼしながら古城が向かったのは、セレスタがいる寝室だった。

眠り続けるセレスタの様子を、アスタルテが無言で見守り続けている。近づいてきた古城に気づいて、人工生命体の少女は静かに顔を上げた。

「アスタルテ、セレスタの様子はどうだ？」

「睡眠継続中。急速眼球運動と骨格筋の弛緩を確認。脳波状態はシータ波が優勢。心拍数、呼吸数に乱れがあります」

「え……と、それってどういう……」

聞き慣れない専門用語の羅列に、古城は困惑して訊き返す。アスタルテは無表情に瞬きして、

「夢を見ているものと思われます」

「夢……か。いい夢ってわけでもなさそうだな」

セレスタの寝顔を眺めて、古城はぼそりと呟いた。唇を噛みしめているセレスタの表情は、悪夢にうなされているようにも、あるいは泣いているようにも見える。

「提案。携帯電話の貸与を要求します。南宮教官との通話の再試行の許可を」

アスタルテが唐突にそう言って、古城に手を差し出した。

「え？　ああ、那月ちゃんにもう一回連絡してみるってことか？」

差し出されたアスタルテの手に、古城は自分の携帯を渡してやる。さっきから何度か電話を

繰り返しているものの、任務中の那月には、いまだに連絡がついていなかった。
「じゃあ、こっちはしばらく俺が看とくから」
古城はそう言って、ベッドの隣に腰を下ろした。医学的な知識などとは無縁の古城だが、眠っているセレスタに付き添うくらいのことはできる。
「感謝します、第四真祖」
アスタルテが、ぺこりと頭を下げて部屋を出て行った。
手持ちぶさたになった古城は、眠っているセレスタを見るともなしにぼんやりと見つめる。淡い褐色の肌と蜂蜜色の髪。様々な民族の血を引く人々に特有の、端整な顔立ち。しかしその寝顔は年相応に幼く、彼女がなんら特別な存在ではないという印象を与えてくれた。
要するにセレスタは、少しばかり綺麗なだけの普通の女の子なのだ。
彼女は魔族ではないとアスタルテは診断していたし、近くにいても魔術などの気配は感じない。あのヴァトラーがセレスタのことを気にかける理由は、なにひとつ思いつかなかった。
古城のもとにセレスタを送りつけてきたのは、あの男のいつもの嫌がらせではないのだろうか――
そんな疑問を古城が抱き始めたとき、ふとセレスタと目が合った。
眠っていたはずのセレスタが瞼を開けて、明るい茶色の大きな瞳で、古城の顔を見上げていた。まだ完全に覚醒しきれていないのか、目の焦点が合っていない。

「よ……よう……」

敵意がないことを示すため、古城は、とりあえず手を挙げて挨拶する。と——

古城を見つめるセレスタの瞳から、突然あふれ出したのは涙だった。

「Su Excelencia……」

セレスタの唇から、言葉が洩れた。古城の知らない、異国の言葉だ。

「え？」

「¡Su Excelencia Señor Vattler! ¡Yo naci para amarte! ¡Quiero verte!」

セレスタが勢いよく立ち上がった。そのまま彼女は、戸惑う古城に抱きついてくる。まるで生き別れの恋人に再会したかのような熱烈さで——

「ま……待て、セレスタ！　お、落ち着け！　目を覚ませって！」

全身を硬直させたまま、古城が上擦った声を出す。Tシャツの布越しに伝わってきたのは、セレスタの胸の弾力だ。泣きじゃくる彼女の吐く息が、古城の首筋を刺激する。

「¡Su Excelencia! ¡Su Excelencia Señor Vattler! Si, me salvaste la vida...」

くぐもった涙声でセレスタが叫ぶ。かろうじて聞き取れたいくつかの単語に、古城はハッと我に返った。

「ヴァトラー……？　おまえ、俺をヴァトラーのやつと間違ってるのか!?」

無理やりセレスタを引き離して、古城は彼女の顔を覗きこむ。

その瞬間、セレスタの目がはっきりと古城を見た。信じられないというふうに彼女は何度か瞬きして、その表情を驚愕に引き攣らせる。

そして大きく息を吸ったセレスタは、凄まじい音量で絶叫した。

「きゃあああああああああああっ！」

「――痛ってェ！」

セレスタに頬を張り飛ばされた古城が、そのまま壁に激突する。

「¿Quién eres tú!? ¿Dónde está!? ¿Por qué me engañas!? ¡Qué bestia! ¡Hentai!」

セレスタはベッドの隅に縮こまり、早口でなにかを喚き散らしていた。古城を睨む彼女の瞳には、恐怖と憎悪の光だけが浮かんでいる。

その騒ぎを聞きつけた雪菜たちが、慌てて寝室に駆けこんできて、

「先輩!?　なんの音ですか!?」

そこで雪菜たちが目にしたのは、涙目になって震えているセレスタと、彼女の手形をくっきりと頬に残した古城の姿だった。古城を見つめる雪菜の瞳から、一切の感情が抜け落ちる。

「……先輩……セレスタさんになにをしたんですか……？」

「ま……待て、姫柊。これは、違う……！」

焦って必死に首を振る古城。そんな古城を見つめて、夏音が悲しげに首を振り、

「お兄さんのこと信じてました……なのに……」

「よもや第四真祖ともあろうものが、下劣な性犯罪に走るとはな。これも若さゆえのリビドーの暴走というやつか」

夏音の肩にしがみついていたニーナが、妙に悟ったような口調でそんなことを言いだした。

さらには、

「反省。監督不行届でした」

いつもどおりの淡々とした口調で、戻ってきたアスタルテが短く呟く。

「だーっ！　待て、おまえら！　黙って聞いてれば好き勝手に人を犯罪者呼ばわりしやがって！　抱きついてきたのはこいつのほうだっての！」

全員に一斉に非難の眼差しを向けられた古城が、セレスタを指さして逆ギレ気味に怒鳴った。

ビクッと肩を震わせて怯えるセレスタ。それを眺めていた雪菜は静かに息を吐き、

「抱きつかれたんですか……なるほど……」

温度を感じさせない彼女の声に、隠しきれない怒気が滲む。

違う、冤罪だ、と古城は頼りなく首を振り、天井を見上げて絶叫した。

「誤解だあああああああっ！」

4

空間を歪めて那月は跳んだ。

行き先は、空港ビルの最上階にある警備管制室だった。空港内すべての警備を指揮する発令所である。軍艦の艦橋を思わせる室内には、八名のオペレーターと管制室長が待機している。

平常時の彼らの業務は、どちらかといえば退屈なものだ。警備員の問い合わせに答えたり、監視カメラの映像を黙々とチェックしているだけ――

しかし今日は違っていた。管制室内のモニタは無数の警告で埋め尽くされ、無線回線は怒鳴り声の応酬でパンク寸前だ。必死にキーボードを叩くオペレーターたちの背後で、室長は呆然と立ち尽くしている。

「何事だ、室長？」

青ざめた顔の管制室長に、那月はぞんざいに問いかけた。

「み、南宮攻魔官！」

彼女の姿に気づいた室長が、どこか救われたような表情を浮かべる。

独立した国家攻魔官である那月は、特区警備隊正規の隊員というよりも、どちらかといえば用心棒に近い存在だ。普段は邪魔者扱いされることのほうが多く、頼られるのは緊急時だけ。

そしてどうやら、今は、その緊急時のほうらしかった。

「入島審査のゲートで騒ぎです！　書類の偽造が疑われる旅行客を、別室に誘導したところ、どうやら強硬突破を図ったらしく――！」

「羽田発の便に乗ってきた女だな？」

管制室のモニタを見上げて、那月が呟く。

騒ぎを起こした乗客の姿は、すでに特定されていた。毛皮付きのコートを着た白人女性。牙城が電話で伝えてきた、アンジェリカ・ハーミダという女の特徴そのままだ。

痩身だが姿勢がよく、手脚が長い。灰色の髪は短く切られており、そのせいでファッションモデルのような印象を受ける。しかし、見る者が見れば、すぐに気づくだろう。彼女の動きはモデルのそれではなく、訓練された軍人の身のこなしだと。

「忌々しいが、暁牙城の予想どおりというわけか……！　分隊長に伝えろ。敵は軍の特殊部隊だ。丸腰でも油断するな、とな。おそらく近くに仲間もいるはずだ」

レースで縁取られた扇子を広げて、那月が告げた。

すでにアンジェリカ・ハーミダは、彼女を取り押さえようとした空港の警備員を何人も倒している。そして武装した特区警備隊の隊員に包囲されたまま、なおも悠然と歩き続けていた。特区警備隊は警告や威嚇射撃を続けていたが、アンジェリカがそれを気にしている素振りはない。

「特殊部隊……？　ですが、武器も魔具も所持していないこの状況で、いったいなにが――」

管制室長が那月に反論しようとする。

しかし彼の言葉が終わる前に、オペレーターの一人が悲鳴を上げた。

「だ、第六分隊、隊員二名が負傷――！　いえ、負傷者は八名！　交信途絶！　全滅です！」

「なに!?」

室長の表情が凍りつく。那月は無表情にモニタを一瞥したが、すでに付近の監視カメラは破壊されたあとだった。アンジェリカ・ハーミダと彼女の部下たちが、本気で動きだしたのだ。

「第五区画の外壁を突破されました！　第五、第七分隊、応答ありません！　犯人グループ、間もなく到着ロビーに達します！」

「く……！　至急、対応可能な部隊をすべて集めろ。ゲート封鎖！　逃がすな！　特区警備隊本部と人工島管理公社に連絡を！　急げ！」

「待て、室長。ゲートの封鎖はなしだ」

管制室長の言葉を遮って、那月が言う。室長は、信じられない、というふうに目を剝いた。

「し……しかし、攻魔官！」

「民間人の安全が優先だ。丸腰で外壁をぶち抜くような連中だぞ。ゲートを封鎖したところで無駄だ。ロビー内で銃撃戦をしたければ無理には止めないがな」

「そ、それは……いえ、たしかに……！」

那月の冷静な指摘に、ぐ、と室長が言葉を呑みこむ気配があった。突然の騒動に浮き足立ってはいても、状況判断ができないほどの無能な男ではなかったらしい。

「か、各分隊長に通達！　無理な交戦は避け、一般旅行客の安全を最優先に確保せよ！」

「了解。各分隊長に通達。ゲート封鎖、解除します！」

「ゲート封鎖解除！」

「第十三分隊、交信途絶！　救護班を要請――！」

管制室内がさらに混乱を増していく。しかしその一方で、到着ロビーに現れたアンジェリカ・ハーミダたちは、むしろ粛々と歩き続けていた。特区警備隊の戦力では自分たちを止められないということを、彼女たちは十分に自覚しているのだ。

「死なない程度の負傷か。セオリーに忠実だな、アンジェリカ・ハーミダ」

那月が、口の中でぼそりと呟いた。

アンジェリカの部隊が通り過ぎたあとには、血塗れで倒れた警備員たちだけが残されている。全員が重傷を負っているのは間違いないが、殉職した警備員はまだいない。アンジェリカたちは、あえて彼らの急所を外したのだ。

だがそれは、アンジェリカたちが、敵に情けをかけたということではない。

苦しむ負傷者の存在は、敵軍の士気を下げ、搬送や治療のための兵力を浪費させる。敵兵をあえて殺さない。それが戦場でのセオリーなのだ。

アンジェリカの部隊は、そのセオリーを遵守している。
その事実が、那月にもうひとつの情報を与えてくれる。
それはアンジェリカたちが、単なる犯罪者として行動しているわけではない、ということだ。
彼女たちはあくまでも軍人だ。つまり絃神島への潜入は、彼女たちが所属するアメリカ連合国陸軍の作戦行動の一部ということになる。アンジェリカ・ハーミダと彼女の部下たちは、なんらかの任務を遂行するために絃神島に上陸したのだ。
「少し、試してみるか――」
那月が管制室の窓際へと近づいた。空港ビルを出たアンジェリカたちを、ちょうど真上から見下ろす形になる。そして那月は、畳んだ扇子を一閃した。
アンジェリカたちの足元の地面が、波紋のように揺れたのはその直後だ。
地面から吐き出されたのは銀色の鎖。神々が鍛えた捕縛用の魔具――〝戒めの鎖〟だった。
那月が操る無数の鎖が、アンジェリカ・ハーミダの長身を搦め捕る――
「……っ!?」
そう思われた瞬間、アンジェリカの周囲の空間を、眩い紫色の閃光が駆け抜けた。
その輝きに包まれて、銀色の鎖が弾け飛ぶ。そして那月の目の前で、管制室の窓ガラスが、前触れもなく粉々に砕け散った。
「こ、攻魔官……!?」

管制室長が、震える声で那月に呼びかける。那月はそれに答えない。ただ無造作に扇子を振って、全身に浴びたガラスの破片を払い落としただけだ。

「やれやれ……この服は気に入っていたんだがな」

那月が不機嫌な口調で言った。彼女自身はほぼ無傷。しかし那月が着ていた豪奢なドレスは、ガラスの破片で無惨に斬り裂かれてしまっている。

那月の鎖に攻撃された瞬間、丸腰だったはずのアンジェリカが放ったのは、旧き世代の吸血鬼にも匹敵する膨大な魔力だった。その魔力が鎖を逆流して、那月に襲いかかってきたのだ。

アンジェリカ・ハーミダが無言で顔を上げ、管制室にいる那月を睨め上げる。

彼女と那月が目を合わせたのは一瞬だ。アンジェリカはそのまま歩き去り、那月は無言でそれを見送った。すべては刹那の出来事だった。

「〝血塗れ〟アンジェリカ……か。この貸しは高くつくぞ」

那月が小さな唇を吊り上げて、美しく笑う。

彼女の目の前に広がっているのは、絃神島の夕景だ。

眩い夕陽に照らされた街並みの色は、鮮血に沈んでいるかのような不吉な深紅だった。

5

ニーナ・アデラードは錬金術師。彼女の不滅の肉体を構成しているのは、〝賢者の霊血〟と名付けられた液体金属生命体だ。

錬金術の極致とも呼ばれる生きた金属――〝賢者の霊血〟は、それ自体が膨大な魔力源であり、自在に姿形を変える高性能な魔具でもある。

その〝賢者の霊血〟の一部を使ってニーナが作り出したのは、銀色の小さなイヤリングだった。いまだ不安げな表情のセレスタの耳に、ニーナはそれを装着する。

「これでよい。読み書きは無理だが、会話だけなら通じるはずだ」

ニーナが短い呪文を唱えると、イヤリングの表面に魔法文字が浮き上がった。翻訳用の魔具が起動したのだ。

「ありがとうございます、ニーナさん。助かりました」

雪菜が丁寧に頭を下げた。ようやくセレスタが目を覚ましたのに、言葉が通じなくて困っていたのだ。ニーナが言うには、セレスタの言葉は、〝混沌界域〟の公用語に近いが微妙に違う、とのことだった。おそらくそのあたりに、セレスタの出身地を知る手がかりがあるのだろう。

「院長様、さすがでした」

夏音が微笑みながらニーナを抱き上げる。ニーナは尊大な表情でふんぞり返り、
「うむ。存分に賛美するがよい。錬金術の真髄を極めた妾には、児戯にも等しき術だがな」
「……そういうことを自分で言わなきゃ、少しは威厳も出そうなのにな」
ふて腐れたような表情でそう言ったのは、床の上に転がされた古城だった。
古城の手脚が鎖で縛られているのは、怯えるセレスタを安心させるための措置だ。ちなみに古城のパーカーを材料にして鎖を錬成したのは、もちろん錬金術師のニーナである。
そのニーナが、拗ねる古城を眺めて呆れ顔で首を振り、
「鎖で縛られて喜んでいる変態真祖に言われたくはないのう」
「喜んでねえよ！　誤解が解けたんだから、さっさと解放しろ！　ていうか、俺のパーカー、ちゃんと元に戻せるんだろうな!?」
「問題ない。二、三割ほど体積が目減りするかもしれんが、案ずるな」
「案ずるわ！　パーカーが二、三割縮んだらぱっつんぱっつんじゃねえかよ！」
「――先輩、少し静かにしてください」
声を張り上げて抗議する古城を、雪菜が咎める。そして彼女は、警戒する小動物に接するような態度で、ベッドの上で膝を抱えるセレスタに話しかけた。
「わたしの言葉がわかりますか、セレスタさん？　セレスタ・シアーテさん――ですよね？」
雪菜の呼びかけに反応して、異国人の少女がのろのろと顔を上げた。

セレスタの瞳に浮かんでいたのは、隠しきれない猜疑の色だ。雪菜を値踏みするように、じろじろと彼女の全身を眺め回し、フンと嘲るように小さく笑う。

「他人の名前を聞く前に、まずは自分から名乗ったら、地味女」

「じ、地味……!?」

怯えていたはずのセレスタから思わぬ罵倒を浴びせられて、雪菜が一瞬、言葉をなくした。

とはいえ、グラマラスで派手な容姿のセレスタと比較すれば、雪菜の印象が薄いのは事実だ。いちおうそれは自覚しているのか、雪菜はすぐに気を取り直して、

「失礼しました。姫柊雪菜、獅子王機関の剣巫です」

「ケンナギ？　シシオーキカン？」

戸惑ったように小さく首を傾げるセレスタ。どうやらニーナの翻訳魔術では、本人の知識にない固有名詞までは翻訳できないらしい。

そのことに気づいた雪菜は、すぐに首を振って訂正し、

「あ……つまり巫女です。戦闘系の」

「巫女？　あなたも？」

セレスタが意外そうに眉を上げた。彼女が何気なく口にした言葉に、雪菜はかすかに目を細める。しかしセレスタは、それきり雪菜には興味を失ったように肩をすくめ、

「で、そっちの変態は？」

「誰が変態だ!?」

床に転がったままの姿で、古城がイライラと歯を剝いた。ほとんど初対面も同然の相手に、変態呼ばわりされる理由はないはずだ。

しかしセレスタは、攻撃的に身を乗り出してきて古城を睨み、

「変態が気に入らなきゃ、詐欺師よ。この犯罪者！　人間のクズ！　よりによってヴァトラー様に成りすましてあたしの気を惹こうとするなんて！」

「あんなやつのフリなんかするかっ！　おまえが寝ぼけて勝手に間違ったんだろうが！」

「うるっさい、変態！　クズ男！　フンコロガシ！」

「ぐ、箱詰め女の分際で……！」

セレスタの罵詈雑言に圧倒されて、古城が、ぐぬ、と歯軋りする。

しかしセレスタも、いきなり興奮したせいか、ぜえぜえと息を切らせて軽く咳きこんだ。冷凍保存の後遺症から、完全には回復しきれていないのかもしれない。

苦しげな彼女を見かねた夏音が、そっと寝室を抜けだして、コップに水を注いで戻ってくる。

「お水、飲みますか？」

「あ……ありがと」

バツが悪そうに頬を赤らめて、セレスタが差し出されたコップを受け取った。おっとりと微笑む夏音に対しては、さすがのセレスタも、あまり強気には出られないらしい。

「あんた、名前は？」
「叶瀬夏音です。雪菜ちゃんのお友達でした。こちらは院長様とアスタルテさんでした」
「……院長様？」
セレスタが困惑したような視線をニーナに向けた。身長三十センチ足らずの謎の女。しかも自由自在に姿を変え、怪しげな術まで使いこなすのだ。セレスタが不気味がるのも無理はない。
「ニーナ・アデラードだ。古の大錬金術師と呼ぶ者もおるがの」
しかしセレスタの困惑などお構いなしに、ニーナは堂々と名乗りを上げる。
「は、はあ……」
セレスタはますます混乱したような表情を浮かべたが、どのみち理解できないとすぐに割り切ったらしい。ひとつ大きく溜息をついて話題を変える。
「……で、あの変態は？」
「あの方は、お兄さんでした」
古城を指さすセレスタに、夏音が答える。セレスタは驚いたように目を大きくして、
「お兄さん？　あんた、あいつの妹なの？」
「いえ、お兄さんは凪沙ちゃんのお兄さんでした」
にこやかな表情で即答する夏音。苦悩するセレスタの眉間にしわが寄る。
「凪沙って、誰よそれ？」

「お友達でした」
「ごめん……あんたの言ってること、さっぱりわかんない」
セレスタががっくりと肩を落とした。それを見かねたように、やれやれと古城が息を吐く。
「凪沙ってのは俺の妹だよ。叶瀬と姫柊はその友達」
「ふーん」
最初からそう言いなさいよ、とセレスタが不機嫌そうに古城を睨んだ。
古城は気怠げに唇を歪めて、彼女を睨み返し、
「俺は暁古城だ。古城でいい。んで、おまえは、俺ん家に宅配便で送られてきたんだよ。差出人はヴァトラーの名前になってたんだが、なにか心当たりはあるか、セレスタ？」
「……様をつけなさいよ」
セレスタが声を低くして、ぼそりと呟く。
「あ？」
「ヴァトラー様を呼び捨てにするなって言ってるのよ、変態！」
「どうでもいいだろ、そんなこと！」
腹筋だけで無理やり起き上がって言い返す古城。しかしセレスタは激しく髪を振り乱し、
「いいわけないでしょ！　あたしにはヴァトラー様しかいないんだから……なのに、どうして、こんなやつのところにあたしを……」

「おまえな、言っとくけど迷惑してるのはこっちなんだからな……！」

思い詰めたようなセレスタの表情に、古城の口調がトーンダウンする。

もちろん古城がヴァトラーに敬意を払う理由などない。あの男がこれまでやってきたことを思えば、呼び捨てでもまだ生温いくらいだ。

だが、それはセレスタには関係ないことだ。そもそも今回の事件では、箱詰めにされた上に見知らぬ男のもとに送りつけられたセレスタが、いちばんの被害者なのかもしれない。

「で、結局、おまえも知らないのか？　おまえが俺のところに送られてきた理由――」

「だから、さっきからそう言ってるじゃない！　馬鹿なの、あなた!?　馬鹿なのね！」

「ああっ!?」

「ストップです！　待ってください、先輩――！　ステイ！」

セレスタの暴言にキレかけた古城を、雪菜が飼い犬を躾けるような口調で制止する。

そして雪菜は異国人の少女を見つめて、確認するように厳かに訊いた。

「セレスタさん……もしかして、記憶がないのではありませんか？」

「っ……!?」

その瞬間、セレスタの表情がはっきり強張った。

無言のままうつむいて、彼女は強く唇を噛みしめる。古城はそんなセレスタの反応を呆然と眺めた。思わず間の抜けた声を出す。

「記憶がない……？」

「な……なによ？　文句あるの？」

乱暴に言い返すセレスタの声から、さっきまでの刺々しさは抜け落ちていた。

セレスタは記憶をなくしている。自分の名前さえも彼女は知らない。そう考えれば、雪菜に名前を聞かれたときの彼女の反応も腑に落ちる。

古城たちに対する攻撃的な態度は、セレスタの不安の裏返しだ。記憶をなくしていることを隠すための、彼女なりの精一杯の虚勢だったのだろう。

そう、セレスタには記憶がないのだ。唯一、ヴァトラーの存在を除いては――

「あー……その、なんか……悪かったな。すまん」

古城が渋々と頭を下げる。

セレスタは居心地悪そうに顔をしかめて、

「な、なによそれ。なに謝ってるのよ、気持ち悪い。それで優位に立ったつもりなの？」

拗ねたような口調でそう言った。古城に下手に出られたら、それはそれで不満らしい。

「ふむ、なるほど……記憶の欠落の原因は、間近で強大な魔力を浴びたせいだな。ディミトリエ・ヴァトラーに出会ったのが、主の最古の記憶というわけか？」

セレスタの頭によじ登りながら、ニーナが言う。

自分の頭上に座る錬金術師を、セレスタは鬱陶しげに見上げて、

「あの方は助けてくれたのよ。神殿で殺されそうになっていたあたしのことを」
「……神殿？」
雪菜が警戒したように呟いた。どこかの神殿で殺されかけていたときにヴァトラーと出会い、そして絃神島へと送られた。それがセレスタの持つ記憶のすべてということだ。
「アスタルテ、こいつの記憶を戻せないか？」
古城が、人工生命体の少女に小声で訊いた。
しかしアスタルテは無表情のまま首を振り、
「頭部外傷や薬物使用の痕跡が認められないため、原因は心因性のものと思われます。魔術や催眠療法による強制的な記憶回復は、危険を伴うため推奨できません」
「そう……か」
古城が沈鬱な表情を浮かべて、セレスタを見た。
その真剣な古城の態度に、セレスタは意表を衝かれたように戸惑って、
「な、なによ？」
「いや、ちょっとな。俺も似たような経験があるからさ……どんなにつらい記憶でも、自分のことを思い出せないのは苦しいよな」
「あ、あんたと一緒にしないでよ。あたしはヴァトラー様の記憶があれば十分だし……」
懸命に強がるセレスタの頬が、仄かに赤く染まっていく。そのせいか彼女の表情から、険し

さが薄れているようにも感じられた。
そしてセレスタの緊張が解けたのを合図に、彼女の腹部が異音を発した。
ぐぅ、という健康的で、かつ間抜けな音を――
「あの、ご飯にしませんか？」
羞恥にうつむくセレスタに、夏音が柔らかく呼びかけた。
反論する者は、いなかった。

6

食卓に並べられたのは、大皿一杯に盛りつけられた無数の見慣れない料理たちだった。
どれもこれもが異様にカラフルで、いかなる調理の過程を経て完成したのか、出来上がった姿からは想像もつかない。煮たのか焼いたのか炒めたのか、それすらも判別不可能だった。
しかし強烈な香草の匂いが漂ってきて、不思議と食欲を刺激する。
「これがあんたたちの国の料理なの？」
取り分けられた料理をフォークの先端でつつきながら、セレスタが不安そうに訊いてくる。
古城は、ドロリとしたゲル状の液体をスプーンですくって、
「いや……少なくとも日本の喰い物ではないと思うが……」

曖昧な口調でそう答えた。

その隣ではアスタルテが、機械的な仕草で料理を口に運んでいる。彼女は山盛りの皿をあっさりと平らげて、ナプキンで唇を拭いながら、ぼそりと感想を呟いた。

「美味」

「マジか……」

アスタルテの言葉を信じて、古城も覚悟を決めて料理に手を伸ばす。セレスタも怖ず怖ずと食器を手に取った。

「……本当だ。美味いな」

信じられないことだが、ニーナの料理は美味かった。ややスパイシーだが、舌触りがよく、絶妙なコクと旨味が口の中に広がっていく。あの得体の知れない食材が、こんな美味に化けるとは完全に予想外だった。

「ふん。たしかに、味はまあまあね」

口の悪いセレスタでさえも、そう言ったきり黙りこむ。

「当然だ。この妾が監督したのだからな」

夏音の膝の上に抱かれていたニーナが、勝ち誇ったように胸を反り返らせた。実際の調理を担当した夏音と雪菜も、心なしかご機嫌だ。

「先輩、よかったらサラダのおかわり、よそいますね」

そう言って雪菜が、古城の手から空になった皿を受け取った。
「ああ、悪い……サンキュ」
「いえ。あと、先輩、顎にソースがついてますよ」
「え？　そうか？」
「はい、取れました」
まるで新妻のような甲斐甲斐しさで、古城の顔の汚れを拭う雪菜。そんな二人の仲睦まじい姿を、セレスタが辟易したような半眼で眺めている。
「ねえ……地味女。あんたって、そこの変態とどういう関係？　つき合ってるの？」
「へ……!?」
不躾なセレスタの質問に、雪菜が声を裏返らせた。
古城がうんざりしたようにセレスタを見返した。ほんの二十四時間ほど前にも、似たような質問をされた気がする。
「そんなわけねーだろ、箱詰め女」
「そうです。私はただの監視役ですから！」
「なにそれ。わけがわかんない」
息もぴったりに反論してくる古城たちを睨んで、セレスタが呆れたように首を振った。
傍からそれを眺めていたニーナとアスタルテが、うんうん、とセレスタに同意するように無

言でうなずいている。

セレスタは、まあどうでもいいけど、とつまらなそうに呟いて、

「ところで、あんたたちってヴァトラー様の家来なの？」

「なんで俺があいつの家来にならなきゃなんねーんだよ」

冗談でもやめろ、と古城は全身に鳥肌を立てながら抗議した。

セレスタが、ムッと不快そうに唇を尖らせる。

「違うの？　だったらどうしてヴァトラー様はあたしをあんたに預けたのよ？」

「それはこっちが知りたかったんだけどな」

古城が苦々しげに独りごちた。ようやく目覚めたセレスタには記憶がなく、いまだにヴァトラーからの接触もない。〝戦王領域〟の貴族の真意は、依然、謎のままである。が、

「常識的に考えて、古城の手元に置いておくのが、いちばん安全だからであろうな」

さして興味もなさそうな口調で答えてきたのは、ニーナだった。

セレスタが唖然としたように目を見開いて、

「安全？　この変態の傍が？」

「だから変態じゃねえっての！」

自分を指さしてくるセレスタの右手を、古城が乱暴に払いのける。

セレスタは、古城を至近距離から睨みつけてきて、

「あたしの胸に触ったくせに！」
「おまえが勝手に抱きついてきたんだろうがっ！」
「あ……！」
同じく古城がセレスタを睨み返した瞬間、雪菜が、見落としていたなにかに気づいたように声を洩らした。
「姫柊？」
「なによ、地味女？」
古城とセレスタが、同時に雪菜を見つめて訊く。
しかし雪菜は答えない。彼女は小さくうつむいたまま、自問するように呟いているだけだ。
「そう……そうですね……もっと早く気づくべきでした」
「なに？　このクズ男の痴漢行為のこと？」
「だから触りたくて触ったんじゃないからな！」
「いえ、それはいいんです。先輩がいやらしいのは最初からわかってることですから」
雪菜が無関心に首を振る。古城は思わず憤慨して、
「なんでだ!?」
「そうではなくて、アルデアル公が先輩にセレスタさんを預けた理由です。第一真祖〝忘却の戦王〟を除けば、あの方が、ご自分と同等以上の戦闘能力の持ち主だと認めているのは、お

そらく先輩だけ――ですよね？」

「まあ、そうかもな……」

あまり認めたくない事実ではあったが、古城は仕方なくうなずいた。

戦闘狂であるヴァトラーにとっての関心事は、唯一、〝力〟だけである。

敵や味方という概念すら曖昧なあの男が、多少なりとも敬意を払うのは、戦う価値があると認めた相手だけなのだ。そのヴァトラーが異様なまでに執着している対象が、ほかならぬ古城だった。正確にいえば、古城が受け継いだ〝第四真祖〟の血だ。

「だから、アルデアル公は先輩にセレスタさんを任せたんだと思います。先輩以外には、セレスタさんを護れないと考えたから――」

雪菜が真剣な口調で告げる。シンプルだが、そのぶん説得力のある仮説だった。

ああ見えてヴァトラーは、一国の領主だ。ジャガンのような、忠実な部下も大勢抱えている。

そのヴァトラーが、自分の部下ではなく、あえて古城にセレスタを託す理由があるとすれば、それは古城だけが持つ特別な力が必要だったからに違いない。

第四真祖――世界最強の吸血鬼の力が。

だが、雪菜のその主張は、同時にもうひとつの事実をも示している。

「それって、セレスタが誰かに狙われてるってことか？」

古城が表情を硬くして訊き返し、

「はい。あくまでも仮説ですけど」
雪菜が重々しくうなずいた。
それを聞いていたセレスタの顔色が、はっきりわかるほどに青ざめる。雪菜の考えが、セレスタの最後の記憶とも符合していたからだ。
殺されかけていたセレスタを、ヴァトラーが救った。そしてヴァトラーは、助けた彼女を古城に預けたのだ。おそらくはセレスタを護衛させるために――
「――心配は不要。第四真祖があなたを護る」
怯えるセレスタを励ますように、アスタルテが無感動な声で告げた。人工生命体の少女が、そんなふうに自分から不確定な情報を口にするのはめずらしいことだ。
「はい。お兄さんは私のことも助けてくれました」
夏音も控え目に微笑みながらそう言った。
「べ、べつに心配してないし。そこの変態なんかに護ってもらわなくても平気だし」
セレスタが照れたように顔を背けて、ごにょごにょと歯切れ悪く言い返す。
そして彼女は、話の矛先を変えようと姿勢を直し、
「夏音だっけ？　あんたは、その男のことどう思ってるの？」
「お兄さんのことは、ずっと好きでした」
小鳥のように首を傾げて、夏音が言った。

ごふ、と古城が食事を喉に詰まらせ、雪菜が握っていたフォークをぽろりと落とす。アスタルテは無表情に食事を続けていたが、食器がとっくに空になっていたことに、気づいていないようだった。

「そ、そうなの？」

毒気を抜かれたような態度で、セレスタが訊き返した。

夏音は爽やかにうなずいて、

「はい。お兄さんも雪菜ちゃんも凪沙ちゃんもアスタルテさんも大好きです」

「あ……そ、そういうこと……」

紛らわしいこと言わないでよ、とセレスタがへなへなと脱力する。

ぐったりと顔を伏せていたのは古城たちも同じだ。名前を呼んでもらえなかったニーナだけが、「妾は？」と不満げに腕を組んでいる。

そしてなぜかマンションのベランダでも、ガタン、と誰かが蹴躓いたような気配があった。普通ならば、気のせいだろうと、そのまま聞き逃してしまいそうな、かすかな気配だ。

しかし雪菜は即座に反応した。

壁際に立てかけてあったケースから銀色の槍を取り出し、なめらかな動きで身構える。

折り畳まれていた三枚の刃が展開し、全金属製の柄がスライドして伸びた。

流しこまれた呪力に反応して、その刃が淡く発光する。

「――〝雪霞狼〟！」

雪菜が鋭く槍の銘を呼んだ。

「のわっ!?」

槍の切っ先を向けられた古城が、条件反射のように頭を下げた。セレスタもつられて背中を丸める。そんな二人の頭上スレスレを、雪菜の槍が横薙ぎに駆け抜けた。

〝雪霞狼〟の銘を持つ雪菜の槍は、魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く獅子王機関の秘奥兵器だ。神格振動波の眩い輝きが、ベランダの一角を薙ぎ払う。

「はうわっ!?」

その直後、ベランダから聞こえてきたのは、慌てふためく女の声だった。

破壊された魔術結界が放つ火花とともに、予期せぬ人影が姿を現す。

純白のローブに全身を包んだ若い女である。

銀色の装飾を施した長剣を背負って、純白の頭巾で顔を隠している。

ローブの下に着ているのは、ノースリーブに改造したミニスカートの軍服だ。彼女の第一印象を簡潔に表現するなら、間違った忍者のコスプレをした外国人、ということになる。そんなおもしろ外国人が、マンションのベランダに張りついて古城たちの様子を探っていたのだ。

「あ、あなたは……？」

あまりにも奇怪な侵入者の服装に、さすがの雪菜も面喰らったような表情を浮かべていた。

自分が展開していた侵入者避けの結界が、まさかこんな忍者モドキに破られるとは思っていなかったのだろう。

「ほう……魔術迷彩か」

逆に面白そうに呟いたのはニーナだった。彼女が見つめていたのは、侵入者が羽織っていた白いローブだ。その表面にびっしりと刻みこまれているのは、難解な魔法陣である。

魔術的に人々の認識を阻害して着用者の姿を隠す、極めて高度な軍用迷彩服だった。〝雪霞狼〟によってローブの機能が破壊されていなければ、彼女の姿を視認することは、おそらく不可能だったはずだ。

「っ！」

侵入者の装備を脅威と判断して、雪菜が再び警戒する。

それを見て慌てたのは侵入者だった。

「お、お待ちを――剣巫殿！　自分に貴殿らを害する意図はありません！」

そう言って侵入者は、羽織っていたローブを脱ぎ捨てた。

むしり取った頭巾の下から現れたのは、銀髪を短く切り揃えた軍人風の若い女だった。

年齢は二十代の前半といったところだろうか。見覚えのある顔だった。

「あ……！　あんた、たしかラ・フォリアのとこの部下の――！」

「はい。アルディギア聖環騎士団所属ユスティナ・カタヤ要撃騎士であります、忍！」

古城に指摘された侵入者が、両手を合わせて、拝み倒すように頭を下げてくる。
思わずつられて古城も会釈した。忍者女の正体は、アルディギア王家に仕える騎士。王族である叶瀬夏音の護衛がその任務だ。
日本の忍者に憧れているという彼女は、目立つことをよしとせず、姿を隠したまま夏音を護っているのだという。
「に、忍？」
雪菜は、そんなユスティナを見つめたまま固まっていた。本気で攻撃態勢を取ってしまったせいで、槍を下ろすタイミングがつかめなくなってしまったのだろう。
「そうか……姫柊は直接会うのは初めてか」
彼女に同情するような口調で、古城が言う。
雪菜は槍を構えたまま、視線だけをぎこちなく古城に向けて、
「先輩のお知り合いなんですか？」
「まあ、いちおうな。ラ・フォリアが派遣してきた叶瀬の護衛だよ。だから怪しい人じゃない、と思う。単なる忍者マニアなだけで」
「御意」
そう言って慇懃にお辞儀するユスティナ。
セレスタはそれを感嘆したように眺めて、

「本当にいるのね、忍者って――」
「まあ、いちおう忍者だけど、この人はアルディギアの王女にやらされてるだけだからな」
古城が曖昧に言葉を濁しながら訂正する。
ユスティナの存在を知らされていなかった夏音は、突然現れた自分の護衛に、さすがに困惑の表情を浮かべつつ、
「あの、ユスティナさんも、一緒にご飯を食べませんか？」
そう言って彼女にお箸を差し出した。
ユスティナは感動したように深々と頭を下げて、
「王妹殿下のご厚情、光栄の至り――ですが、その前に至急、第四真祖殿にお伝えせねばならないことがございます」
「え……？　俺に？」
今度はなんだ、と古城は本気で嫌な予感を覚えた。顔を上げたユスティナの表情からは、直前までの頼りなさは消えている。訓練された軍人の顔つきだ。
「すみません。もっと早くお伝えしたかったのですが、この屋敷、包囲されています」
「え!?」
「相当な手練れです。自分も監視衛星の助けがなければ気づかなかったでしょう」
「監視衛星って……」

アルディギアは夏音を護衛するために、そんなものまで使ってたのか、と古城は呆れる。
だが今は、彼女たちのそのデタラメさが妙に頼もしい。
「敵の数はおそらく四名。ただし彼らの狙いは我らが王妹殿下ではなく――」
「――セレスタか！」
古城は直感的に気づいて叫んだ。
まるでそれが合図になったかのように、強烈な魔力が圧迫感となって襲ってきた。
敵の襲撃だと気づく前に、凄まじい衝撃でマンションが揺れた。
爆音とともに玄関ドアが粉砕され、飛びこんできたのは獣の姿をした巨大な影だ。
それを見たセレスタが声もなく絶叫する。
平和な日常が終わりを告げる――

Deity Of Darkness

1

最初に動いたのは雪菜だった。

玄関ドアを粉砕し、金属の破片を撒き散らしながら現れた歪な人影。その姿が完全に視界に入る前に跳躍し、呪力を伴う強烈な踵蹴りを叩きこむ。

「――鳴雷っ！」

顎骨が砕ける鈍い音とともに、侵入者の大柄な身体がぐらついた。

侵入者の正体は、身長二メートルを超える豹頭の獣人だ。自分自身の四倍近い体重の魔族を、続けて放たれた雪菜の掌底が吹き飛ばす。

「ユスティナさんは、叶瀬の護衛を！　アスタルテ、セレスタを頼む！」

一瞬遅れて、古城が反応した。魔族の襲撃というとてつもない異常事態にもかかわらず、この手の揉め事にすっかり慣れてしまった自分に軽く苦悩する。

「御意！」

「命令受諾」

ユスティナとアスタルテが、古城の声に応えて動いた。どことなく場違いで間の抜けた二人の返事も、この状況ではむしろ頼もしく思える。

「気をつけてください、先輩。おそらく玄関側は囮です」
倒れた獣人を睨みつけたまま、雪菜が叫ぶ。その言葉に反応して、古城は咄嗟に背後を見た。
「囮!?　陽動作戦ってことか！　ってことは――！」
リビングの窓にかかったレースのカーテンに、新たな獣人の影が映っている。
古城がそれに気づいたのと、窓ガラスが粉々に割れたのはほぼ同時だった。
「こっちが本命か！」
飛びこんできた第二の獣人を、古城が大振りの右ストレートで迎撃する。しかし渾身の力をこめたその一撃は、手応えもなく虚しく空を切った。
「なに!?」
「幻術!?　獣人が呪術を!?」
よろめく古城を見て、雪菜が驚愕の相を浮かべる。古城が殴りつけたのは、呪術によって生み出された幻影だ。幻影の背後に立っていた本体が、荒々しく牙を剝いて笑っている。
極めて高い戦闘能力を持つ獣人が、わざわざ呪術を習得する事例は希だ。だが、ごく一部に、生まれつきそのような特殊能力を身につけている種族がある。
彼らの多くは上位種と呼ばれ、通常の獣人とは桁違いに強大な力を持つことで知られていた。
そのことが雪菜の驚きの原因だ。
大きく体勢を崩した古城を目がけて、第二の獣人が巨大な鉤爪を振り上げる。

そして狙われた古城を庇って飛び出したのは、銀髪の女騎士だった。

「古城殿、伏せてください！」

ユスティナが、腰に提げていた剣を抜く。古城は言われるままに床に転がった。その頭上で魔力をまとった獣人の腕と、銀色の光が交錯する。

鮮血を撒き散らして吼えたのは獣人だ。

ユスティナが放った斬撃が、叩きつけてきた獣人の左腕を弾いて、そのまま彼の胸元を抉る。その傷口が青白い炎に包まれて、獣人が苦悶の声を上げた。

「凄エ……」

古城が感嘆の息を吐く。ユスティナの騎士としての実力は、素人の古城から見てもはっきり一流だとわかった。単純に剣の技だけならば、おそらく雪菜よりも上だろう。王族である夏音の護衛として、ラ・フォリアが派遣してくるだけのことはある。単なる忍者マニアのおもしろ外国人ではなかったのだ。

「ラ・フォリア王女より賜りし宝剣〝ニダロス〟です。アルディギア王族の傍らに侍る乙女に、破魔の力と癒しの加護を与えるといわれています」

そう言ってユスティナは、長剣を誇らしげに掲げてみせた。黄金の柄を持つ剣の刃は、霊気の炎で青く輝いている。その姿はラ・フォリアが操っていた疑似聖剣に少し似ていた。

夏音の霊気を借りてるのだ、と古城は気づく。天使に近い属性を持つ夏音の霊気は、魔族に

とっては猛毒にも等しい。
「二人とも、動かないでください」
銀色の槍を握った雪菜が、獣人たちに向かって鋭く叫んだ。構えた槍の切っ先は、倒れた第一の獣人の喉に突きつけられている。
「これ以上の戦いは無益だと思いますが、まだやりますか？」
「……」
雪菜に顎を砕かれた獣人が、ぐふ、と苦悶の息を吐いた。聞き取りにくい嗄れた声で、彼はそのまま言葉を続ける。
「シアーテの娘を、返してもらおう」
「……っ！」
怯えたように息を呑んだのは、セレスタだった。
記憶を持たない彼女にとって、獣人たちの襲撃は、見知らぬ過去から追ってきた恐怖そのものだ。なぜ自分が狙われているのかもわからないまま、ただ不安と苦悩に震えるしかない。
「その娘は、我らが育てたザザラマギウの依り代。我らのものだ」
獣人が、血走った目でセレスタを睨め上げた。雪菜が槍を握る手に力をこめる。
「本人は、あんたたちのことなんて覚えてないみたいだぜ」
怯えるセレスタを庇うように、挑発的に反論したのは古城だった。その声には隠しきれない

苛立ちが滲んでいる。

「それに、あんたらが本当にセレスタの仲間なら、堂々と正面から迎えに来れば済むことだろ。それができなかったってことは、自分たちが悪党だって白状してるようなもんじゃねーか！」

「……異邦の者どもに、慈悲を与えたつもりであったが」

く、と獣人が低く笑った。追い詰められていたはずの襲撃者たちが見せた奇妙な余裕に、古城たちが警戒する。その直後、悲鳴を上げたのはユスティナだ。ユスティナが剣を向けていた獣人の魔力が爆発的に膨れあがり、その衝撃で彼女は壁に叩きつけられる。

「――ユスティナさん!?　なんだ、こいつは!?」

目の当たりにした異様な光景に古城がうめいた。

ただでさえ巨大な獣人の身体が、さらに二回り以上も大きく膨れあがり、そのまま姿を変えていく。人型から完全な獣の形へ。体長四、五メートルにも達する禍々しい豹の姿へと――

「神獣化!?　まさか、そんな――!?」

雪菜が槍を突きつけていた獣人も、同様の変貌を遂げていた。巨大化する彼の肉体がマンションの床や壁を破壊する。魔力の無効化能力を持つ雪菜の槍でも、その変化は止められない。彼らの変貌は、魔術による幻影などではないからだ。

神獣化は、獣人種族の中でも、ひと握りの上位種だけが持つという特殊能力だ。雪菜とて、実際に遭遇するのは初めてのことである。

寿命すら縮めるほどの凄まじい消耗と引き換えに、上位種の獣人たちは、自らの肉体を神獣へと変える。鳳凰や龍にも匹敵する神話級の存在へと。その戦闘能力は、吸血鬼の眷獣をも凌ぐとすら言われている――

「セレスタ・シアーテの保護のため、自衛権を行使します。執行せよ、〝薔薇の指先〟」

羽織っていた白衣を脱ぎ捨てたアスタルテが、背中に魔力の翼を広げた。それは巨大な眷獣の腕へと変わって、二体の神獣の顔面へと振り下ろされる。

膨大な魔力同士が激突し、大気が軋んだ。しかし反動でよろめいたのはアスタルテだった。

彼女の体内に植えつけられた人工眷獣は強力だが、宿主であるアスタルテ自身は脆弱な人工生命体の少女に過ぎない。神獣二体の圧力に耐えきれるはずもない。

「アスタルテ!?　くそ……姫柊、みんなを頼む！」

「先輩!?　なにを――!?」

古城は玄関側の神獣の足元に滑りこみ、そのまま敵の背後に回りこんだ。一瞬でもタイミングが狂っていたら、神獣の巨体に踏み潰されて致命的なダメージを負っていただろう。あまりにも無謀な古城の行動に、雪菜が呆然と立ち竦む。

しかし古城に、それを気にしていられる余裕はなかった。

自分自身が放つ膨大な魔力を制御するのに手一杯だったからだ。

二体の神獣が一直線に並ぶ角度を見計らい、両手を突き出す。

その両手が作るわずかな隙間に、自らの魔力を集中させる。圧倒的な魔力を誇る第四真祖の眷獣を、ほんの一部だけ召喚するのだ。それ以外に、この危機的状況を乗り切る方法はない。

「疾く在れ、〝双角の深緋〟！」

古城が召喚したのは、荒れ狂う衝撃波の眷獣だ。

本来の姿は、全長十数メートルにも達する巨大な双角獣だが、その魔力だけを抽出して、高密度の衝撃波の弾丸として撃ち放つ。理屈の上では可能なはずだが、上手くいくかどうかはやってみなければわからない。失敗すればここにいる全員が致命的なダメージを負う危険な賭けだ。それでも今の古城には、あれこれ迷っている時間がない。

「〝雪霞狼〟――！」

「防護モード。執行せよ、〝薔薇の指先〟」

古城のやろうとしていることに気づいて、雪菜とアスタルテが同時に叫んだ。彼女たちが放つ神格振動波が防護結界を形成し、古城の攻撃を遮断する。

雪菜たちが左右に展開した結界は奇しくも砲身の役目を果たして、古城の撃ち出した魔力を収束させた。魔力を帯びた衝撃波の弾丸が、神獣化した二体の獣人をまとめて吹き飛ばし、マンションの外へと射出する。

「くっそ……完全に制御するのは、まだ無理か！」

血管が破れて血塗れになった両腕を押さえて、古城が荒々しく息を吐いた。強引な魔力制御

の代償で、脳の奥が沸騰したような苦痛を訴えてくる。
「なんて無茶をするんですか……こんな狭い場所で先輩の眷獣を使うなんて！」
ぐったりと片膝を突きながら、雪菜が眉を吊り上げて古城を睨んだ。
制御に失敗して古城の眷獣が暴走したら、このマンションを含めた周辺一帯が世界から消滅していたはずだ。その危険性を知っている雪菜が、怒り狂うのも当然だった。
「ほかに方法がなかっただろ！」
古城は頼りなく言い返す。神獣化した獣人二体に追い詰められたあの状況では、手段を選んでいる余裕がなかったのも事実だ。強大な魔力を得た神獣とはいえ、第四真祖の眷獣の直撃を受けたのだ。彼らが無事でいられるとは思えない。
だが、そんな古城の期待を裏切るように、砕け散った窓の外から獣人たちの咆吼が聞こえてくる。半壊したベランダに飛び出した古城が見たのは、隣のマンションの建物によじ登って古城たちを睨む、巨大な豹の姿だった。
「さっきのに耐えたのか――!?」
嘘だろ、と古城が思わずうめく。
二体の神獣は無事だった。無傷とまではいかないが、戦闘能力は失っていない。魔力を抑えた古城の攻撃では、彼らを倒しきれなかったのだ。
「神獣化した状態の獣人は、吸血鬼の眷獣以上の力があるといわれているんです！」

呟く雪菜の声にも焦りが滲んでいた。

「そのぶん代償も大きいですし、なにより神獣化できるほどの強力な獣人の血統は、ほとんど残っていないはずなんですが……まさか、それが同時に二体も現れるなんて……！」

神獣化した獣人たちの体内で、巨大な魔力が膨れあがっていく。爆炎を放つつもりなのだ。凝縮された魔力の炎は、おそらくこのマンションごと古城たちを消滅させるだろう。彼らの目当てであるセレスタも、もちろん無事では済まないが、自らが傷つけられた怒りで神獣たちは我を忘れているらしい。

まずい、と古城が表情を凍らせる。

「さすがに俺の眷獣はもう使えないぞ！」

「当然です！」

雪菜が古城を睨んで叫んだ。第四真祖の眷獣は、どれもこれも威力がありすぎる。基本的にこんな街中で召喚できる代物ではないのだ。

おまけに今の古城は、さっきの無理な召喚のせいで激しく消耗している。新たな眷獣を喚び出せば、たしかに神獣の爆炎は防げるだろうが、暴走した眷獣は勢い余って、なにをしでかすかわからない。

「――主たちは下がっておれ」

焦る古城たちの背後から聞こえてきたのは、余裕めかした奇妙な声だった。

声の主は、身長三十センチにも満たない小柄な人形だ。夏音の胸元に抱かれたまま、彼女は得意げに腰に手を当てている。

「……ニーナ？　あんた、その身体でいったいなにを……!?」

不敵に微笑む自称〝古の大錬金術師〟を、古城は胡乱げな表情で眺めた。

以前の〝賢者〟との戦いによって、彼女は力の大半を喪失している。そもそも錬金術師の目的は真理の探究であって、戦闘は彼女の本分ではないのだ。強大な神獣たちを相手にして、今の彼女が戦えるとは思えない。しかし、

「この妾が精魂こめて作った料理を台無しにしてくれたのだ。当然、その報いは喰らわせてやらねばな――」

そう言ってニーナは、小さな両手をそれぞれ二体の神獣に向ける。

彼女の指先に生じた眩い輝きに、古城は本能的な恐怖を覚えた。その輝きを、古城は前にも目にしたことがあったからだ。

それは単なる魔術の光ではない。錬金術の物質変換によって生み出される危険な輝きだ。青白く放電する稲妻が、巨大な砲身のようにニーナの眼前で螺旋を描く。

「案ずるな。殺しはせぬ。夏音、主の霊力を借りるぞ！」

「はい、院長様！」

不足した魔力を夏音の力で補って、ニーナが両手から閃光を放った。

凄まじい熱量と膨大な電磁波を撒き散らす、重金属粒子のビーム砲撃だ。巨大な外洋フェリーすら真っ二つに斬り裂く、灼熱の光の刃――

亜光速にも達するその砲撃は、狙い違わず二体の神獣を撃ち抜いた。

彼らの苦悶の絶叫が、ビリビリと大気を震わせる。

「ふむ。逃がしたか……」

砲撃を終えたニーナが、つまらなそうに呟いた。

閃光の余韻がようやく晴れたとき、神獣たちの姿はすでに消えていた。粒子砲に撃ち落とされて深傷を負った彼らは、そのまま逃走したのだろう。

「お、おまえ……」

粒子ビームによって生み出されたオゾン臭に顔をしかめて、古城は力なく溜息をつく。

たしかに精密なビーム砲撃なら、付近の民家にダメージを与えず、神獣だけを狙い撃つことができるだろう。とはいえ、まともな神経の持ち主が、市街地で粒子砲をぶっ放すとも思えない。ニーナ・アデラードは、齢二百七十歳を越える古の大錬金術師――やはり彼女も、世間の常識の埒外にある存在だということだ。

「で……どうするんだ、これ……」

古城は背後を振り返り、少し投げやりな口調で呟いた。

雪菜のマンションは、控え目にいっても、ぐちゃぐちゃとしか表現できない有様だった。

二体の獣人の襲撃と、彼らを撃退した古城の攻撃が原因だ。フローリングの床は捲れ上がり、壁はひび割れ、窓枠とベランダの手すりは跡形さえも残っていない。数少ない家具はすべて粉砕され、残骸となって床に散らばっていた。巡航ミサイルを撃ちこまれた廃墟のような有様だ。明らかに人が住める状態ではない。

それを確認した雪菜は、銀色の槍を畳みながら溜息をつき、

「どうしましょう――」

めずらしく頼りない表情で古城を見上げて、そう言った。

2

翌日。冬休み二日目の朝――

古城は、耳をつんざく轟音と振動で目を覚ました。

「うおっ!?」

一瞬なにが起きたのかわからず、寝ぼけた頭を抱えて本気で困惑する。

見慣れた自宅のベッドの上だ。窓ガラスにヒビが入っていることを除けば、特にいつもと違いはない。しかし部屋全体がビリビリと小刻みに震えているのは、古城の気のせいではないだろう。壁越しに隣の部屋から伝わってくるのは、コンクリートを削るドリルの騒音だ。

「そうか、姫柊の部屋を修理してるのか……って、こんな朝っぱらからかよ……」

時計を確認して肩を落とし、古城はのろのろとベッドを下りた。

獣人たちの襲撃で破壊された雪菜のマンションは、獅子王機関の手配で、すぐに修理されることになったらしい。金に糸目をつけない突貫工事によって、凪沙が本土から帰ってくるまでには元通りに復旧される、と聞いていた。

雪菜本人の衣服や持ち物は、数が少なかったこともあり、どうにか被害を免れていたらしい。破壊された家具や食器類も、すでに同じものが注文されているという。呪術迷彩による隠蔽と、催眠暗示で、近隣住民の記憶処置も万全だ。

残るは、工事が終わるまでの約一週間、雪菜がどこに寝泊まりするか、という問題だけ。だったのだが――

「先輩。おはようございます」

自分の部屋を出た古城と鉢合わせたのは、雪霞狼の手入れをしていた雪菜だった。めずらしい私服姿である。髪型もいつもとは違う。ヘアゴムで束ねただけの無防備な髪型だ。床の上にそっと槍を置き、彼女は緊張気味に頭を下げる。

「あの、昨晩は泊めてくださってありがとうございました」

「あ、ああ……まあ、あの状況じゃ仕方ないよな。ろくに窓ガラスも残ってないような部屋に、セレスタを寝泊まりさせるわけにもいかないし」

「で、ですよね」

古城と雪菜は微妙に目線を逸らしたまま、そう言って互いにぎこちなく笑った。

行き場のなかった雪菜たちは、結局、暁家に泊まることになったのだ。セレスタも一緒ということで、特に気にすることもなかったが、こうして早朝から自宅で顔を合わせると、やはり不思議な気分だった。普段は知らない雪菜の私生活が垣間見えて、妙に意識してしまう。

「そういえば、セレスタは？　まだ寝てるのか？」

古城が部屋を見回しながら強引に話題を変えた。雪菜は槍をケースに戻しながら首を振り、

「いえ、それが――」

そう言って彼女は、ダイニングテーブルに視線を向ける。

テーブルの上に並べられていたのは、作りたてとおぼしき多数の料理の皿だった。魚介類のスープとマリネ、肉や野菜を詰めこんだトルティーヤ。セレスタの出身地の料理なのだろう。あり合わせの材料で拵えたにしては、手がこんでいて美味そうだ。

「この料理、セレスタが作ったのか？」

古城が驚いた表情で訊く。所在なげにキッチンの奥に立っていたセレスタが、カウンター越しに顔を出し、

「なによ、文句あるの？」

「いや、すごいな」

古城が正直な感想を口にする。異邦の少女は、なぜか少し面喰らったように唇を尖らせて、
「なんとなく、作り方を覚えてたの。泊めてもらったんだから、せめて食事くらい作るわよ。あんたたちに任せて、変なもの食べさせられても困るし。ヴァトラー様に食べていただくときの予行演習にもなるし」
「……俺たちはあいつの毒味役かよ」
セレスタの最後のひと言に、今イチ釈然としない気分で呟く古城。
一方のセレスタは、妙にキラキラとした眼差しで水道の蛇口を指さして、
「でも、これってすっごく便利ね。スイッチひとつで火がついたり、レバー捻るだけで水が流れたり。トイレから水が噴き出したときはどうしようかと思ったけど――」
「……トイレはともかく、ガスや水道がめずらしいって意外だな。おまえの故郷って、そんな不便な土地だったのか？」
「知らないわよ。覚えてないんだもの」
セレスタが不機嫌そうに言い返す。それもそうか、と古城は肩をすくめた。
おそらく雪菜も手伝ったのだろうが、慣れない調理器具を使って見事な料理を作るあたり、セレスタの調理スキルはかなりのものだと認めざるを得ない。
そのことに素直に感謝しつつ古城は食卓についた。獣人たちの乱入で夕食を台無しにされて、昨晩からなにも食べていなかったのだ。おかげで猛烈に腹が減っていた。セレスタと雪菜

も着席して、三人での奇妙な朝食が始まる。
「ねえ……昨日のやつら、なんだったのかな」
古城がひととおり食事に口をつけたころ、セレスタが思い出したようにぼそりと言った。激辛タコスを口いっぱいに頬張ったまま、古城はもごもごと首を振り、
「さあな。おまえが気にする必要はないと思うけどな」
「なによ、あんた。他人事だと思って」
セレスタが、ふて腐れたように頬杖をついて古城を睨む。
「そうじゃなくてさ、あいつら、やり方は無茶苦茶だったけど、おまえのことが必要だから、連れ戻しに来たんだろ。だったら、とりあえずおまえが傷つけられる心配はないんじゃないか」
「まあ、それはそうかもしれないけど、あんたたちは、どうなるのよ？　またあいつらが襲ってきたりしたら……」
うつむいたまま呟くセレスタを見つめて、古城は不思議そうに目を瞬いた。
「……もしかして心配してくれてるのか？」
「は？　なにそれ。死ねば？」
セレスタが、害虫を見るような冷たい瞳で古城を睨んでくる。
古城は少し傷ついたような表情でトルティーヤを噛みちぎり、

「うるせえな。とにかく、それこそ余計なお世話だよ。昨日も見ただろ。俺も姫柊も、自分の身くらい自分で護れるし。ヴァトラーのやつもそう思ったから、俺におまえを預けたんだろ」

「様をつけなさいよ、クソ虫野郎」

「おまえな……」

食卓を挟んで、険悪な表情で睨み合うセレスタと古城。見かねた雪菜が握っていたナイフを、無言でテーブル中央の肉の塊に突き立てた。いがみ合っていた古城たちは、恐怖に凍りついたように動きを止める。それを確認して雪菜は小さく息を吐き、

「セレスタさんが昨日のような襲撃にさらされることは、おそらくもうないと思います。第四真祖が護衛してるということに彼らも気づいたはずですし、獅子王機関も動いてますから」

神獣化ができるレベルの獣人が、絃神島に違法に入りこんでいるというのはかなりの問題だ。だから獅子王機関からも、専任の捜査員が派遣されてくるのだという。もちろん特区警備隊も動いているはずだ。獣人たちの立場はセレスタを襲う側から、追われる側へとすでに変わっているのだ。

「また襲ってきたら襲ってきたで、あいつらがおまえについて知ってることも聞き出せるかも知れないしな。そのくらい気楽に構えてればいいんじゃねーか？」

素っ気ない口調で言い放つ古城を、セレスタは少し驚いたように見つめた。古城が自分を気遣ってくれたのが、よっぽど意外だったらしい。

「そういや、あいつら、妙なことを言ってたな。ザララマサラの依り代がどうこうって……」

古城が何気なく思い出した言葉を口にする。セレスタを襲ってきた獣人たちは、彼女のことを依り代と呼んでいた。彼らが育てた依り代だと。

「ザザラマギウ、です」

雪菜が古城の間違いを律儀に指摘する。たいして違わねーだろ、と古城は顔をしかめて、

「姫柊は知ってるのか、そいつのこと」

いえ、と雪菜は首を振った。剣巫である彼女も知らない名前だったらしい。

「ただ、依り代というのは、普通はいわゆる神体のことです。神木や磐座、それに武器や神具など――それと、もうひとつ、神降ろしの巫女を依り代と呼ぶこともあるんです」

「……巫女……こいつが？」

古城が驚いてセレスタを見た。なにか文句があるのか、と半眼で古城を睨み返すセレスタ。

「もしかしてこいつも、姫柊や叶瀬みたいな霊能力者なのか？」

「わかりません。今はただ、その可能性がある、としか――」

雪菜が曖昧に首を振る。

彼女の戸惑いの原因は、古城もいちおう理解していた。単なる霊能力者より、神獣化できるクラスの獣人のほうが遥かに貴重な存在なのだ。その事実が雪菜を困惑させている。霊能力者一人を手に入れるために、貴重な上位種の獣人を二体も危険にさらすのは、どう考えても割が

合わないのだ。

古城は携帯電話を取りだして、〝ザザラマギウ〟という単語を検索してみる。しかしそれらしい候補は出てこない。単語の綴りを変えて何度か試してみるが、やはり結果は同じだった。

「結局、どうにかしてヴァトラーと連絡を取るのがいちばん手っ取り早いってことか」

古城が気乗りしない表情で溜息をつく。セレスタはそんな古城を横目で睨み、

「だから様をつけなさいってば――！」

「誰がつけるか！」

鬱陶しげに言い返す古城の手元で、突然、安っぽい音楽が流れ出した。携帯電話の着信音だ。

「な……なに……？」

怯えたように携帯電話を見つめて、セレスタが縮こまる。ガスや水道を見て驚いていた彼女にとって、携帯電話は、脅威のオーバーテクノロジーの産物なのだろう。

そんなセレスタに構わず古城は電話を手に取り、

『――古城!?　無事なの!?』

回線がつながると同時に聞こえてきたのは、どことなく切羽詰まった浅葱の声だった。古城はわけがわからず電話を眺めて、

「……え？」

『え、じゃないわよ！　あんたん家のマンションで爆発事故があったって聞いたわよ！　監視

カメラで見たら、なんか馬鹿でっかい穴が空いてるし！』

「なんでおまえがウチの近所の監視カメラを見られるんだよ……」

またハッキングしやがったな、と古城は低く唸った。獅子王機関の隠蔽工作をもってしても、浅葱の情報収集能力を上回ることはできなかったらしい。

「まあいいや。とにかく俺は大丈夫だから。爆発したのは、ウチじゃなくて姫柊ん家だし」

『……は⁉　姫柊さん？　ちょっと、なによそれ？　どうなってんの？』

浅葱が混乱したような声を出す。古城は気怠く溜息をついた。

「俺たちにもよくわかんねーよ。いきなり変な獣人に襲われて、結局そいつらには逃げられたし」

『……獣人て……あんたたち、また妙な事件に首を突っこんでるんじゃないでしょうね？』

「好きで巻きこまれてるわけじゃねえよ……そうだ、浅葱。ザザマラギラって知らないか？」

『え、なに？　ザララギ？　ゲームの呪文？』

思いつきで口にした古城の質問に、浅葱の声が不機嫌になった。はぐらかそうとしていると思われたのかもしれない。雪菜が唇の動きだけで、ザザラマギウです、と訂正してくる。

「悪い、違った。ザザラマギウだ。ご神体だか巫女だかの名前らしいんだが」

『聞いたことないけど、それがどうしたの？』

「いや、ちょっと知りたかったんだけどな……ネットで検索しても出てこなくて」

まだ少し疑わしげな声の浅葱に、古城は投げやりな口調で言った。
『ふーん……あたし、午後から公社のバイトだから、必要なら調べるけど？』
「悪い、じゃあ、頼んでいいか？」
かすかな期待をこめて、古城が訊く。
人工島管理公社のデータベースには、一般公開されることのない〝魔族特区〟の機密情報が登録されている。ザザラマギウの依り代とやらの手がかりが、見つかる可能性は高かった。
『いいけど、それなりの見返りは覚悟しといてよね』
油断する古城に釘を刺すように、浅葱が弾むような声で告げてくる。冗談めかした口調だが、それが冗談で済まないことを古城はよく知っていた。
「へいへい……で、用事はそれだけか？」
『ま、まあ……あとは用事ってほどじゃないけど、凪沙ちゃんって、今、帰省中なのよね？』
「ああ。昨日からな」
なぜか急にしおらしさを増した浅葱の態度に、古城はむしろ緊張を覚えた。過去の経験と吸血鬼の勘が、危機の接近を知らせていた。
『古城は食事とかどうしてるの？　もし困ってるなら、作りに行ってあげてもいいわよ？』
「食事を作る……って、おまえがか？」
古城は、ぐ、と息を詰まらせた。浅葱の料理の腕前は、控え目に表現しても壊滅的だ。不老

不死の吸血鬼である古城ですら、彼女の料理を食べた翌日は身動きできなかったのだ。

『なによ、その不安そうな反応は？』

浅葱の声が低くなる。古城は激しく焦りながら首を振り、

「い、いや、気持ちはありがたいけど、大丈夫。とりあえず食事は足りてるから――」

『ちょっと待って。姫柊さん家って、爆発して穴が空いてるのよね？』

なにか重大なことに気づいた、というふうに、浅葱が重々しい声で確認してくる。

『――彼女は昨日、どこに泊まったわけ？』

「それは……とりあえずウチだけど……ほら、これも近所づきあいっていうか、困ったときの助け合いっていうか」

古城が声を上擦らせながら言い訳した。浅葱はわずかに沈黙する。

『凪沙ちゃんがいないのに、あんたん家にあの子を泊めたわけ……ふーん……そう。食事の支度も、彼女がやってくれたってわけ？』

「いや、メシを作ってくれたのは姫柊じゃなくて、べつの子だから、えーと……安心しろ」

端的に事実だけを証言する古城。その瞬間、電話回線の向こう側で、なにかが砕けるような異音が鳴った。おそらく浅葱の握力に耐えかねて、彼女のスマートフォンが割れたのだ。

『余計悪いわよっ！　なに考えてんの、馬鹿死ね！』

怒号とともに電話が切れた。古城は渋面で耳を押さえる。浅葱の怒鳴り声のせいで鼓膜が痛

い。雪菜は無言で目元を覆っている。
「痛ってえな。なに怒ってんだ、あいつ」
「先輩……」
不満げに呟く古城を見つめて、雪菜が呆れたように嘆息した。

3

朝食を終えた古城たちは、すぐさま人工島西地区へと向かった。飲食店やファッションビルなどが集まる商業地区。絃神島きっての繁華街である。
特に理由があったわけではなく、強いていえば観光と買い物が目的だった。実際のところは、姫柊家の工事の騒音がひどくて、マンションにいられなかったのだ。それにいつまでもセレスタに、古城のTシャツを着せておくわけにはいかない、という事情もあった。年齢の割にメリハリの利いた体型のセレスタに、薄着でうろつかれては主に古城が困る。
「これが……絃神島？」
ガラス張りの展望スペースから周囲を見回して、そのセレスタが不思議そうに呟いた。
ショッピングモール最上階のレストランフロアだった。ひととおりの買い物を終えてセレスタを着替えさせたところで、一休みすることになったのだ。

セレスタが選んだのは革製のサンダルと、カラフルな刺繍を施したショート丈のワンピースだった。彼女の鮮やかな褐色の肌に、エスニック風の色使いがよく似合っている。すらりと長い手脚と端整な顔立ちのおかげで、撮影中の雑誌モデルといっても誰も疑わないだろう。

これでもう少し性格に可愛げがあれば、と思わずにいられない古城である。

「なんかゴミゴミしてるわね。やたら人は多いし、うるさいし」

そのセレスタが、顔をしかめながら景色に文句をつけた。絃神島自慢の近未来的な景観も、慣れないセレスタの目には、あまり好ましくは映らなかったらしい。

まあそうかもな、と古城は彼女の意見を認めて、

「このあたりは商業地区だからな。南地区や北地区は、もう少し静かなんだけど」

「ふーん……あの大きな建物は？」

そう言ってセレスタは、島の中央に建つビルを指さした。人工島の中でもひときわ異彩を放つ、楔形の巨大な建物だ。

「あれはキーストーンゲート。絃神島の中心部。あの向こう側に空港やら港があるから、ヴァトラーのやつに会えるとしたら、たぶんそっちだ。どうせ自前の馬鹿でかい船に乗ってくるから、帰ってきたらすぐにわかるだろ」

「船!?　ヴァトラー様の!?」

セレスタが声を弾ませながら話題に喰いついてくる。そんなわかりやすい彼女の態度に、古

城は微妙に不機嫌な表情を浮かべて、
「〝洋上の墓場Ⅱ〟とかって、趣味の悪い名前のクルーザーだよ。中はメチャメチャ豪華だけどな。風呂場だけでも、この店くらい広かったし」
「詳しいわね、あんた」
セレスタが不審げな目つきになった。さらには、それまで黙って聞いていた雪菜までもが、なぜか古城に無感動な瞳を向けてきて、
「そういえば先輩は、あの船のお風呂に入ったことがあったんでしたね。藍羽先輩と一緒に」
「ちょ……ちょっと待て！　なんで姫柊が、そのことを知って……!?」
忘れたころに出てきた不発弾のような雪菜の証言に、古城はどうしようもなくうろたえた。もちろん古城には、雪菜が式神を使って、あの夜の一部始終を監視していたことなど知る由もない。そしてセレスタが血相を変えて古城に詰め寄ってくる。
「なんであんたがヴァトラー様のお風呂に入ったわけ!?　あんたたちがどういう関係なのか、詳しく説明しなさいよ！」
「やむにやまれぬ事情があったんだよ！　でなきゃ、誰が好きで入るか！　そもそもあいつは、どっちかっていえば俺の敵なんだって！　昨日から散々そう言ってるだろ！」
「なによ。いいじゃない！　もっとヴァトラー様の話を聞かせなさいよ！　好きな食べ物とか、好きな音楽とか、好きな女の子のタイプとか」

「途中から目的が変わってるじゃねーか!?」
古城が呆れ顔で舌打ちする。そもそもヴァトラーは女に興味がないのではないか、とはさすがにセレスタには言えないが――
「……まあ、ヴァトラーにこだわる気持ちはわかるけどな。おまえの正体につながる、唯一の手がかりだもんな。浅葱のやつもザザラギウのこと、なんにも言ってきやがらないし」
「ザザラマギウです、先輩」
いい加減覚えてください、と雪菜が年上の家庭教師のような口調で言う。
そんな雪菜と古城の姿を、セレスタがまじまじと見つめて訊いた。
「ねえ、あんたたちって、なんなの、本当に」
「あ?」
「本当にヴァトラー様の家来じゃないの?」
「最初からそう言ってるだろ」
平坦な口調で答える古城。見た目こそ非の打ち所のない美青年だが、あの男の正体は狡猾で腹黒で変態性癖の戦闘狂なのである。上司にしたくない人物ランキングなら、ぶっちぎりの最上位だ。
ふん、とセレスタは不満そうに鼻を鳴らして、
「なのに、どうしてあたしの面倒を見てくれるわけ?」

「どうしてと言われてもな……それって理由が必要か？　べつにたいしたことはしてないし」
「獣人に襲われたりしたじゃない」
セレスタが、つらそうに表情を歪めて呟いた。
自分のせいで古城たちが襲撃を受けたこと。命の危険に晒されたこと――セレスタがそれを密かに気にしていたのだと、今ごろになって古城は気づく。
「あいつらに襲われたのは、おまえのせいじゃないだろ。それに成り行きとはいえ、おまえを護りきれなかったら、ヴァトラーのやつになにを言われるかわかったもんじゃねーし」
「あんたはそれでよくても……地味女は？」
「わたし、ですか？」
唐突に話題を向けられた雪菜が、少し困ったように首を傾げる。
セレスタは頬を赤らめながら、言いにくそうに目を逸らし、
「あたしがいなかったら古城と二人きりで夜を過ごせたのに、邪魔しちゃって悪かったなって」
「な、なに言ってるんですか!?　ふ、二人きりだからって、べつに、そんな……」
雪菜が物凄い勢いで首を横に振った。そして彼女は、こほん、と咳払いして姿勢を正し、
「わたしはただの先輩の監視役ですから。むしろ危険人物である先輩が、セレスタさんに手を出したりしないように、見張る義務がありますし……！」

「そ、そっか……あ、ありがと」
セレスタが自分の胸元を両手で庇って、古城から微妙に距離を取る。
危険人物扱いされた古城が、あまりの理不尽さに抗議の声を上げ、
「待てコラ!?　なんで姫柊に感謝する流れになってんだよ!?」
「それにアルデアル公の思惑が、個人的に少し気になりますし」
古城の抗議をきっぱり無視して、雪菜がそう呟いた。
セレスタの瞳にかすかな不安の翳がよぎる。
「気になるって、なにが？」
「いえ、気にしないでください。ただの思い過ごしだと思います」
「う、うん」
「ところで、先輩――気づいてますか？」
槍入りのギグケースを手元に引き寄せながら、雪菜が小声で古城に訊いた。彼女が浮かべていた表情は、警戒というよりは、途方に暮れているという印象に近い。
「え？」
「わたしたち、さっきから尾けられてるみたいなんですけど」
「あー……あれな」
古城が横目で眺めたのは、レストランの入り口付近にあるボックス席だった。半透明のパー

ティションの陰から、古城たちの様子を、ちらちらとのぞいている人影がある。特徴的なシルエットの、小柄な二人組だった。

「まあ、ほっとくわけにもいかないか」

「そうですね」

どちらからともなく溜息をついて、古城と雪菜は立ち上がった。そのまま問題のボックス席へと向かう。二人組の尾行者は慌てて頭を下げたが、その程度で姿を隠せるはずもなかった。

テーブルにうつ伏せた二人を見下ろす古城が、疲れたような声を出す。

「なにやってんだ、おまえら」

「あ……」

尾行者たちが顔を上げた。一人は銀髪碧眼の女子中学生で、もう一人は藍色の髪をした人工生命体の少女だった。この〝魔族特区〟においてさえ、どちらも異様に目立つ容姿の持ち主だ。尾行にもっとも不向きな人材なのは間違いない。

「あ、お兄さん……ぐ、偶然でした」

「吃驚」

叶瀬夏音とアスタルテが、それぞれわざとらしい口調で言う。古城は夏音がかけていた赤いセルフレームの眼鏡を奪って、

「こんなあからさまな偶然があるか。ていうか、なんだ、これ。変装のつもりか？」

「あ、か、返してください……」

あうあう、と眼鏡に手を伸ばす夏音。夏音の胸に抱かれていたニーナが、その反動で転がり落ちた。そして床に激突する寸前、伸びてきた雪菜の手に拾われる。

「もしかしてセレスタさんの様子を見に来てくれたんですか？」

「うむ。古城が彼奴に手を出さぬよう、見張っておかねばと思ってな」

雪菜の肩によじ登りながら、偉そうな口調でニーナが告げる。

「……たく、どいつもこいつも。おまえら俺をなんだと思ってんだ」

古城は傷ついた表情を浮かべて呟いた。

たしかに古城は雪菜やアスタルテの血を吸ったし、その現場を夏音やニーナに目撃されたこともある。しかしそれはあくまでも非常事態であり、やむを得ない事情があったのだ。決して無差別に女子を襲っているわけではない。

結果的に、そう見えないことを自覚していないわけではないのだが――

「そういえば、那月ちゃんとは連絡が取れたのか？」

「肯定。ミス・セレスタの情報も報告しました」

古城の質問に、アスタルテが答えた。その情報に古城は少しホッとして、

「そうか。それで那月ちゃんはなんて言ってた？」

「私は忙しい、そっちは任せた、とのことでした」

「適当だな、おい!?」
古城の安堵が失望に変わる。那月なら、このわけのわからない状況をどうにかしてくれると期待していたのだが、どうやらその考えは甘かったらしい。
「あ……」
夏音が小さく声を洩らす。
「補足。南宮教官から第四真祖に伝言があります」
落胆する古城を見つめて、アスタルテは淡々と続けた。古城がハッと顔を上げる。まだ希望が残っていないわけではないらしい。
「伝言？　なんだ？」
「アンジェリカ・ハーミダという女性と遭遇した場合、速やかに逃走せよ、とのことです」
「……誰だ、それ？」
古城がアスタルテに訊き返した。
しかし人工生命体の少女は、無表情に首を振るだけだ。古城は雪菜に視線を向けたが、彼女も黙って首を振る。やはり雪菜にも心当たりはないらしい。
「あの……」
再び遠慮がちに手を挙げる夏音。
「会ったら逃げろ、ということだよな……だけど相手の顔もわからないのにどうやって……」

古城が、困惑の表情で愚痴をこぼす。那月が、なぜそんな情報をアスタルテに託したのか、いくら考えてもさっぱりわからない。

逃げろ、という助言の中身も気になった。那月は古城が第四真祖だということを知っている。つまりアンジェリカ・ハーミダは、世界最強の吸血鬼でも勝てないほどの相手ということか。

「ところで、古城。逃げるといえば、さきほどから気になっていたのだが――」

悩み始めた古城を見上げて、ニーナが突然口を挟んできた。

「セレスタ・シアーテはどこへ行った？」

「……は？」

ニーナの言葉に反応して、古城は無意識に背後を振り返る。さっきまで古城たちが座っていた場所に、残してきたはずのセレスタの姿はなかった。いつの間にか消えている。

店内で騒ぎが起きていないところを見ると、攫われたというわけでもなさそうだが――

「あの……セレスタさんなら、さっき一人でお店を出て行きました」

怖ず怖ずと口を開いた夏音が、店の奥の非常口を指さして言った。半開きになったままの防火扉に気づいて、古城と雪菜が絶句する。どうやら夏音は、さっきから必死にそれを伝えようとしていたが、占城たちに気づいてもらえずにいたらしい。

とにかくセレスタは消えていた。古城たちにひと言も残さずに立ち去ったのだ。

「あの……バカ！　なに考えてやがんだ!?」

古城が呟きを洩らすと同時に、雪菜が非常口に向かって走り出す。
責任を感じているような表情で、夏音たちは彼らを不安そうに見送っていた。

4

非常階段を下りてきた古城は、ショッピングモールの入り口で雪菜と合流した。念のために夏音たちにも協力を頼んで、下着売り場や女子トイレも探してもらっている。しかしセレスタを見つけたという報告は今もない。
「姫柊、セレスタは？」
見つかったか、と訊く古城に、ギグケースを背負った雪菜が首を振る。
「すみません。こんなことなら、彼女にも監視用の呪術をかけておくべきでした」
「あいつにも……って、もしかして俺にはかかってんのか、その呪術!?」
そこはかとなく不安な表情を浮かべて、自分の身体を見回す古城。
「先輩、今はそれよりもセレスタさんを――」
「そう……だな……」
雪菜の言葉に、古城は曖昧にうなずいた。だがすぐに、その場で足を止める。
「先輩？」

雪菜が怪訝そうに振り返り、古城はゆっくりと首を振った。

「ああ……いや、そこまでして俺たちはセレスタを探さなきゃいけないのかな、って思ってな。あいつはそれを望んでないんじゃないか、って」

「本気でそんなことを思ってるんですか!?」

雪菜が唖然としたように目を見張る。しかし古城は悔しげに唇を震わせただけだった。

セレスタが姿を消したことに、古城は自分でも意外なくらい虚しさを覚えていた。落ちこんでいた、と言ってもいい。たしかに古城はセレスタに信頼されていたわけではない。が、それなりに打ち解けてきたつもりだったのだ。それだけに裏切られたというダメージがでかい。

「だって、そうだろ？　セレスタは誰かに攫われたんじゃなくて、自分の意思で勝手にどっか行ったわけだし。そもそもあいつには俺たちと一緒にいる理由がねーんだよ。ヴァトラーのやつが、あいつを俺たちに送りつけてきた目的だってわかってないんだし」

「先輩――！」

雪菜が失望の眼差しを古城に向けてきた。

まるで彼女自身が古城に見捨てられて傷ついた、と言わんばかりの表情だ。どうして雪菜がそれほどまでに憤るのか、古城にはその理由がわからない。

だが、思えば雪菜は最初からセレスタのことをずっと気にかけていた。セレスタが依り代と呼ばれたときからは、特にそうだ。地味女呼ばわりされながらも、忍耐強くセレスタのことを

見守っていた気がする。
その理由を雪菜に確かめるべく古城が口を開きかけたとき、ポケットの中で携帯が鳴った。
「ああくそ、誰だ、こんなときに……！」
荒々しく舌打ちしながら、古城は震える電話機を引っ張り出す。画面に表示されていたのは、見慣れた浅葱の番号だ。
『古城、わかったわよ！　ザザラマギウの正体！』
「浅葱、悪いけど今はちょっと取りこみ中で――――わかった？」
彼女の言葉を遮ろうとした古城は、慌てて携帯を耳に当て直した。セレスタの行方は気になるが、ザザラマギウの正体は、その件ともあながち無関係ではない。
「訂正だ、浅葱！　教えてくれ。なんだったんだ、ザザなんとかの正体は!?」
『ザザラマギウは、神様よ』
「は？　神……？」
浅葱が口にした突拍子もない単語に、古城は当惑したように眉を寄せた。
しかし浅葱は至って真面目な口調で続ける。
『そ。信仰する人々の絶えた、忘れ去られた神。別名は〝冥き神王〟――いわゆる邪神ね。殺戮と破滅ともたらす冥府の王よ。今から千二百年以上前に、中米の小さな都市で信仰されてたって記録が残ってたわ』

「よくわからんが、誰も覚えてないようなマイナーな神様ってことか？」

占城も漠然と事情を理解した。ザザラマギウが本当に神の名前なら、セレスタが、その依り代と呼ばれていたことにも説明がつく。中米の都市国家では、様々な神が信仰されていた。ザザラマギウも、それら数多の神々の中のひとつだったのだろう。

『まあね。ただ問題は、そのマイナーな神様のデータが〝魔族特区〟の凍結書庫に厳重に封印されてたってことなの。どうやらザザラマギウは、過去に一度、現出したことがあるみたいなのよね』

「現出した？　誰かに召喚されたってことか？」

古城の表情が険しさを増した。神を召喚して実体化させる――にわかに信じられる話ではないが、荒唐無稽と切り捨てることもできない。

人々の祈りに応えて降臨した神の伝承は、古今東西あらゆる地方に残されている。そしてなによりも古城はかつて、人工的に生み出された〝天使〟と戦ったことがあるのだ。不完全とはいえ〝天使〟を実体化させることができたのだから、〝神〟の実体化が不可能と断言することもできないはずだ。

『たぶんね。正確な情報は残ってないから、詳しいことはわかんないけど。なにしろザザラマギウが現出したせいで、彼を信仰していたシアーテって都を中心に、半径五百キロ以内の街はすべて滅びたらしいわ。二百万人以上が一夜にして死に絶えたって――』

「シアーテの都……!?」

ぞくり、と古城は背筋に悪寒を覚えた。ザザラマギウの依り代と呼ばれているのは、セレスタ・シアーテという名前の少女なのだ。それがただの偶然とは思えない。

『そう。現在の地図だと〝混沌界域〟の辺境あたりね。もちろん〝混沌界域〟が成立したのは、都市国家シアーテが消滅したあとだけど』

セレスタの存在を知らない浅葱が、のんびりとした口調で説明してくる。しかし古城は彼女の言葉を、半分も聞いていなかった。

「わかった。浅葱、サンキュ。助かった」

『ちょ……待ちなさいよ！　なんで古城がそんな邪神の名前を知ってたの？　あんた――』

問い質そうとする浅葱を無視して、古城は傍にいる雪菜と目を合わせた。

「姫柊、今の話――」

「はい、聞いてました」

占城の耳元に顔を寄せていた雪菜が、真剣な表情でうなずいた。

「もしセレスタさんが本当に邪神の依り代だとしたら、彼女を狙っていた獣人たちは、ザザラマギウ信者の末裔かもしれません。だとしたら彼らの目的は――」

「……ザザラマギウの復活か」

神殿。依り代。巫女。邪神――バラバラに切り離されていた情報が、今になってようやくつ

ながった気がした。

獣人たちは、セレスタを自分たちが〝育てた〟と言っていた。それはつまり、邪神の巫女としての特別な処置を施した、という意味ではなかったのだろうか。

だとすれば、彼らがセレスタを追いかけてきた理由もわかる。セレスタはただの巫女ではない。彼女は邪神の召喚に必要な貴重な祭具――取り替えの利かない〝生贄〟なのだ。

獣人たちが、なんの目的でザザラマギウの降臨を望んでいるのかはわからない。

しかし彼らの目的がザザラマギウの召喚なら、彼らはどんな犠牲を払ってでも、セレスタを取り戻そうとするだろう。

そしてセレスタ自身は、まだそのことを自覚していない。早く彼女を見つけ出さなければ、セレスタの身が危険だった。

「助けるぞ――」

古城が圧し殺した声で呟いた。雪菜が意表を衝かれたように目を瞬く。

「え？」

「俺はただの高校生だし、第四真祖の力なんか知ったことじゃねーし、ヴァトラーのやつは迷惑だし、古代の邪神にも興味はねーよ」

古城が、ギリ、と奥歯を噛み鳴らす。

脳裏をよぎったのは、氷の柩の中で眠っていた小柄な吸血鬼の少女の姿だ。

液体金属生命体の監視者にされた自称〝大錬金術師〟や、人工の天使にされそうになった後輩もいた。もう二度と、彼女たちのような犠牲者は出さない。そのためになら神すら敵に回してもいい、と思う。

「だけどそれよりもなによりもムカつくのは、依り代だの生贄だのって、なにも知らない小娘を道具扱いしてるやつらと、それを運命だのなんだのって諦めて受け入れてる馬鹿だ！　手を貸せ、姫柊！　セレスタの馬鹿を助けるぞ！　絶対にだ！」

「はい、もちろん！」

雪菜が、瞳を輝かせて勢いよくうなずいた。

まるで古城のその言葉で、彼女自身が救われた、というふうに。だが、さすがに立場上その発言はまずいと思ったのか、彼女はすぐに焦って表情を取り繕い、

「あ……ち、違……今のは、あくまでも監視役として同行する、という意味ですから……」

ごにょごにょと口の中で呟いている雪菜は気にせず、古城は再び電話を耳に当てた。

「浅葱、もうひとつ調べてくれ。〝オシアナス・グレイヴⅡ〟はどこにいる？」

『あんたねえ……』

今まで思いきり無視されていた浅葱が、むくれたような声を出す。

『調べるもなにも、〝オシアナス・グレイヴⅡ〟ってヴァトラーさんの船でしょ。それなら、もうすぐ港に着くわよ』

「え……!?」

『そんな驚くほどのことでもないでしょ。しばらくどこかに行ってたけど、戻って来たんじゃないの？　そろそろ肉眼でも見えてくると思うけど――』

「……」

古城は無言で視線を港の方角へと向けた。今の位置からでは、キーストーンゲートが邪魔で港は見えない。しかしさっきまで古城たちがいたビル最上階の展望スペースからだったら？

それでも港までは相当な距離があるはずだが――

「まさか、あいつ、ヴァトラーの船が見えたのか？　どういう視力してやがんだ……!?」

そう呟いて古城は電話回線を切る。抗議するような浅葱の声が、最後に一瞬だけ聞こえたが、それを気にしている余裕はなかった。

〝オシアナス・グレイヴⅡ〟という船の存在を、セレスタに教えたのは古城だった。ヴァトラーの帰還に気づいたセレスタが、後先考えずに彼の許に向かった、というのは、実にありそうなことだった。セレスタにとって、ヴァトラーはそれだけの価値がある存在だし、そもそも古城たち以外に彼女が頼れる相手は、この島にはヴァトラーしかいないのだ。

ちょうどそのとき古城たちのほうへと駆け寄ってくる夏音たちの姿が見えた。セレスタを探し回っていてくれたのか、夏音もアスタルテも肩で息をしている。

「――悪い、二人とも。セレスタの居場所はたぶんわかった。叶瀬とアスタルテは、このまま

帰ってくれ。落ち着いたらまた連絡するから」

そう言って古城は、二人に両手を合わせた。

実際にはセレスタの居場所がわかったわけではない。大雑把に港といってもかなりの範囲だし、そもそもセレスタが本当に港に向かったという保証もない。ただ、これ以上は夏音たちを危険にさらせないと判断したのだった。

そんな古城の目の前に、夏音が、抱き上げたニーナを差し出してくる。

「あの、もう少しだけお手伝いさせて欲しい、でした。院長様がお役に立ちますから」

「ニーナが……？」

半信半疑の表情で、古城はニーナの小さな身体を見つめる。身長三十センチ足らずの液体金属人形が、この場面で役に立つとは思えなかった。ニーナ自身も、夏音がどうしてそんなことを言い出したのか、腑に落ちないという表情を浮かべている。

しかし夏音は、大丈夫でした、と優しげに微笑んで、

「セレスタさんは〝賢者の霊血〟製のイヤリングをつけてましたから、彼女がどっちに行ったか、院長様ならわかるはずだと思いました」

「……おお！」

なるほど、と感心したように指を鳴らすニーナ。

そんな自称〝大錬金術師〟を見下ろして、あんたも気づいてなかったのかよ、と古城は、

疲れたように呟いた。

5

セレスタ・シアーテは、港外れの埠頭に立っていた。

革製のサンダルに、カラフルな刺繍を施したワンピース。特徴的な蜂蜜色の金髪が、強い海風に揺れている。

錆びた手すりにもたれたまま、彼女は沖合に浮かぶ船をぼんやりと眺めていた。個人所有としては破格の規模の大型クルーザーだ。船名は〝オシアナス・グレイヴⅡ〟――暁古城の言葉が事実なら、その船にはディミトリエ・ヴァトラーが乗っている。

そのことを理解しながらも、彼女は船に近づくことができなかった。

ディミトリエ・ヴァトラーに会いたいと思う。彼は血みどろの神殿で、絶望の中から自分を救い出してくれた恩人だ。しかし会いたくない、という気持ちもある。おそらく彼に会えば、すべてが終わるという予感があった。この短くも幸福だった夢のような平穏のすべてが――

「セレスタ――！」

古城の声が彼女を呼んだ。セレスタは声の方角を迷惑そうに振り返る。息を切らせて走ってきた古城が、セレスタの無事を確認して、力尽きたようにその場に足を止めた。古城の隣に立

ち止まった雪菜が、ハンカチを取り出して汗だくの彼の額を甲斐甲斐しく拭い始める。公衆の面前でなにイチャついてるんだこいつら、とセレスタの眉が痙攣した。

そのうち追いつかれるとは思っていたが、想像していたよりもずいぶん早い。

よほど必死に自分のことを捜し回ってくれたのだろう、とセレスタは思う。ほんの少しだけそのことを嬉しく思ってしまう自分がいることを、不本意ながら認めないわけにはいかなかった。しかしその感情を押し隠してセレスタは古城を睨み、

「なんでついてきたのよ!?　ストーカー!?　あんたって本当に変態よね!?」

「うるせえ！　おまえこそどういうつもりだよ!?　一人で勝手にどっか行って、ヴァトラーに会えなかったらどうする気だったんだ!?」

刺々しく叫ぶセレスタに、古城が怒鳴り返してくる。

「あ、あんたには関係ないことじゃない！」

「関係ないことあるか、馬鹿！」

「ば、馬鹿……!?　今、馬鹿って言った!?」

「俺は俺が助けたいからおまえを助けに来たんだよ！　いいから一緒に来い！」

「なにそれ!?　わけわかんない！」

なにか吹っ切れたらしい相手の剣幕に気圧されながらも、セレスタは、ムキになって古城と睨み合う。しかし古城は目を逸らさない。

やがて根負けしたセレスタは、拗ねたように頬を膨らませて、ぼそりと呟いた。
「思い出したのよ」
「あ？」
「ヴァトラー様に助けてもらう前の記憶。少しだけだけど――」
「それって……」
古城が言いかけた言葉を途中で切った。セレスタに残されていた最後の記憶は、自分が神殿で殺されかけていた場面だ。古城はそのことを知っている。
「あたしは、自分の村であいつらに攫われて、森の奥にある壊れかけた神殿に連れて行かれた。あいつらはあたしを生贄にするつもりだったの」
セレスタは、途切れ途切れの記憶をつないで言葉にする。
記憶を取り戻すきっかけになったのは、〝オシアナス・グレイヴⅡ〟の船影だ。セレスタはあの船を見たことがある。おそらくは神殿での惨劇を経て、絃神島へと送り出される直前に。
「あいつらって、あの獣人たちのことか。ザザラマギウの信者だな？」
古城が攻撃的な口調で訊いてくる。しかしセレスタは首を振った。
「違う……あの人たちは……あたしを護ろうとして……」
「……え!?」
「あたしを生贄にしようとしたのは、軍人よ。命令していたのは、女だったわ」

セレスタは目を閉じて、その光景を思い出す。

攫われたセレスタを救い出すために、数多くの獣人たちが神殿へと押し寄せた。そして彼らは殺された。近代的な装備と奇怪な技を操る軍人たちが殺したのだ。

あのときディミトリエ・ヴァトラーが現れなかったら、獣人たちは全滅していたに違いない。そしてセレスタも間違いなく殺されていただろう。邪神に捧げる生贄として――

「女の……軍人……？」

セレスタの告白を聞いた古城が、驚愕の相を浮かべて言った。その古城の大げさな反応に、セレスタのほうが動揺する。

「まさか、そいつ、アンジェリカ・ハーミダってやつじゃ――」

古城が真剣な表情でセレスタに詰め寄り、その直後、

「――先輩！」

肩口からの体当たりで、雪菜が古城を突き飛ばした。

なにが起きたのかわからないまま、ひとたまりもなく転倒する古城。そんな彼が寸前まで立っていた場所を、凄まじい勢いでなにかがかすめて飛んだ。

そして十五メートルほど離れた地面が、コンクリートの破片を散らしながら弾け飛ぶ。

銃撃を受けたのだ。長距離からの狙撃である。

「姫柊!?　今のは――」

起き上がった古城が、愕然と周囲を見回して訊いた。

「囲まれてます！　そんな……いつの間に……!?」

雪菜が背中のギグケースから槍を抜く。しかし彼女が槍を展開する前に、古城たちの周囲に複数の人影が現れた。女が一人と男が二人。おそらく全員が外国人だ。

地味なグレーの衣服を身に着けているが、男二人は異様に目立つ。

どちらも身長二メートル近いスキンヘッドの大男だ。片方は髭面で、もう片方は機械化した両目にサングラスをかけている。

そして女は、そんな男たち以上に目立つ容姿の持ち主だった。

モデルのような長身と人工的な美貌。毛皮つきの豪華なコートをまとっていても、その下に鍛え抜かれた肉体が隠されていることがよくわかる。

そのコートの下から女が取り出したのは、小型のサブマシンガンだった。

一瞬先の未来を視る――霊視能力を持つ雪菜にとっても、サブマシンガンの高い連射性能は脅威である。女は、それを理解した上で、銃口を雪菜に向けていた。最初の狙撃が失敗した時点で、彼女は、雪菜の能力を正確に見抜いたのだ。

「全員、動くな」

女が流暢な日本語で言った。彼女に殴りかかろうと古城が姿勢を低くした瞬間、古城の爪先すれすれの地面に、数発の銃弾が叩きこまれる。

女が一瞬で狙いをつけて撃ったのだと気づくまでに、少し時間がかかった。おそろしく速く、しかも精密な射撃だ。

「今のは警告だ。次は当てる」

彼女は淡々と言葉を続けた。虚勢でも脅しでもない、事実だけを告げる事務的な口調だった。

「あんたが、アンジェリカ・ハーミダか？」

彼女の目を睨んで、古城が訊く。

ふん、と女が、不愉快そうに目を細めた。

「このような極東の〝魔族特区〟に、よもや私の名前を知っている者がいるとはな……ただの民間人というわけではなさそうだが」

やはりそうか、と古城は納得する。

おそらくアンジェリカ・ハーミダは、しばらく前から古城たちのことを監視していたのだ。セレスタを拉致するタイミングを計っていたのかもしれない。

しかし予定を変更して、急遽セレスタを襲うことになった。それは古城が〝アンジェリカ・ハーミダ〟という名前を口にしたからだ。

古城が自分の名前を知っていた以上、なんらかの対策を用意している可能性が高い。ならば、その準備が整う前にセレスタの拉致を実行する。彼女はそう考えたのだろう。

実際のところ、古城は対策を打つどころか、アンジェリカ・ハーミダの正体すら理解してい

なかったわけなのだが――

「まあいい。我々からの要求はひとつだ。セレスタ・シアーテの身柄を引き渡してもらおう。無用の交戦は避けたいのでな。素直に応じてもらえるとありがたい」

アンジェリカが一方的に告げてくる。

古城は、ぐ、と唇を噛む。相手は三人。しかも銃器で武装している。雪菜の戦闘能力をもってしても、セレスタを護りながら全員の相手をするのは不可能だ。

雪菜は対魔族戦闘のエキスパート。彼女が獅子王機関から与えられた装備は、あくまでも魔族との戦闘を想定したものだ。軍人との戦闘は専門外なのである。

古城の眷獣が使えれば、この場を乗り切ることは、たぶん可能だ。だが、眷獣の召喚を終えるまで、アンジェリカたちが手をこまねいて見ているとは思えない。おそらく召喚の素振りを見せた瞬間、古城は蜂の巣にされることになるだろう。絶体絶命の危機だった。

「セレスタを、どうする気だ？」

追い詰められた古城が、掠れた声を絞り出す。

しかしアンジェリカは冷ややかな眼差しで、そんな古城に一瞥をくれただけだった。

「質問しているのは我々のほうだ」

「……なに!?」

「もう一度訊く。セレスタ・シアーテを渡してもらおう」

古城は無言で視線を巡らせ、すぐ傍にいるセレスタの表情を見た。
セレスタの瞳に浮かんでいたのは、アンジェリカたちに対する純粋な恐怖。
それを見た瞬間、古城の中で覚悟が決まった。いや、最初から結論は出ていたのだ。彼女にそんな表情をさせないために、古城たちはセレスタを追いかけてきたのだから。
「嫌だね」
古城が不敵に笑って言った。おそらく雪菜はその答えを予期していたはずだ。そして古城が今なにを考えているのか、ということも――
「そうか。残念だ」
アンジェリカ・ハーミダが無造作に左手を振った。サブマシンガンを持った右手ではなく、なにも持っていないはずの左手を。
その瞬間、古城たちを襲ってきたのは、目に映らない巨大な刃だった。
雪菜が不可視の斬撃を、銀色の槍で受け止める。魔力で紡がれたアンジェリカの刃は、魔力を無効化する〝雪霞狼〟に触れた瞬間、霧散した。
しかしアンジェリカの斬撃が生み出す運動エネルギーまでは、〝雪霞狼〟では消しきれない。防御した反動で、雪菜はそのまま数メートル近く吹き飛ばされて、どうにか着地する。
そして古城は、アンジェリカの攻撃を、よけることも防ぐこともできなかった。
「――先輩!?」

よろめく古城の姿に気づいて雪菜が息を呑む。
そんな彼女の目の前で、古城の首筋が鮮血を噴き出した。
古城の左肩から右脇まで、深々と傷が穿たれていた。
巨大な斧を叩きつけたようなその傷口は、古城の背中まで貫通している。
「いやあああああああああ――――っ！」
セレスタの口から絶叫が迸る。
そして古城は、ゆっくりとその場に倒れていった。

第四章 邪神の花嫁
The Incubator

1

「ぐほっ……！」

古城の喉から、血の塊があふれた。脚の力が抜けて両膝からくずおれる。

激痛だけで全身の神経が焼き切れそうだ。視界が完全に真紅に染まっている。

「古城ッ！」

買ったばかりの服が汚れるのにも構わず、セレスタが古城にしがみついてきた。

古城がかろうじて意識を保てたのは、彼女のおかげだ。わずかに感覚の残った右手で傷口を押さえて、大丈夫、と古城は獰猛に笑ってみせる。

「この攻撃は……!?」

傷ついた古城を気にかけながらも、雪菜はその場を動けずにいた。

銀色の槍を握った両手が痺れている。雪菜の霊視をもってしても見切れなかった不可視の斬撃。しかもその威力は、単純な投げナイフなどの投擲武器とは桁違いだ。処刑人が振り下ろす、斬首の斧のような重々しい一撃だった。

「ほう……私の刃を防ぐか。民間人にしては、なかなかやる」

雪菜に考える時間を与えることなく、アンジェリカが再度、斬撃を放つ。

さすがの雪菜も、見えない攻撃を完全に受け流すことはできない。〝雪霞狼〟の結界で、魔力の刃を防ぐのが精一杯だ。殺しきれなかった衝撃で、雪菜の身体は、再び弾き飛ばされた。受け身は取ったが、じわじわと全身にダメージが溜まっていく。

それでもどうにか致命傷を避けることができたのは、よく似た技を使う敵と戦った経験があったからだ。アンジェリカの不可視の斬撃は、轟嵐砕斧と呼ばれていたその攻撃に、少し共通した雰囲気がある。ただし威力はこちらが格段に上だ。直撃すれば、第四真祖である古城すら、無力化できるだけの破壊力がある。

「――ブイエ、マティス。セレスタ・シアーテを確保しろ。私は、その小娘と少し遊んでいく」

アンジェリカ・ハーミダが、部下の男たちに指示を出す。

遊ぶ、という軽い言葉とは裏腹に、アンジェリカの酷薄な瞳に、雪菜を嬲って愉しもうとする気配はなかった。彼女が放っているのは、混じりけのない純粋な殺意だけである。

見えない斬撃を防いだ雪菜を、アンジェリカは、自分の任務遂行を阻む不確定要素と見なしたのだ。だからこそ今すぐ排除する――アンジェリカの思考はシンプルだった。それゆえにつけいる隙がない。雪菜がこれまでに対峙してきた、どんな敵とも違う異質の存在だ。

「了解」

アンジェリカの部下の男たちが、左右からセレスタに近づいてくる。彼らの動きにも油断は

ない。しかし彼らが警戒しているのは、戦闘能力を残した雪菜と、セレスタの逃走だけだった。

すでに古城は致命傷を負っている。いまだに意識があるのが不思議なくらいの状況だ。強靭な生命力を持つ獣人や、旧き世代の吸血鬼でも、戦闘を続けることはできない。豊富な実戦経験を持つからこそ、彼らはそう判断した。それが古城に残された唯一の勝機だった。

「やらせるかよ――」

「……こ、古城!?」

驚くセレスタの目の前で、傷ついた古城の左半身が銀色の霧へと変貌した。

霧の塊と化したその腕で、古城が地面を殴りつける。その瞬間、古城の腕が触れた地面も、実体を持たない霧へと変わった。足場を失った男たちが、咄嗟に反応して背後に跳び退く。

しかし、古城が撒き散らす無差別な霧化のほうが、圧倒的に早い。

「そのまま海へと突き落としてやる――！　疾く在れ、〝甲殻の銀霧〟！」

古城の背後に、うっすらと銀色の巨影が浮かんだ。

第四真祖が従える四番目の眷獣――〝甲殻の銀霧〟は、吸血鬼の霧化能力を司る眷獣だった。ただし、その能力は古城だけでなく、その周囲の物体すべてに及ぶ。そして一度霧にされたものが、完全に元に戻るという保証はない。災厄の化身たる第四真祖の眷獣に相応しい、破壊的で傍迷惑な眷獣なのだ。

かつて古城が負傷したとき、この眷獣は、自ら暴走して古城の肉体の一部を霧へと変えた。

だから古城はアンジェリカを挑発し、彼女の攻撃を受けたのだ。

自分自身が傷つくことで、あえて眷獣を暴走させる。それが追い詰められた古城に残された最後の策だった。が、

「吸血鬼か！　ちっ、ボーランド――！」

アンジェリカ・ハーミダが、首に埋めこんだ通信機に向かって怒鳴る。その直後、

「――がっ!?」

反撃を仕掛けていたはずの古城が、鮮血を吐き出して地面に転がった。

古城の胴体がぽっかりと抉れて、心臓が完全に吹き飛ばされていた。

その衝撃で古城の意識が一瞬途切れ、眷獣の召喚が解除された。霧化していた地面が再び実体を取り戻し、熔岩大地のようにドロドロに歪んだ姿で定着する。

「狙撃!?　そんな――!?」

古城の負傷に気づいて、雪菜がうめいた。

アンジェリカ・ハーミダの部下はもう一人いた。離れた場所に建つ灯台の上から、狙撃用ライフルで古城たちを狙っていたのだ。そしてアンジェリカの指示で、彼は、古城の心臓だけを正確に吹き飛ばした。凄まじい狙撃技術である。

霧化していたのは古城の左半身だけ。右半身は、セレスタを霧化から庇うために実体を保ったままだった。その脆弱性を突かれたのだ。

「ぐ……お……！」

心臓を失った古城は、もはや立ち上がることができない。必死に上体を起こそうとするが、顔を上げるのが精一杯だ。そんな古城を狙って、髭面の男が動いた。手袋を脱ぎ捨てた男の右腕は、無骨な金属製の義手だった。

「直撃だ、ボーランド！　あとは俺がやる――」

男が義手の掌を古城の頭に向けた。掌の中央に埋めこまれていたのは銃口だ。この距離で撃たれたら逃れようがない。そして頭を完全に潰されてしまったら、真祖の回復力でも復活には相当の時間がかかるはずだ。たとえ古城が生き返ったとしても、セレスタはもう護れない。

「――っ!?」

轟音が鳴り響き、灼熱の衝撃が古城の頬を撫でた。

しかし吹き飛んだのは古城ではなく、銃口を向けていた男のほうだった。

「〝妖撃の暴王〟よ！」

冷ややかに響く少年の声と共に、閃光に包まれた巨大な猛禽が現れる。

翼長数メートルに達するその巨体が、遥か上空より降下して、義手の男を吹き飛ばしたのだ。

間一髪で直撃を逃れた男の足元が、高熱に炙られて一瞬で融解する。

猛禽の正体は吸血鬼の眷獣だった。摂氏数万度にも達する高密度の炎の塊だ。

「この眷獣は……!?」

目の前に現れた見知らぬ眷獣を、古城とセレスタが呆然と眺めた。

そんな二人のすぐ傍に現れたのは、冷たい刃物を連想させる美しい顔立ちの少年だ。

「無様だな、暁古城――」

血塗れで倒れた古城を見下ろして、少年が蔑むように言う。古城のよく知った顔だった。

「トビアス・ジャガン!?　おまえ……どうして……!?」

「ヴァトラー閣下の命令でな。こいつらゼンフォースの連中を監視していた。だが、やはり貴様ごときにセレスタ・シアーテの護衛は無理だったようだな」

そう言ってジャガンが右手を振った。灼熱の猛禽が、閃光と化して数百メートルの距離を駆け抜け、埠頭の先にある灯台を破壊する。古城を撃った狙撃手が潜んでいた灯台だ。

「ゼンフォース……？」

「アメリカ連合国陸軍（CSA）の特殊部隊だ。貴様の手に負える相手ではない。わかったら、そのまま大人しく地べたを這いずってろ！　〝崩撃の鋼王〟よ！」

狙撃手の相手を猛禽に任せ、ジャガンは新たな眷獣を召喚した。

それは全高四、五メートルにも達する鋼色の類人猿だった。濃密な魔力によって実体化した、鋼鉄の土人形だ。巨大な鉄塊に似た両腕が、義手の男を目がけて振り下ろされ、地面を抉る。

「ディミトリエ・ヴァトラーの部下か。ありがたい」

眷獣を操るジャガンを睨んで、義手の男が愉快そうに笑った。

「ありがたい……だと？」

「民間人の餓鬼の相手は気が重い。〝戦王領域〟の貴族が相手なら気楽に殺れるな！」

「ほざくな、下郎が！」

男の言葉に侮蔑の響きを感じたのか、ジャガンの表情が怒りに歪んだ。そんな彼の眼前で、義手の男の姿がかき消えた。吸血鬼の反応速度でも追い切れない、凄まじい速度での跳躍だ。

ジャガンの背後に現れた義手の男が、銃撃を放つ。

反応が遅れたジャガンにはよけきれない。しかし放たれた散弾が彼の身体を引き裂く直前、横から伸びてきたゴーレムの鋼の腕が、すべての弾丸を撃ち落とした。

「そうか……人工義体に魔具を融合させているのか。アメリカ連合国陸軍ご自慢の魔義化歩兵というやつだな」

義手の男の凄まじい身体能力を見ても、ジャガンの表情に変化はない。彼の目つきが、わずかに鋭さを増しただけだ。

「だが、しょせん脳は人間のままなのだろう？　〝魔眼〟よ！」

真紅に染まったジャガンの瞳が、妖しい魔性の輝きを放った。それは彼が〝魔眼〟と名付けた、不可視の眷獣の輝きだ。目を合わせた者の脳内に侵入し、その意識を支配する――

「マティス――！」

機械化した両目にサングラスをかけた男が、ジャガンの攻撃の正体に気づいて、仲間の名を呼んだ。しかし義手の男は答えない。すでに彼の意思はジャガンの眷獣に支配されている。動きを止めた義手の男を、鋼鉄のゴーレムの攻撃が襲った。

絶対によけられるはずのない一撃だ。だがその必殺の攻撃を、義手の男はギリギリで回避する。見えない糸に操られているような、人形めいた不自然な動きだ。

「ちっ……自動回避だと!?」

義手の男の機械化された肉体が、本人の意思とは無関係に動いて、ジャガンの攻撃を避けたのだ。それに気づいてジャガンが舌打ちする。

そんなジャガンの隙を衝いて、サングラスの男が動いた。男の両肩の筋肉が割れて、体内に埋めこまれていた彼の魔具が露出する。無数の金属プレートを縦に並べた奇怪な魔具だ。

「迂闊だな、ジャガン卿――」

放熱フィンに似た男の魔具が、虹色の鮮やかな陽炎を放った。

その陽炎に触れた地面が一瞬で炭化した。

灼熱の陽炎を生み出して、目標を消し炭の塵へと変える魔具。いかなる原理かはわからない。だがそれは間違いなく、魔族を殺すためだけに造られた戦闘用の魔具だった。

「く……」

予期せぬサングラス男の魔具の威力に、ジャガンが表情を引き攣らせる。

魔術師でもない特殊部隊の兵士が、これほどの攻撃魔術を使うとは思っていなかったのだ。

強力な魔具の発動には、相応の魔力と適性が必要だ。肉体の機械化という代償を支払うことで、彼らはその制約をクリアしたのだ。

だが、それを理解したときには遅かった。一瞬の油断を衝かれたジャガンに、陽炎の攻撃範囲から逃れる余裕はない。虹色の輝きがジャガンを包む――

そう思われた瞬間、前触れもなく出現した巨大な稲妻が、眩い獅子の姿に変わった。虹色の陽炎を蹴散らして、雷光の獅子がジャガンを救う。

「〝獅子の黄金〟！」

片膝を突いて立ち上がった古城が、新たな眷獣を喚び出していた。

破壊された心臓の再生は終わっている。正確にはまだ心臓というよりは、魔力の塊で出来た得体の知れない臓器というイメージだが、とにかく身体を動かせればなんでもいい。

切断された左肩も、どうにか癒着は終わっていた。万全ではないものの、なんとか戦える。

吸血鬼の真祖が持つ、呪いにも似た超回復力の賜物だ。

「暁古城、貴様!?」

「さっきの借りは返したぜ……ジャガン……！」

勝ち誇った口調で古城が叫ぶ。ジャガンが屈辱に震えながら古城を睨み、

「ふざけるな！　貴様の助力など必要なかった！　むしろ邪魔だ！」

「負け惜しみかよ、口先男……」

言い返した古城の唇から鮮血がこぼれる。やはり今の傷ついた古城の身体に、眷獣の制御は荷が重いのだ。しかし古城たちの眷獣によって、アンジェリカの部隊の連携は寸断されている。

「先輩！」

眷獣が撒き散らす高熱の余波で、アンジェリカが雪菜の姿を見失う。その隙に雪菜は古城の許へと駆け寄った。

「……姫柊、無事か……？」

「はい、わたしは。でも、このままでは先輩の体力が――」

傷ついた古城を雪菜が支える。その反対側から、セレスタも無言で古城に肩を貸していた。強力過ぎる第四真祖の眷獣の制御が、古城の体力を凄まじい勢いで消耗させてくる。

このまま戦闘が長引けば、負傷した古城は圧倒的に不利だ。最悪、制御不能と化した眷獣の暴走に、雪菜やセレスタも巻きこんでしまう可能性がある。

「マティス、動けるか？」

そんな古城たちの眷獣を一人で引きつけながら、アンジェリカは部隊の態勢を立て直そうとしていた。ジャガンの攻撃で意識を奪われた義手の男が、彼女に再起動されて正気を取り戻す。

「大丈夫です、少佐。護符防壁がやられましたが、問題ありません」

「よし。おまえはブイエと組んで、吸血鬼どもをやれ。眷獣はボーランドと私で相手をする」
「了解――」
アンジェリカの指示を受け、二人の男が再び古城たちを狙って動き出す。
古城の表情に焦りが浮いた。ジャガンの助太刀のおかげで戦力的には互角だが、セレスタという護衛対象を抱えた古城たちの動きは、必然的に大きく制限されている。仮にセレスタを巻きこむような攻撃を受けたら、身を挺して彼女を庇うしかない、ということだ。
それを理解しているアンジェリカの部下たちが、確実に古城たちを狙える位置へと移動する。
そして彼らは困惑に動きを止めた。セレスタが予期せぬ行動に出たからだ。
「待って――」
セレスタが、古城たちを護るように両腕を広げて前に出た。彼女に直撃することを恐れて、男たちは攻撃を仕掛けられない。
「やめて！　あなたたちの目的は私なんでしょ!?　だったら――」
「セレスタ！　戻れ！」
「駄目です、セレスタさん！」
古城が傷ついた身体でセレスタを追う。同時に雪菜も飛び出していた。
「やれ」
無防備に射線上に入って来た二人を眺めて、アンジェリカが部下たちに攻撃を命じる。義手

の男が銃口を向ける。そして――

「ぬお!?」

機関砲弾の連射を喰らって苦痛にうめいたのは、義手の男のほうだった。洋上からの予期せぬ砲撃だ。大口径機関砲の砲弾は音より速い。少し遅れてようやく銃声が聞こえてくる。

「なに……!?」

アンジェリカ・ハーミダが振り返る。

機関砲を操っていたのは、小型のモーターボートに乗った女だった。無駄に目立つ黄色の迷彩服を着た若い娘だ。ボートを操縦しているのは、同じく派手な青い迷彩服姿の娘。両者ともに驚くほどの美形である。

「敵の増援？　特区警備隊というやつか？　いや……」

埠頭に上陸してきた新たな人影に気づいて、アンジェリカが目を細めた。

アンジェリカたちを包囲するように動いているのは、白と黒の迷彩服を着た十代半ばほどの娘たちだ。正式な警備員とは思えない。しかしただの民間人でもない。

彼女たちの動きは明らかに訓練された兵士のものだ。練度だけなら、アンジェリカの部隊と比較しても遜色ないだろう。

「第四真祖さまぁー――ご無事ですかぁー？」

最後に上陸してきたのは、真紅の迷彩服の少女だった。彼女が担いでいるのは、都市迷彩を

施した巨大な火器である。

「あ……あいつら……！」

謎の少女たちの正体に気づいて、古城が呆然と呟いた。

彼女たちは〝オシアナス・グレイヴII〟のメイド部隊だった。

メイドといってもただの使用人ではなく、その出自は〝戦王領域〟周辺諸国の、王族や重臣の娘たちだ。もともとは祖国の安全と引き換えにディミトリエ・ヴァトラーに預けられた〝人質〟だった、と聞いている。しかし戦闘狂のヴァトラーは、人質にも女にも興味がなかったため、結果として、彼女たちを単なる客人として扱っていた。

その結果、暇を持て余した彼女たちは、下克上を目指して古城を誘惑したり、ネットの動画投稿サイトの有名人になったり、さらには彩海学園に転校してきたりと、やりたい放題だったわけだが――

「誘導ミサイルだと!?」

赤迷彩服の少女が構えた火器を見て、アンジェリカが不快げに唇を震わせた。

ライフル弾程度の攻撃には余裕で耐える魔義化歩兵だが、さすがに機関砲やミサイルを喰らえば無事では済まない。ましてや同時に貴族クラスの吸血鬼二体を相手するのは分が悪い。

「ちっ」

これ以上の戦闘は無益。そう判断したアンジェリカは、即座に戦術目標を修正した。

敵の殲滅から、目標の奪取へと。

機械化した肉体の速度にものをいわせて、呆然と立ち尽くすセレスタ・シアーテを確保し、逃走する。最悪、部下二人を捨て駒にすることで、敵の追跡を振り切ることも可能だろう。

一瞬でそこまで計算して、アンジェリカは加速のために重心を落とした。そのとき――

「おっと。行かせないよ、アンジェリカ・ハーミダ」

突然、セレスタ・シアーテの周囲の地面が燃え上がる。

その炎にこめられた魔力の密度に気づいて、アンジェリカは歯噛みした。セレスタを護るように、彼女を取り囲んでいるのは、琥珀色に燃える熔岩の眷獣だ。さすがのアンジェリカも、その熔岩の中に飛びこんで、生きたままセレスタ・シアーテを回収できるとは思わない。

「ディミトリエ・ヴァトラーか――」

新たな眷獣を操っている男の姿に気づいて、アンジェリカは眩いた。

金色の霧をまとって、埠頭に現れた金髪碧眼の吸血鬼だ。

純白のスーツを着た青年貴族が、美しい笑みを浮かべてアンジェリカを見つめている。

「撤退だ。ボーランド、援護しろ」

部下たちにそう命じて、アンジェリカ・ハーミダが跳躍する。

港外れにある倉庫の屋根に着地して、彼女の姿は見えなくなった。彼女の部下の男たちも、すでに撤退を終えている。敵が完全に立ち去ったのを確認して、古城は眷獣の召喚を解除した。

安心すると同時に全身の痛みがぶり返し、古城はその場に再び倒れこむ。
「えー……もう終わりなんですかー」
ぶっ放すタイミングを失ってしまったミサイルランチャーを下ろして、赤迷彩服の少女が、つまらなそうに溜息をついていた。

2

ヴァトラーの部下の誰かが、人払いの結界を展開したのだろう。あれだけ派手な戦闘が行われたにもかかわらず、特区警備隊が埠頭に駆けつけてくる気配はなかった。あるいはアンジェリカ・ハーミダたちが、事前に通信を妨害するなどの対策を行っていたのかもしれない。
証拠隠滅などの裏工作は、オシアナス・ガールズが担当しているらしい。青い迷彩服を着た少女が、ノートPCを取り出して防犯カメラの回線にハッキングを仕掛けている。どこかで見たようなそんな光景を、古城は、雪菜に支えられたまま、ぐったりした表情で眺めていた。
「やあ、古城。期待どおりセレスタを護ってくれたようだね。さすがは僕の愛した吸血鬼だ」
芝居がかった気障な口調で、そう呼びかけてきたのはヴァトラーだった。
「そういう気持ち悪いことを言うのは冗談でもやめろ」
古城は振り返りもせずに、無感動に吐き捨てる。

ヴァトラーはそんな古城の反応を眺めて、むしろ愉しそうにクックッと笑った。
「トビアスもご苦労。〝血塗れ〟アンジェリカはどうだった？」
「……すべて想定内です。さすがに手強い――ですが、分隊レベルであれば、手に余るほどの相手ではありません。腑抜けた第四真祖はそのザマですが」
直立不動の姿勢でジャガンが答える。彼の言葉の端々に、古城に対する敵意が滲んでいた。ヴァトラーが、護衛対象のセレスタを、自分ではなく、古城に預けたことが不満なのだろう。
「問題はアメリカ連合国情報部の動きです。絃神島には、民間企業に偽装した彼らの拠点があるはずですから――」
「なるほど。アンジェリカ・ハーミダが、彼らに支援を求めたら面白いことになるかもね」
ヴァトラーは、そう言って舌舐めずりするように微笑んだ。古城が苦々しげに息を吐く。このままこの男を放置しておいたら、またろくでもないことを始めそうだ。
「待てよ、ヴァトラー」
「……ん？　なんだい？」
ヴァトラーが、魅惑的な笑みを浮かべて振り返る。
古城の背後で、セレスタが、はうっ、と息を呑む気配があった。しかしヴァトラーの性格を知っている古城にしてみれば、その笑顔は、ただ胡散臭いだけである。
「説明してくれるんだろうな、今回のこと。全部」

「もちろん。だけど場所を変えようか。治療はともかく、着替えは必要だろ、キミも？」

桟橋の方角を指さしてヴァトラーが提案する。ちょうど彼の〝オシアナス・グレイヴⅡ〟が、港に接岸したところだった。ヴァトラーの世話になるのは癪だが、たしかに血塗れの服を着たままでは、おちおち出歩くこともできない。彼のクルーズ船に招かれるしかなさそうだ。それにアンジェリカ・ハーミダに狙われているセレスタにとって、〝オシアナス・グレイヴⅡ〟の船内は、絃神島でもっとも安全な場所でもあるはずだった。

しかし肝心のセレスタは、雪菜の背中に隠れたまま、なぜかヴァトラーと目を合わせようとしていない。むしろ彼を避けているようにも見える。

「――おい、セレスタ。どうしたんだよ？」

古城が、不審に思って彼女に訊いた。セレスタがギクッと小さく震える。油の切れた歯車のような動きで、彼女はカクカクと首を巡らせ、

「な、なにが？」

「なにがじゃねえよ。ようやく憧れのヴァトラーに再会できたんだろ。もっと喜べよ」

「よ、喜んでるわよ。ヴァトラー様は相変わらず見目麗しいし……はー……かっこいい……」

「だったら挨拶くらいしてくりゃいいのに」

古城が呆れたように肩をすくめた。アンジェリカ・ハーミダに両断された左肩も、いちおう動かせる程度には回復していたのだ。

「心の準備ってものがあるでしょ！　あたしは髪もボサボサだし、服もこんな安物で――」
「いや……その服……俺が金を出したやつなんだが……」
自虐的なセレスタの台詞に、地味に傷ついた声を出す古城。
「それよりも、あんた、本当に大丈夫なの……？　すごい傷だったけど……」
「大丈夫じゃねえよ。あちこち痛ェし、服はボロボロだし」
古城はズタズタに裂けたパーカーを引っ張ってみせた。首回りには大きな裂け目が入り、背中と胴体には焼け焦げた大穴が空いている。服の形を保っているのが奇跡的な状況だ。わりとお気に入りのパーカーだったのだが、買い直すしかないだろう。
「ご……めん」
落ちこんでいる古城の背中に、セレスタが小さく声をかける。
彼女らしからぬその殊勝な言葉に、古城は思わず自分の耳を疑い、
「え？」
「ごめんって言ったの！　あと、ありがとう！　護ってくれて……その、嬉しかったし……」
セレスタが、もじもじと両手の指を絡ませながら、拗ねたような早口でそう言った。
うつむく彼女の横顔を、古城はぽかんと目を丸くして見つめた。そのままセレスタが歩き去っても、驚きのあまり、しばらく硬直が解けなかった。
そんな古城の横顔を、雪菜が呆れたような半眼で見ている。

「なに見とれてるんですか、先輩……いやらしい」
「見とれてねーし、やらしくもねーよ！」
思わず頬を赤らめながら、古城が慌てて言い返した。

〝オシアナス・グレイヴⅡ〟が停泊する巨大桟橋までは、徒歩で五分の距離だった。
いつ見ても壮麗で巨大な船だ。二カ月ほど前の戦闘で、デッキの一部が破壊されていたはずだが、いつの間にか補修を終えて、以前よりもさらに絢爛さを増している。
ヴァトラーが古城たちを案内したのは、その絢爛な展望デッキだった。
傾きかけた太陽を背景に、広大な空と水平線が広がっている。
そしてそこでは、黄金の刺繍を施した服を着た奇妙な集団が、古城たちのことを待ち受けていた。
彼らの人数は全部で九人。全員が男性だが、年齢はバラバラだ。白髪の老人もいれば、二十代半ばの若い男もいる。身分の高い人々なのか、黄金の刺繍以外にも、様々な装飾品や宝石を全員が身に着けている。
彼らの肌の色は鮮やかな褐色で、どことなくセレスタに似た印象がある。
「なんだ、あいつら？」

古城が無意識に呟いた。すぐに雪菜が、声を潜めて答えてくる。
「魔族です。おそらく、獣人かと」
「獣人……!?　って、まさか……」
「はい。気をつけてください、先輩」
愕然とする古城に、雪菜が言った。
セレスタを狙っていたのは、アンジェリカ・ハーミダだけではなかった。彼女を最初に襲ってきたのは、神獣化が可能な上位種の獣人だ。
怯えたように身を硬くするセレスタを、古城たちは両側から護衛するように挟みこむ。
しかし警戒する古城たちをなだめるように、ヴァトラーが穏やかに笑って告げた。
「心配しなくていいよ、古城。彼らはキミたちの敵じゃない」
「……敵じゃない……って……」
そう言われてもすぐには安心できない。ましてやヴァトラーの保証では尚更だ。が、
「彼らは古代中米の都市国家〝シアーテ〟を統べていた、獣人神官たちの末裔。世界でもっとも旧い獣人種族のひとつだよ。ちなみに彼らの故郷では、獣人は神の使いとして崇拝されているそうだ」
「シアーテの神官……だと!?　じゃあ、もしかして、そこの連中が信仰してる神ってのは――」
古城はざらざらとした違和感を覚えながら質問する。都市国家〝シアーテ〟――聞き覚えの

ある名前だ。浅葱が調べてくれた情報に、その都市名は含まれていた。そこに住む人々が崇めていた神の名は――

「〝冥き神王〟――ザザラマギウだよ」

ヴァトラーが、こみ上げる歓喜を抑えきれないように笑った。

かつて二百万人もの犠牲者を出したという古代の邪神。戦闘狂のヴァトラーにとっては、願ってもない〝敵〟だろう。そんな強敵と戦うためなら、この男は多少の労苦は厭うまい。

まさかこいつは本気で邪神を復活させる気なのか、と古城の背筋を恐怖が伝う。

「ふざけんな……ザザラマギウってのは、災厄と破壊をもたらす邪神だろうが！　その信者が、どうして俺たちの味方なんだよ!?」

「さすがは古城。ザザラマギウを知っていたか。だけど、少し誤解があるようだ」

「誤解？」

「彼らはたしかにザザラマギウに仕える神官だが、邪神の出現を望んでいるわけじゃない。その逆さ。ザザラマギウの封印が彼らの役目だヨ。荒ぶる神を鎮める儀式を、彼らは千年以上も続けてきた。熱帯雨林の奥地の街で、誰に知られることも、讃えられることもなくね」

そうだろ、と尋ねるヴァトラーに、神官たちは厳かに首肯した。どうやらヴァトラー一人が嘘をついているわけではなさそうだ。

「ザザラマギウの正体は、実体を持たないエネルギーの塊だ。シアーテの都は、この絃神島と

同じく、龍脈の要に存在するのサ。ただし地形の関係で、そのエネルギーは流れ出すことなく蓄積されていく。それが暴発すればどうなるか、キミにも想像できるだろう？」

ヴァトラーが気楽な口調で説明する。古城は黙ってうなずいた。

龍脈を流れるエネルギーは、都市を繁栄に導くといわれている。紘神島が本土から遠く離れた太平洋上に建設されたのも、ここが洋上を流れる龍脈の交差する場所だからだ。

しかし過剰な力は、ときとして災厄を引き起こす。一夜にして海に沈んだとされる大西洋の王国を筆頭に、過去に多くの古代文明が、龍脈の力の暴走によって滅びたのだ。

「それが……過去に起きた大災厄の正体か……」

「そう。そしてザザラマギウが邪神と呼ばれているのには、もうひとつ理由がある。シアーテの人々は、自らの神殿に、龍脈のエネルギーを実体化させる魔術装置を組みこんだんだ」

「実体化……って、なんのために!?」

「龍脈の力を制御するためサ。ボクら吸血鬼の眷獣と同じだよ。濃密な魔力はそれ自体が意思を持って実体化する。そして実体化させることができるなら、制御もできるということだ」

「じゃあ……セレスタは……」

いったいなんなんだ、と古城が訊く。邪神の正体が凝縮された大地のエネルギーだとして、ただの人間に過ぎないセレスタになんの関係があるのか、と。

「彼女はザザラマギウの〝花嫁〟だよ。邪神に見初められた存在だ。〝冥き神王〟の〝卵〟は

彼女に抱かれて、孵化のときを待ち侘びている。龍脈の力を吸い上げながらね」

「龍脈の力を……吸い上げる……!?」

古城の隣でセレスタの護衛を続けていた雪菜が、驚いた表情で口を挟んできた。

「まさか、閣下がセレスタさんを絃神島に送ってきたのは……!?」

「ああ。ここが世界でもっとも強力な龍脈の流れる場所のひとつだからだよ。ザザラマギウの〝卵〟は龍脈から切り離されると崩壊するからね。そうなると〝花嫁〟も無事では済まない。だから彼女を仮死状態にした上で、この絃神島に運ぶしかなかった」

ヴァトラーは、特に気分を害した様子もなく、雪菜に答えた。

古城は、スーツケースに詰めこまれていたセレスタの姿を思い出す。

彼女はあのとき、ただ眠っていただけではなかった。一度、仮死状態になって、そして蘇生させられたのだ。龍脈上にある絃神島へと辿り着いたことで――

「……どうして、そこまでしてセレスタを外に連れ出した？」

古城が、責めるような眼差しをヴァトラーに向けた。

ヴァトラーの返答は簡潔だった。

「彼女が狙われていたからだよ」

「なに？」

「キミも見ただろう、古城。アメリカ連合国が、ザザラマギウを狙っている。シアーテの神殿

は彼らの特殊部隊に襲われて、大勢の神官が殺された。〝花嫁〟の安全を確保するためには、外に連れ出す必要があったのサ」

「特殊部隊って、さっきのアンジェリカって女の部下か……」

機械化した肉体に、戦闘用の魔具を埋めこんだ魔義化歩兵。彼らの戦闘能力なら、獣人種族を圧倒することもできるだろう。女の兵士が獣人たちを殺した、というセレスタの証言とも一致する。

「あいつらは、なんで邪神を目覚めさせようとしてるんだよ!?」

「アメリカ連合国は〝混沌界域〟の内乱に関与している。反乱軍に武器や資金を与え、民衆を扇動してね。アンジェリカ・ハーミダは、その手の特務工作のエキスパートだ」

「〝混沌界域〟……って……」

なぜそんなものがセレスタと関係するのか、と古城は混乱した。たった一人の少女と、戦争という巨大な事象――スケールが違いすぎて、そのふたつのつながりが想像できない。

戸惑う古城を眺めながら、ヴァトラーは愉快そうに首を振る。

「だけどアメリカ連合国がどんなに裏工作に長けていても、〝混沌界域〟の内乱は、そう長くは続かない。なぜなら、あの帝国には〝混沌の皇女〟がいるからね。今は面白がって傍観しているけれど、実際に市民に血が流れるようなことがあれば、彼女はすぐに動き出す。そうなったら反乱軍は終わりだ。まァ、吸血鬼の真祖に対抗できるような武器が彼らにあれば、話はべ

つだけど……そう、たとえば……」

「……ザザラマギウ、か!?　邪神を戦争の道具に使う気なのか、あいつらは……！」

フフッ、と意味深に笑うヴァトラーを睨んで、古城がうめく。バラバラの歯車が噛み合った。アンジェリカ・ハーミダの正体を知ったとき、真っ先に気づくべきことだった。

シアーテの街は〝混沌界域〟の辺境にあるのだ。アメリカ連合国所属のアンジェリカが、〝混沌界域〟の内戦と無関係なはずがない。

アメリカ連合国は、第三真祖に対抗できる切り札を手に入れたのではないか――ほんの数日前に雪菜が話していたことだ。かつて数百万人を虐殺した邪神。吸血鬼の真祖への対抗手段として、それ以上に相応しい存在はないだろう。

「古の邪神と第三真祖の戦い――なかなか興味を惹かれる組み合わせだけど……残念ながら見過ごすわけにもいかなくてね」

「当たり前だ！」

やり場のない怒りがこみ上げてきて、古城は拳を震わせた。

第三真祖ジャーダ・ククルカンの戦闘能力は、古城もよく知っている。天災そのものの破壊力を備えた二十七体もの眷獣を操る怪物。もしも彼女がザザラマギウとまともに戦えば、周囲にどれだけの犠牲が出るか想像することもできなかった。

そしてヴァトラーは、怒り狂う古城を見て満足そうに笑い、

「気が合うね、古城。ボクも同じ考えだ。邪神と戦うなんて素敵なイベントを、他人任せにするのはつまらないからね」

「そういう意味じゃねえよ！　邪神の召喚なんてやめさせろ！」

恐れていたとおりのヴァトラーの反応に、古城が怒鳴る。

永遠に近い寿命に倦み疲れた吸血鬼にとって、命を賭した強敵との戦闘は、唯一残された至上の娯楽なのだ。そしてヴァトラーは、古城が知る吸血鬼の中でも、特に戦闘衝動が度外れて強い。戦闘狂と呼ばれる所以だ。

「ふむ。キミがそういうのなら仕方ない」

しかし、そのヴァトラーが、予想に反してあっさりと古城の主張を受け入れた。

ただし彼の唇に浮かんでいるのは、美しくも酷薄な微笑みだ。

「だが、いいのかい？　ザザラマギウの降臨を阻止するというのは、セレスタ・シアーテを殺す、ということだよ」

「なに……？」

「セレスタ・シアーテは、ザザラマギウの依り代だ。彼女が生き続けている限り、いつか必ず、ザザラマギウの〝卵〟が孵る。何年先か、何十年先かはわからないが、龍脈の破壊的なエネルギーを限界まで溜めこんでね」

ヴァトラーの碧眼が、困惑する古城を真っ直ぐに見つめてくる。

「――だけど今なら彼女を殺せる。世界への影響も、せいぜい大規模な火山噴火程度で済むだろう。蓄積された神気は龍脈へと還り、〝冥き神王〟は再び長い眠りにつく。彼らザザラマギウの神官たちはそうやって、神を封印し続けてきたのさ」

ヴァトラーはそう言って、居並ぶ獣人神官たちを愉快そうに見回した。

神官たちは沈黙したまま、占城たちのやりとりを聞いている。彼らの瞳に映っているのは、セレスタに対する崇敬と畏怖、そして隠しきれない殺意だった。

神官たちの視線に気づいたセレスタが、ひ……う……と恐怖の声を洩らす。

雪菜が彼女の背中を支え、古城はそんな二人を背後に隠す位置に移動した。

「こいつらは、セレスタを殺す気か……最初から、そのつもりで……」

「そうなるね」

ヴァトラーが軽やかな口調で言う。

「だけど彼らを責めるのは筋違いだ。彼らには、ほかに〝邪神〟を制御する方法がなかった。それに生贄になることが不幸とも限らない。歴代の〝花嫁〟たちは、皆、満足して死んでいくそうだよ。たとえそれが呪術によって作り出された偽りの幸せだとしてもね――」

「セレスタの記憶がなかったのは、それが理由か……！」

震えるセレスタを庇って、古城が唸った。

セレスタ自身の過去の記憶が曖昧なのは、襲撃された際の恐怖だけが原因ではなかった。

アンジェリカ・ハーミダに襲われる前から、呪術によってセレスタの記憶は奪われていたのだ。ほかならぬ彼女を護る神官たちの手によって。

「キミがセレスタ・シアーテの面倒を見てくれている間に、〝混沌界域〟に入りこんだアメリカ連合国の勢力はボクが排除した。このまま邪神の現出が無ければ〝混沌界域〟の内戦はすぐに終わる。〝混沌の皇女〟が出るまでもない」

だから、とヴァトラーが愉しげに続けた。楽園に住む人々を堕落させた蛇の笑みで。

「あとはキミ次第だよ、古城。セレスタ・シアーテを殺して、ザザラマギウの復活を阻止するか。それとも紘神島で邪神の降臨を待つか――キミが好きに選べばいい」

古城が無言で唇を噛み、ビクッ、とセレスタが肩を震わせた。

冷え切った彼女の指先が、力無く古城の袖口を握り締めてくる。

「待て、ヴァトラー……ひとつ聞かせろ。ザザラマギウが実体化したら、〝花嫁〟は――セレスタはどうなるんだ?」

かすかな期待をこめて、古城が訊いた。

セレスタの中には、ザザラマギウの〝卵〟があるのだという。卵というのは単なる比喩で、おそらくは魔術的に生み出された〝邪神の素体〟のことだろう。

異世界――高次空間に存在する〝卵〟に、古城たちは手が出せない。

しかし邪神が実体化するということは、〝卵〟とセレスタとの接続が切れる、ということだ。

だとすれば、ザザラマギウを降臨させた上で、それを倒せば、セレスタは解放されるはず――

そんな古城の淡い期待を、ヴァトラーはあっさりと打ち砕く。

「どんなに優れた霊能力者でも、神を受け入れるほどの器はない。〝花嫁〟はザザラマギウ出現の衝撃に耐えきれず、消滅する――と考えるのが自然だね。そもそもセレスタ・シアーテが、それまで自我を保っていられるとも思えないが」

「……ヴァトラー……様……」

ヴァトラーの無情な対応に、セレスタがか細い声を洩らした。

彼女にとってヴァトラーの存在は、不安と孤独の中に残された最後の拠り所だったはずだ。

しかしヴァトラーが求めていたものは、セレスタではなく、彼女の中にある邪神だけだった。

その事実が、追い詰められていたセレスタの精神に亀裂を入れる。

「どのみちセレスタは死ぬしかない、ってことかよ」

古城は必死で思考する。なにか方法が残されているはずだ、と頑なに信じる。騙されるな、と自分自身に言い聞かせる。どこかに解答はあるはずだ。セレスタが死なず、邪神による被害も出ない――そんな理想的な解答が。

絶望に震えるセレスタを、雪菜が支える。

槍を握り締めた雪菜の指先も震えている。

魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く破魔の槍――〝雪霞狼〟。しかし彼女の槍

でもセレスタは救えない。邪神とはいえ、ザザラマギウは神だ。そして〝雪霞狼〟が生み出す人工の神気では、本物の神の力は打ち消せない。

それでも古城は必死に思考する。

なにかがおかしい、と無意識が訴えている。アンジェリカ・ハーミダの目的はわかった。獣人神官たちの正体もだ。この期に及んで、ヴァトラーが古城を騙す理由も思いつかない。

しかしなにかが引っかかる。もしも獣人神官たちの目的が、本当にセレスタの抹殺ならば、雪菜のマンションを襲ってきた獣人たちは何者なのか。

どうして彼らはセレスタを殺さずに、生きたまま回収しようとした――？

自分たちの都を龍脈の暴走から護ることが目的ならば、セレスタが国外に出た時点で彼らの目的は果たされている。むしろここでセレスタが死んでくれたほうが、彼らにとっては都合がよかったはずだ。そうしなかった理由はなにか――？

自分たちを救ってくれた、ヴァトラーへの義理立てか。それとも――

「いや……違う。異邦の吸血鬼どもよ、そうではない」

そのとき船上に低く響いたのは、嗄れたような聞き取りにくい声だった。

神官たちの中でもっとも若い男が、獣のように変貌しながら笑っている。

彼の肉体から噴き出したのは、尋常ではない量の魔力だった。神獣化だ。ここにいる誰もが、理解していない。彼がここで神獣化した理由を。

「貴様らにはもとより選択肢などないのだ――」

最初に攻撃されたのは、ヴァトラーだった。

凄まじい魔力に覆われた神獣の鉤爪が、〝蛇遣い〟の肉体を背後から抉る。

その奇襲に振り返ることもできぬまま、彼の上半身は粉砕された。魔力の炎が、肺も心臓も頭蓋も、飛び散った細胞の一片すら残さずに焼き尽くす。

「……ヴァトラー!?」

青年貴族の最期を目の当たりにして、古城が叫んだ。

その古城を横殴りの衝撃が襲った。もう一人の神官が神獣化を終えて、古城の身体を薙ぎ払ったのだ。左半身をごっそりと抉られて、古城は船のデッキを転がる。

「先輩!?」

雪菜の表情が悲痛に歪んだ。あまりにも突然の出来事に、彼女でさえも動けずにいる。

そして――

「い……や……あ……ああああああああああああああああああああっ……!」

そしてセレスタは今度こそ絶叫した。

3

空の色が、変貌を遂げていた。

澄み切った午後の青空が、不吉な朝焼けのような赤紫へと。雷雲が竜巻のように渦を巻き、無数の稲妻が上空を埋め尽くす。突然吹き始めた激しい風が、〝オシアナス・グレイヴⅡ〟の船体を揺らしている。

「ヴァトラー……様……古城……」

自失した虚ろな表情で、セレスタ・シアーテが呟いた。

心の支えだったヴァトラーが殺され、古城も瀕死の重傷を負った。その光景が、壊れかけていたセレスタの精神を決定的に破壊した。不老不死の呪いを受けた古城が、この程度の傷で死ぬはずがない。そんな理屈は、飛び散った古城の血肉の前では、なんの説得力も持たなかった。

セレスタが撒き散らした暴風に、彼女を護衛していた雪菜が弾き飛ばされる。

「あ……あああ……」

セレスタの頭上に浮かんでいたのは、虚空に穿たれた穴のような奇怪な球体だった。球体の表面にはおぞましい斑模様が描かれ、それは生物の内臓のように不気味な蠕動を続けている。

球体の直径は、一メートルにも満たない。

だがその姿は、空間を喰い破ってじりじりと成長を続けているようにも感じられた。
あたかもセレスタが投影したようなその球体は、強いて表現するならば〝卵〟に似ていた。
異界より生じた、異形の生物の〝卵〟に――

「へ……へへ……へへへへ……」

自らの足元に転がるヴァトラーの死骸を見下ろして、神獣化した男が笑っている。
その歪な笑顔に浮かんでいるのは、勝利の快感などではなく焦燥だ。自分の衝動的な殺戮を、必死で正当化しようとしている矮小さが、弱々しい笑みに形を変えている。

「脆いな、吸血鬼。神獣の爪撃だ……〝戦王領域〟の蛇遣いといえども終わりだよ……」

自分自身に言い聞かせるように、神獣化した男が、ヴァトラーの亡骸を踏みにじる。

「貴様――！」

憤怒の表情で動いたのはジャガンだった。ヴァトラーを殺した神獣を睨んで、灼熱の猛禽を実体化させる。だが、

「待て……駄目だ、ジャガン！」

傷ついた古城が鮮血を撒き散らしながら立ち上がり、ギリギリのところでジャガンを止めた。
もう一体の神獣が、セレスタの前に移動していたからだ。
奇妙な球体を召喚したとはいえ、今のセレスタは無防備だ。神獣の本気の攻撃を受ければ、呆気なく命を落とすことになる。

「動くなよ……死に損ないの吸血鬼ども。この状態で〝花嫁〟が死ねば、こいつに憑いてる邪神がどうなるかわからんぞ。この島ごと吹き飛びたくなければ、俺たちには手を出すな」

どこか清々しげな口調で、二体目の神獣の男が言う。

彼の脇腹には、深々と穿たれた火傷の跡が残っていた。ニーナの粒子砲に焼かれた傷だ。やはり彼らが、雪菜のマンションを襲撃してきた神獣たちだったのだ。

「なぜだ……おまえたち……」

神官の一人が震える声で訊く。仲間の突然の裏切りが、理解できない、という反応だ。

「悪く思うな。邪神憑きの小娘の世話をするために、密林の奥地に一生縛りつけられる暮らしなんて、もううんざりなんだよ。あの女は、上位種たる俺たちに、相応の待遇を与えてくれる。この小娘さえやつらに引き渡せばな――」

「愚か者どもが――」

最年長の神官が、裏切り者たちを哀れむように呟いた。

ここまで来て、古城はようやくすべてを理解する。

アンジェリカ・ハーミダが、ザザラマギウの神殿の位置を正確に知っていたこと。絃神島に来て間もない彼女たちが、セレスタをあっさりと見つけ出したこと。

それは獣人神官たちの中に、内通者がいたからだ。

彼らはセレスタの臭いを知っている。それを辿って雪菜のマンションを襲撃することも、埠

頭までセレスタを追跡することも、獣人の嗅覚ならば簡単だ。
彼らは金に目を眩ませて、神官の誇りを売ったのだ。
獣人神官たちの行動に、古城が違和感を覚えたのも当然だ。最初から彼らの行動は矛盾していた。彼らの中には裏切り者がいたのだから――
「老いぼれども……なにを……!?」
そして驚愕の声を洩らしたのは、裏切り者たちのほうだった。
セレスタを人質にした彼らの眼前で、神官たちが、自分の心臓を自ら抉り出したからだ。
古城とジャガンが、呆然とそれを眺めている。止める間もない一瞬の出来事だった。
「すべてはディミトリエ・ヴァトラーの思惑どおりか……口惜しいが、我ら一族の役目は終わりだ。〝冥き神王〟の現出は止められぬ……」
神官たちが、抉り出した己の心臓を、セレスタの頭上の球体へと投げ入れる。
虚空に浮かぶ邪神の〝卵〟へと――
「まさか貴様ら、神王召喚の儀式を……!?」
神獣化した男が、怯えたようにうめく。
神官たちの血を吸った〝卵〟が、ドクン、と脈打つように震えたのは、その直後だ。
「〝花嫁〟の絶望と、そして我ら神官たちの血――召喚の儀式はすでに成った」
最年長の神官が、満足そうに微笑んだ。

その彼の肉体が、鮮血を撒き散らしながら消失した。

〝卵〟に喰われたのだ、と古城は気づいた。

斑に蠢く球体の表面から、鞭のような触手が伸びてきて、一瞬で神官を攫っていったのだ。

喰われたのは最年長の神官だけではない。ほかの神官たちも次々に触手に攫われて、球体の中へと取りこまれていく。そして――

「や……やめろ……やめろおおおおおおっ！」

「た、助け……う、ァァあああああっ！」

触手は神獣たちの巨体にも巻きついていた。

緑色の触手の正体は蔓草だった。ツタ状の植物の蔓である。それらは蛇のように蠢いて、巨大な神獣たちを球体の中へと取りこんでいく。

彼ら神官たちを喰うごとに、球体は大きさを増していた。

すでに球体の直径は七メートルを超え、〝オシアナス・グレイヴⅡ〟のデッキを覆い尽くすほどにまで成長している。それは怪物の種子のようでもあり、異界へと通じる門のようでもあった。

己の意思をなくしたセレスタが、ゆっくりと両腕を真横に広げた。

そんな彼女の全身に、無数の蔓草が絡みつく。

「待……て……セレスタ……！」

彼女がやろうとしていることに気づいて、古城は咄嗟に手を伸ばした。
セレスタは、自ら球体の中に向かおうとしているのだ。
しかし彼女に触れる前に、伸びてきた無数の蔓草が鞭のようにしなって古城を打ち据えた。
さらに蔓草たちは苦痛にうめく古城に巻きつき、そのまま手脚を引きちぎろうとする。
遠のきかけた古城の意識を間際でつなぎ止めたのは、雪菜の澄んだ声だった。
「〝雪霞狼〟――！」
魔力で実体化していた蔓草が、銀色の槍の一閃でまとめて切断される。
背中からデッキに叩きつけられて、古城は激しく咳きこんだ。
「――大丈夫ですか、先輩!?」
雪菜が、槍を旋回させながら、古城の傍らに着地した。たぶんな、と古城は無理やり上体を起こす。全身の傷の治りが遅い。神獣に負わされた傷ということもあるのだろうが、アンジェリカたちとの戦闘のダメージも地味に響いている。血を流し過ぎたのだ。
セレスタは、すでに球体の内部に取りこまれて姿を消していた。
今の古城たちには彼女を救い出すすべがない。邪神の実体化を止める方法もわからない。
どうする、と無力さに歯噛みする古城の眼前で、不意に雪菜が、自らの手首に槍の穂先を押し当てた。浅く斬り裂かれた彼女の白い肌に、鮮血の滴があふれ出す。
「姫柊……!?」

「すみません、先輩。今は、これだけで――」

傷口から血を吸い出した雪菜が、その血を含んだまま、唖然とする古城に唇を重ねてきた。

口移しに流しこまれた彼女の血の味が、古城の中に広がっていく。

「先輩、あとのことはお任せします！」

「姫柊!?　おまえ、なにを――!?」

立ち上がろうとした古城の腹を、雪菜が乱暴に蹴り飛ばした。

展望デッキから突き落とされて、古城はそのまま下の階へと落下する。

「姫……柊……セレスタ……」

最後に古城が目にしたのは、飛来する蔓草の鞭を斬り裂きながら、球体の中に飛びこんでいく雪菜の後ろ姿だ。

天候の異常が、一層激しさを増していく。

炎の色に染まった空に暴風が逆巻き、押し寄せる高波が絃神島全体を揺らしている。

そんな中、虚空に浮かぶ邪神の〝卵〟は、力強い脈動を刻み始めていた。

4

「都市国家〝シアーテ〟を滅ぼした〝冥き神王〟の復活か……壮観っすね」

炎色の空に浮かぶ球体を眺めて、矢瀬基樹は苦笑混じりに呟いた。
ツンツンに短髪を尖らせて、首にヘッドフォンを引っかけた少年だ。
彼が座っているのは、紘神中央空港ターミナルビルの屋上。奇しくも二日前に南宮那月が、アンジェリカ・ハーミダと遭遇した場所だった。
古城たちがいる巨大桟橋までは、直線距離でも二千メートル近く離れている。しかし虚空に穿たれた奇怪な穴は、肉眼でもはっきり見えるまでに膨張を遂げていた。
「ずいぶんと余裕だな、矢瀬。やつの存在は、公社にとっても想定外だろうに」
矢瀬の隣に立った南宮那月が、日傘を差したまま訊いてくる。
人形のように小柄な担任教師を見上げて、矢瀬は投げやりに肩をすくめた。
「まあ、ね。だからこそ情報価値が高いって思ってるやつらもいるんですわ」
「ふん。難儀だな」
「そういう立場なもんでね。しゃーないッス」
矢瀬は自嘲するように頭をかく。
暁古城の親友というポジションの裏側で、矢瀬は第四真祖の監視役という面倒な役目を担わされている。そんな矢瀬にとって、今回のセレスタ・シアーテの一件は完全な不意討ちだった。
神獣化能力を持つ上位種の獣人たち。〝戦王領域〟の貴族ディミトリエ・ヴァトラー。そして〝血塗れ〟アンジェリカと彼女の特殊部隊――

人工島管理公社が保有する戦力では、いずれも手に余る化け物揃いだ。
だからセレスタ・シアーテの正体に気づいたときには、すでに事態は矢瀬の手には負えない状況になっていた。苦悩する古城の姿を眺めながら、なんの手助けもできない自分自身に嫌悪感を覚えなかった、といえば嘘になる。
だが、その一方で、この事件が貴重な〝予行演習〟に成り得ることも事実なのだった。
「――で、公社の人工知能は、あの丸いやつをどう分析している？」
「あー、ザザラマギウとやらを降臨させるために形成された、保護フィールドって感じっすね。というなれば〝卵〟っす。おそらくあの中に、邪神の〝胚〟があると見てます。んで、今はレーザー攻撃衛星の準備中ってことで」
残り九十分ちょい、と矢瀬が腕時計の表示を確認する。
人工衛星搭載型の対地レーザー砲は、人工島管理公社が隠し持つ切り札のひとつだが、いまだ未完成のシステムだ。発電能力と軌道高度の関係で、絃神島への精密射撃が行えるのは、約三時間おきに一発だけ。ザザラマギウの実体化までに間に合うかは微妙なところだった。
そしてレーザー砲撃で、あの〝卵〟を破壊できるかどうかは、またべつの問題だ。
「邪神の実体化を止める方法は――？」
「今んとこ、不明。ほかの〝魔族特区〟にも情報を調べてもらってますけど、なんせ古い記録しかないもんで。姫柊ちゃんに期待するしかないっすね」

「獅子王機関の七式突撃降魔機槍か――無謀だな。棒きれ一本で、ダムの放水を止めようとしているようなものだぞ？」

那月が眉をひそめて言った。魔力を無効化する雪菜の槍も、神気を帯びた敵とは相性が悪い。ザザラマギウが完全に実体化したら、彼女に打つ手はないはずだ。

「自分が時間を稼げば、古城がどうにかしてくれるって信じてるんでしょ。実際、そのおかげでこっちにも対処する余裕が出来たわけだし。健気な子ですからね」

「ああいうのは、思いこみが激しいというのだ」

「まあ、否定はしないっすよ。ウチの幼なじみも似たようなもんだから」

そう言って矢瀬は薄く笑う。那月は無感動に息を吐き、

「あいつが完全に実体化した場合、絃神島にどの程度まで影響が出る？」

「〝卵〟だけなら、たいした影響はないっすよ」

気象の変化のほうは少し厄介だが、と矢瀬は心の中だけで言う。

「仮にあれが現在のペースで膨張を続けたとしても、人工島の機能に影響が出るまでは九十六時間以上かかる試算ッス。呪術迷彩を使ってる限り、市民の大半はあれが存在することにも気づかないんじゃないかと」

「――邪神とやらが降臨したら？」

那月は眉ひとつ動かさずに訊いてきた。

「試算不能っすね」
矢瀬が正直に返答する。那月は初めて表情を動かし、
「規模がでかすぎて、公社の人工知能でも予想できないということか？」
「いや。計上するまでもない、って意味っす。今のままだとザザラマギウは、完全に実体化する前に自らの霊力を使い尽くして自己崩壊するって話で」
ほう、と那月が感心したように呟いた。
「転校生の無謀な努力も、無駄ではなかったというわけか」
「そっすね。まあ、もともと存在するべき神殿から切り離されて、まともな供物も儀式もない状態での召喚ですからね。本来の力が引き出せたら、そのほうが異常ってことで」
「なるほど。だが、気に入らんな。ヴァトラーめ……最初からこの結果を予想していたのか？だとしたら、やつはなんのために……」
不機嫌そうに独りごちる那月の目つきが、突然、険しさを増す。
矢瀬もすぐに異変に気づいた。
空中に浮かぶ球体の内側から、緑色の触手が吐き出され、桟橋を包囲していた特区警備隊の装甲車に絡みついたのだ。触手は、重さ十四トンの装甲車を易々と抱え上げ、そのまま球体の中へと引き摺りこむ。
「特区警備隊を喰った、だと!?」

矢瀬が弾かれたように膝立ちになった。那月は煩わしげに唇を歪めている。
「なるほど……そう来るか、邪神め」
「那月ちゃん……今のは!?」
「あの球体、絃神島と融合するつもりだぞ」
「融合……？」
矢瀬は那月の言葉に困惑する。ザザラマギウの正体は龍脈が生み出すエネルギーの集合体だ。シアーテの神殿に構築された巨大な魔術装置によって、それに実体を与えたものに過ぎない。
絃神島との融合は、邪神本来の機能に含まれていないはずだ。が――
「絃神島の住民すべてを供物にして、不足分の魔力を補う気だ。たしかにそれなら、実体化に耐えきれるかもしれんな。ただし本来の〝冥き神王〟ではなく、単なる怪物――真の邪神として現出することになるが」
「供物って……まさか……」
「そうだな、おそらく――喰われるな。この絃神島のすべてが」
那月が平然と言い放つ。その言葉に矢瀬は息を呑んだ。南宮那月はこんなときに冗談を言う人格ではない。喰われる、と彼女が口にするなら、絃神島は本当にすべて喰われるのだ。
「……対応が早いな。さすがに公社も慌て始めたか」
空港の滑走路の片隅から、無人ヘリの群れが離陸する。特区警備隊の攻撃ヘリだ。当然、

目標はザザラマギウの〝卵〟だろう。しかし特区警備隊の対魔族装備すべてをもってしても、邪神を倒しきれるかどうかは未知数だ。

「那月ちゃん……？」

矢瀬が担任教師を見上げて訊いた。

身じろぎもせずに立っていた那月が、唐突に日傘を揺らして歩き出している。

那月が見つめていたのは、球体に侵蝕され始めた港湾地区だ。大破した特区警備隊の装甲車の上に、長身の女の姿がある。大柄な男たちを従えた、毛皮つきコートの美女だ。

「怪獣退治は趣味ではないのでな。私は私の仕事をやらせてもらう――」

そう言い残して那月は姿を消した。彼女がそれまで立っていた場所には、ゆらゆらとした波紋だけが残されている。

矢瀬はゆっくりと立ち上がりながら、ズボンのポケットに手を入れた。取り出したのは、見慣れない型のスマートフォンだ。

「さあて……厄介なことになっちまったな。モグワイ……浅葱の調子はどうだ？」

矢瀬はロックされたままの液晶画面に呼びかける。通話アプリすら起動していない。しかし、返事はすぐに聞こえてきた。奇妙に人間臭い合成音声の声だ。

『遺憾だが、ご立腹だぜ。激怒中だ、わけがわからないまま〝C〟に閉じこめられてんだから、無理もねえがな』

画面に浮かび上がった不細工なマスコットキャラが、ククッ、と笑う。
「やれやれ……ケーキでも買い占めて女帝様のご機嫌を取っとくか」
憂鬱そうに呟いて、矢瀬は一方的に通話を切り上げた。
画面に表示された日付と、虚空に浮かぶ球体を見比べ、忌々しげに舌打ちする。
「頼むぜ、古城。今はまだ早ェんだ……」
矢瀬のかすかな呟きは誰の耳にも届かない。
吹き荒れる風が強さを増していく――

女王の抱擁
Embrace Of The Queen

1

両親の思い出は、ほとんどない。

愛されていなかったわけではないのだろう、と思う。細切れの映像に似た断片的な記憶には、午後の微睡みのような、かすかな温もりが残っている。

だがその幸福な期間が続いたのも、それほど長い時間ではなかった。

彼女の、制御できない強大な霊力は、両親を恐怖させるのに足るものだったからだ。

避けられ、見放され、虐げられ、そして両親から引き離された。

物心ついたときには、彼女はすでに独りだった。

最後に彼女を引き取ったのは、強い結束と権力を持つ大きな呪術集団。

狼を聖獣とする、異邦の女神を信奉する一派だ。

呪術の媒体、聖獣の生贄を求めていた集団にとって、彼女の強大な霊力は、天恵にも思えたことだろう。彼らは即座に準備を始めた。女神を降臨させる儀式の準備を——

しかし彼らの悲願が成就されることはなかった。

大規模魔導テロの予兆を察知した政府が、集団解体のために動いたからだ。

派遣されてきたのは、たった一人の対魔族戦闘の専門家——

獅子王機関の剣巫と名乗る少女だった。

「ここは――!?」

雪菜が着地した場所は、四方を密林に囲まれた広大な遺跡の入り口だった。

石柱が無数に建ち並び、その中央を石畳の道が走っている。

遺跡の中央に建っているのは、半壊した石造りの神殿だ。

建造されて、千年以上の時間が経っているのだろう。神殿の表面は風化が進み、苔むした石柱は蔓草に覆い尽くされている。降りそそぐ陽射しは、絃神島よりもさらに強烈だ。

「神殿？　まさか都市国家シアーテの……」

雪菜は戸惑いながら呟いた。セレスタが召喚した異界への門を使って、ザザラマギウの〝卵〟に入ったつもりだった。しかし雪菜が辿り着いたのは、この遺跡だ。〝卵〟に取りこまれたはずのセレスタの姿も見当たらない。

「いえ、魔術的に再現された仮想現実……ですか」

雪菜は、銀色の槍で石柱のひとつに触れる。その一瞬だけ、石柱は、蜃気楼のように揺らいで消えた。〝雪霞狼〟の能力をもってしても完全に無効化できないのは、石柱を構成する魔力が絶え間なく補充されているせいだろう。

空の色は朝焼けにも似た炎の色だ。それは、この場所がザザラマギウの神気の影響下にあることを示している。遺跡の外側の景色は見えない。鳥や獣の姿もない。

おそらくこの遺跡は、邪神に創り出された箱庭の世界。遺跡自体が結界なのだ。

なぜザザラマギウは、直接実体化しようとせずに、こんな巨大な結界を創ったのか。

その答えは、邪神の正体を考えれば明白だった。

ザザラマギウは、龍脈のエネルギーを制御するため、魔術装置によって生み出された人工の神に過ぎない。彼が完全に実体化するには、魔術装置であるシアーテの神殿が不可欠だ。

しかしザザラマギウは、神殿から遠く離れた絃神島で召喚された。

だから彼は、神殿そのものを再現しなければならなかったのだ。邪神は、自らを召喚するための魔術装置を、自分自身で構築しようとしている。

「だったら、まだ間に合うはず……！」

遺跡の姿はまだ完全ではない。これだけの規模の質量をゼロから生成するには、邪神の力をもってしても不可能だったのだ。だとすれば邪神は不足した質量を、絃神島と融合することで補おうとするだろう。だが、それには相応の時間が必要になるはずだ。

まだセレスタを助け出すチャンスは残されている。

「セレスタさん――」

ザザラマギウの〝卵〟の中で、雪菜が自我を保っていられる時間は、おそらくそう長くない。

今はまだ〝雪霞狼〟が雪菜を護ってくれているが、邪神の実体化が進行すれば、いつまで保つかわからなかった。その前にセレスタを連れ戻す。

そんな雪菜の決意を阻むかのように、遺跡を覆う蔓草たちが蠢き始めた。

邪神の意思が、結界内にまぎれこんだ異物として、雪菜を排除しようとしているのだ。

それでも立ち止まるわけにはいかなかった。

「――はあああああっ！」

襲い来る蔓草たちを薙ぎ払いながら、雪菜は遺跡中央に建つ神殿へと走り出す。

2

ほんのわずかな時間だが、意識をなくしていたらしい。

「う……ぐ……」

自分自身が生み出した血溜まりに浸るような恰好で、古城はふらふらと身体を起こす。

〝オシアナス・グレイヴⅡ〟の中層デッキだ。ザザラマギウの〝卵〟に取りこまれそうになった古城を、雪菜が蹴り落として逃がしてくれたのだ。

セレスタが召喚した奇怪な球体は、すでに〝オシアナス・グレイヴⅡ〟の上空ではなく、港の直上へと移動している。その直径は最初に出現したときの十倍近くにまで達していた。

それは蔓草のような無数の触手を伸ばして、絃神島を侵蝕し、今も貪欲に成長を続けている。〝オシアナス・グレイヴⅡ〟の手すりにも、蔓草の一部は絡みついていた。古城は無意識に、それを引きちぎろうと手を伸ばし、

「――触れるな！」

叱責するような鋭い声が、古城の動きを制止する。

古城は驚いて声の方角に視線を巡らせた。

「……え!?」

「その蔓に触れるな。そいつもザザラマギウの神殿の一部だ。迂闊に触れると魔力を吸われる。今の貴様には相当なダメージのはずだ」

苛立たしげな口調でそう言ったのは、ナイフのような冷たい美貌の吸血鬼だ。

炎に包まれた猛禽を操って、トビアス・ジャガンが、球体から絶え間なく吐き出されてくる蔓草を焼き払っている。その姿は、まるで傷ついた古城を庇っていたようにも見える。眷獣を操る彼の消耗度合いが、邪神との戦闘の過酷さを物語っていた。

「ジャガン……おまえ……!?」

「勘違いするな。俺はヴァトラー閣下の船を護っていただけだ。貴様のような腑抜けに、感謝されるいわれはない。迷惑だ」

突き放すような口調で、ジャガンが言った。本人がそう言い張るのなら、そういうことにし

ておこう、と古城は思う。彼の奮闘で〝オシアナス・グレイヴⅡ〟が無事だったのも、いちおう事実ではあるからだ。

「こいつは、なんだ？　どうなってる……!?」

成長を続ける球体を睨んで、古城が訊いた。

「ザザラマギウとやらを降臨させるための結界だな。実体化に必要な魔術装置を、自ら構築した異空間の中で再現しようとしているんだろう」

意外にもジャガンが素直に答えてくる。

「異空間を構築した……って、そんなことができるのか？」

「邪神といえども神の端くれ、ということなのだろうな」

ジャガンが皮肉をこめた表情で笑う。

古城が思い出したのは、南宮那月の監獄結界だった。那月の夢の中に構築された、異世界の監獄。あれはあれで凄まじい魔術の産物だと思ったが、この球体はそれよりも桁違いに規模がでかい。このまま成長を続ければ、遠からず絃神島をも完全に呑みこんでしまうだろう。

しかも、その恐るべき球体ですら、邪神を降臨させるための魔術装置に過ぎないのだ。

だが、それは逆に言えば、邪神はいまだに降臨していない、ということでもある。

「今なら、まだセレスタを連れ戻せるかもしれないってことか――」

「ふん。貴様と同じことを考えた連中がいるようだな」

ジャガンが不機嫌な声で知らせてくる。

彼が鋭く睨みつけていた先には、破壊された特区警備隊の装甲車と、その上に立つ四人組の男女の姿があった。アメリカ連合国特殊部隊の連中だ。

「アンジェリカ・ハーミダか――！」

行く手を阻む蔓草を奇怪な魔具で迎撃し、アンジェリカたちが邪神の結界へと入っていく。彼女たちの目当ては間違いなくセレスタだろう。そうなれば雪菜も彼女たちと再び遭遇する可能性が高い。その前にアンジェリカたちを止めなければ、と古城は思う。

しかし、立ち上がろうとした古城は、血の塊を吐いてその場に倒れこんだ。負傷のダメージが身体の芯に蓄積している。

不老不死の真祖の肉体は、自己修復を続けている。だが、まだ戦えるレベルには程遠い。古城がどうにか意識を保てているのも、雪菜が最後に自分の血を与えてくれたからだ。

身動きすらままならない古城を冷たく一瞥して、ジャガンが静かに歩き出す。

「……ジャガン!?　どうするつもりだ!?」

「奴らを潰す。貴様らの島がどうなろうと知ったことではないが、アルデアル公に牙を剝いたアメリカ連合国の犬どもを見逃すわけにもいかないのでな」

そう言い残して、ジャガンが跳んだ。アンジェリカ・ハーミダを追って、奇怪な球体の中へと向かったのだ。古城は為すすべもなく彼の背中を見送ってうめく。

そんな古城の耳に聞こえてきたのは、どこか芝居がかった気障な笑い声だった。
「――やれやれ、素直じゃないね、トビアスは」
聞き覚えのあるその声に、古城が愕然と振り返る。
暴風に揺れる〝オシアナス・グレイヴⅡ〟のデッキに立っていたのは、金髪碧眼の青年貴族だ。完全に破壊されたはずの彼の肉体に傷はなく、純白の三つ揃えには一滴の血痕すら残っていなかった。
「ヴァトラー!?　おまえ……どうして……」
無傷のヴァトラーを見上げて、古城は呆然と呟いた。
ヴァトラーは神獣の攻撃を喰らって、肉体を完全に焼き尽くされていた。古城よりも遥かに重傷だったのだ。貴族級の吸血鬼の再生能力をもってしても、簡単に生き返れるはずがない。
「ご苦労だった、キラ。もういいよ」
そんな古城の疑問に答えるように、ヴァトラーが静かに手を挙げた。
「はい、閣下――」
新たな声が聞こえてきたのは、デッキの床板からだった。
デッキには、飛び散ったヴァトラーの肉片が残されている。その肉片たちが突然、厚みをなくして、影のようなどす黒いシミへと変わる。そのシミは互いにつながってひとつの大きな影になり、やがてヴァトラーそっくりの輪郭へと変わった。

その影が不意に起き上がり、厚みと色を手に入れる。生み出されたのは、ヴァトラーと瓜二つの分身だ。

「やはり便利だな。キミの〝幻網影楼（ディオニカ・ノクス）〟は」

感嘆したように微笑（ほほえ）んだのは、本物（オリジナル）のヴァトラーだ。

「いえ、ご無礼をいたしました」

分身（ダミー）のヴァトラーが、本物（オリジナル）に一礼する。その表面が淡い輝（かがや）きを放った。光がさらさらと鱗（りん）粉（ぷん）のようにこぼれ落ち、分身（ダミー）の内側から中性的な美貌を持った吸血鬼の少年が現れる。キラ・レーベデフ・ヴォルティズラワ――ジャガンと同じ〝戦王領域（せんおうりょういき）〟の貴族。ヴァトラーのもう一人の腹心だ。

「どういうつもりだ、ヴァトラー……」

部下を使って死んだふりをしていたヴァトラーを、古城（こじょう）は、怒気（どき）を孕（はら）んだ眼差（まなざ）しで睨（ね）めつけた。しかしヴァトラーは、悪びれもせずに首を振る。

「ああ、心配をかけて済まなかった。鏡像（きょうぞう）と影を操るキラの眷獣（けんじゅう）に、ちょっとした演技をしてもらったんだよ。文字どおりの影武者というやつだね」

「おまえ……神官たちの中に裏切り者がいることを最初から知ってたな！　まさかセレスタを追い詰めるために、わざと殺されたふりをしてたのか!?」

「だとしたら、どうする気だい？」

ふふっ、とヴァトラーは愉しげに目を細めた。
「なに!?」
「キミには最初に伝えたはずだ。セレスタ・シアーテを殺して、ザザラマギウの復活を阻止するか。それとも紘神島で邪神の降臨を待つか――選択肢はふたつだと。状況はなにも変わっていない。時間制限がわかりやすくなっただけさ」
「おまえっ――！」
ヴァトラーの言葉が終わる前に、古城はデッキを蹴りつけて動いていた。涼しげな笑みを浮かべたヴァトラーの頬を、力任せに殴りつける。
ヴァトラーはそれをよけなかった。骨と骨がぶつかる鈍い音が鳴り響く。
「――痛いな、古城。そういうのも、嫌いじゃないが」
殴られた頬に触れながらも、ヴァトラーは微笑みを絶やさない。
「安心するといい。紘神島で実体化したところで、ザザラマギウに本来の神威が発揮できないことは予想されていた。今なら簡単に滅ぼせる。キミが気乗りしないというのなら、代わりにボクがやってもいいが――」
「……やめろ」
浮き立つような口調で告げてくるヴァトラーに、歯を喰いしばったままの古城が言う。
「ん？」

「手を出すなって言ってんだよ！　俺がセレスタと姫柊を連れて帰る！　それまではおまえの好きにさせるかよ！」

「ふふ……キミならそう言うだろうと予想していたが、さて、どうするかな」

ヴァトラーは、聞き分けのない弟をあやすような口調で呟いた。

古城は、そんなヴァトラーの胸ぐらを、血に濡れた右手でつかみ上げる。

「忘れるな、セレスタはおまえが俺に預けたんだ。だからおまえは最後まで黙って見てろ」

「ふむ、なるほど……そう来るか」

ヴァトラーがめずらしく古城の意見に揺れた。妙なところで律儀な男なのだ。

「いいだろう。ボクとしても、どうせなら、より完全な邪神の相手をするほうが愉しいからね。ザザラマギウが実体化を終えるまでは待ってもいい。それならキミも文句はないだろう？　そうなったときには、セレスタ・シアーテも姫柊雪菜も、この世には存在しないだろうからね」

「上等だ……！」

古城は挑発的なヴァトラーの主張を受け入れた。不愉快だが、ヴァトラーの言葉は真実だ。邪神の降臨を止めなければ、セレスタも雪菜も、そして絃神島の住民たちの多くも命を落とす。そうなってからでは、なにもかもが手遅れだ。

「ああ、そうそう。本気で彼女たちを救いたいなら、少し急いだほうがいい。あの神殿はこの島の住民や人工島本体から質量を奪っている。時間が経てば経つほど被害が広がるはずだヨ」

古城の焦りを鑑賞するように、ヴァトラーが愉しげに伝えてくる。
傷ついた身体を無言で引きずるようにして、古城は彼らに背を向けた。

3

「く……」
ヴァトラーの船を降りた古城は、膨張を続ける球体へと向かった。
虚空に穿たれた巨大な空隙。邪神の力で生み出された〝もうひとつの世界〟が、現実世界を呑みこんで成長の速度を増している。
球体の中には、雪菜やセレスタがいるはずだ。しかし彼女たちと合流する前に、古城には、やるべきことが残されていた。
邪神の〝卵〟の、絃神島への融合を喰い止める――
ザザラマギウの降臨には、結界内に再現された魔術装置とやらの完成が必要らしい。装置の構成に必要な魔力と質量を、あの球体は、絃神島と融合することで手に入れようとしている。
だとすれば、絃神島を球体から切り離すことで、邪神の降臨を遅らせることが可能なはずだ。
絃神島の被害を減らすことで、セレスタを救うための時間も稼げるのだ。
「――疾く在れ、〝水精の白鋼〟！」

残された体力を注ぎこんで、古城は眷獣を召喚した。

海面を割って現れたのは、水流のように透きとおった肉体を持つ水妖だった。

美しい女性の上半身と、巨大な蛇の下半身。流れ落ちる髪も無数の蛇。

水妖の巨大な蛇身が、激流と化して球体を襲った。鋭い鉤爪を備えた繊手が、人工島を侵蝕する無数の蔓草を引きちぎる。〝卵〟本体を攻撃しなかったのは、中にいる雪菜たちの安全を優先したからだ。

第四真祖の十一番目の眷獣は、吸血鬼の超回復能力を象徴する水の精霊だった。まるで時間を巻き戻すように、触れたものを修復する。高度な機械を原子に分解し、生物を生まれる以前の姿に還すのだ。

絃神島を侵蝕していた蔓草が、水妖にまとめて破壊され、本来あるべき人工島の構造材へと戻っていく。このまま攻撃を繰り返せば、絃神島を救うだけでなく、邪神の魔力をも削ぎ落とすことが可能なはずだった。が――

その水妖の動きが、背後から突然引きずられたように止まる。

「なに!?」

全身の血が流れ出すような苦痛に、古城が突然膝を突く。

水妖の動きが止まった原因は、新たに球体が吐き出した蔓草状の触手だった。それらが蛇のように巻きついて、古城の眷獣の動きを封じている。水妖の鉤爪が触手を切断するが、それよ

りも吐き出される触手の量が多い。否、眷獣の攻撃力が落ちているのだ――

「くっ……〝龍蛇の水銀（アル・メイサ・メルクーリ）〟――！」

古城が新たな眷獣を召喚した。水銀色の鱗を持つ双頭の龍だ。二体の顎が、伸びてきた触手を喰い尽くし、囚われていた水妖を解放する。

しかし古城が反撃できたのはそこまでだった。

「あいつ……！　俺の魔力を喰いやがった……!?」

両手を頼りなく地面に突いて、古城は荒い呼吸を繰り返した。

残っていたなけなしの体力が、ごっそりと奪われて目減りしていた。これ以上の制御は不可能だと判断して、古城が眷獣の召喚を解除する。

邪神の〝卵〟が浸蝕するのは、紘神島だけではない。あの蔓草に巻きつかれた瞬間、古城の眷獣からも膨大な魔力が奪われた。古城は、ジャガンの消耗の理由を理解した。〝オシアナス・グレイヴⅡ〟を護っている間に、彼の眷獣は相当の魔力を喰われていたのだ。

あの球体に迂闊に眷獣をぶつけるのは危険だ。第四真祖の眷獣といえども、戦闘が長引けば不利になる。一撃で紘神島と球体を切り離し、そのまま消滅する。そんな攻撃でなければ通用しない。

それは不可能ではないが、今の古城には使えない。体力の消耗がひどすぎた。強力すぎる眷獣は、古城にとっても諸刃の剣だ。一歩間違えば紘神島そのものを消滅させかねないからだ。

どうすればいい、と古城が惑う。その困惑は容易に隙を生んだ。

「しまっ――！」

鞭のようにしなる蔓草状の触手が、古城を狙って撃ち放たれた。頭上と左右からの同時攻撃だ。どうやっても回避しきれない。そもそも古城には、よけるだけの体力が残っていない。

「ッ！」

「護衛モード。執行せよ、〝薔薇の指先〟」

硬直した古城を救ったのは、古城の全身を包みこむような巨大な腕だった。人型の眷獣を喚び出した人工生命体の少女が、球体からの攻撃を撥ね返す。

「アスタルテ!?」

古城は呆然と彼女の名を呼んだ。アスタルテの眷獣〝薔薇の指先〟の能力は、ありとあらゆる魔力の反射だ。古城の眷獣をも侵蝕する緑の触手も、彼女の防御を貫くことはできない。

「お兄さん！　よかった……無事でしたか？」

そのアスタルテに護られながら、駆け寄ってきたのは夏音だった。

「叶瀬も!?　おまえら、どうしてここに――!?」

「ごめんなさいでした。やっぱりセレスタさんのことが心配で見に来てしまいました」

夏音は困ったような表情を浮かべて、言いつけを破ったことを告白する。

古城が立ち上がれずにいることを確認すると、彼女は躊躇せず肩を差し出した。自分の服

が、古城の血で汚れることすら一瞬たりとも厭わない。非力な身体で古城を懸命に支え、そのまま安全そうな場所へと引き摺っていく。

「いや……助かった。ありがとな」

古城が弱々しくそう告げると、夏音は無言で首を振り、照れたようにうつむいた。

球体からの攻撃は続いていたが、アスタルテの眷獣は、それを危なげなく捌いていく。

避難先として夏音が選んだのは、〝オシアナス・グレイヴⅡ〟の中だった。球体があるのは目と鼻の先だが、浸蝕の方向からは外れている。下手に建物の中に逃げるより安全なはずだ。

ヴァトラーが退避させたのか、船内に乗員たちの姿は見えない。本人が降りてくる気配もない。無様な姿を見られずに済んで、古城は少しだけ安堵する。

「雪菜ちゃんとセレスタさんは、どこに？」

船内の通路に古城を横たえて、夏音が心配そうに訊いてきた。

「あいつらはあの中だ。今から行って連れ戻してくる――」

窓越しに見える球体を睨んで、古城が答える。

夏音は碧い目を驚いたように見開いて、慌てて古城の身体を押さえつけた。

「今のお兄さんでは無理でした」

ふるふると首を振る夏音を見返して、古城は唇を噛みしめる。

吹き飛ばされた心臓は再生を終えているが、それはあくまでも機能だけの話だ。古城の胸の

中心には、生々しい傷痕がまだ残されている。ちぎれかけていた左腕は、ようやく動かせるようになったばかりだ。それ以外にも、全身の傷を数えていたらキリがなかった。今の古城には夏音を押し返すだけの力もない。彼女が心配するのも当然だ。

「大丈夫。このくらいの傷は、すぐに治る――」

それでも古城は強引に立ち上がる。しかし何歩も進まないうちに、目眩に襲われてよろめいた。遠のきそうになる意識を、危ういところでつなぎ止める。今の古城は戦えない。悔しいが、それを認めざるを得なかった。

「提案があります」

眷獣の召喚を解除したアスタルテが、倒れた古城を見下ろして告げた。

古城は怪訝な表情で彼女を見返す。高度な医療知識を持つアスタルテだが、魔術に対する造詣は決して深くない。その彼女が、自分からなにかを主張したことを少し意外に思う。

「なんだ？　悪いけど逃げるって選択肢はなしだぞ」

「了解。戦略的撤退は却下。では第二の提案です」

苦しげに伝えた古城の言葉を、アスタルテはあっさりと受け入れた。

そして彼女は手近にあった船室のドアを開け、傷ついた古城の首根っこをつかんで、乱暴に中へと放りこんだ。続けて夏音も引きずりこむ。

「痛って……！　アスタルテ？　いったいなにを……!?」

古城は、船室の中を見回してうめいた。船室内には未使用の毛布カバーやシーツが、うずたかく積み上げられていた。いわゆるリネン室というやつだ。

洗剤の残り香が漂っているが、それ以外には特になにもない。

アスタルテの真意がわからず、戸惑う古城。そして人工生命体の少女は、同じように困惑している夏音に無感動に告げた。

「服を脱いでください、叶瀬夏音」

「……え？」

「脱衣」

立ち尽くしている夏音の背後に回りこみ、アスタルテは彼女の服の襟に手をかけた。

今日の夏音が着ているのは、おそらく那月が見立てたとおぼしき、控え目なフリルつきのワンピースだ。少し古風なデザインが、聖女めいた夏音の雰囲気によく似合っている。

そのワンピースの背中のファスナーを、アスタルテがいきなり全開にした。さらにスカートの裾を握り締め、問答無用で引きずり下ろす。

起伏の乏しい夏音の身体に、それを妨げるだけの引っかかりはなかった。

「え……あ、あの……!?」

なにが起きたのか理解できないまま、夏音は下着姿で立ち尽くす。

古城はそんな彼女の姿に、呆然と目を奪われた。

なまじ普段が清楚な印象なだけに、夏音の下着姿にはインパクトがあった。
日本人離れした真っ白な肌に、現実感の乏しいほっそりとした体つき。下着は上下揃いの淡いラベンダー色で、薄いレースの縁取りが、夏音の可憐さを一層引き立てている。
色素の薄さゆえか、彼女の慎ましやかな胸元にはうっすらと青い血管が浮いて、不思議な生々しさと艶めかしさを醸し出していた。
「ま、待て！　おい、アスタルテ！　叶瀬になにをさせるつもりだ!?」
しばらく呆気にとられていた古城が、ようやく我に返って叫んだ。
そこで夏音も、思い出したように恥じらって胸元を隠す。ごく当然のその仕草が、彼女が普通の女の子だという事実を、あらためて古城に強調する。
「献血行為――と回答します」
アスタルテは、表情を動かさずに淡々と答えた。
それを聞いた夏音が、なぜか納得したようにポンと手を叩く。
「あ、ああ……わかりました」
硬直している古城を見て、夏音は力強くうなずいた。そしてなにを思ったか、彼女は自分の背中に手を回し、唐突にブラのホックを外す。
ずり落ちそうになるブラを両手で押さえ、夏音は倒れたままの古城の前に屈みこんだ。
夏音の端整な美貌が、信じられないほど近くから古城をのぞきこんでくる。

しかし夏音は、そのまま途方に暮れたように動きを止めた。そこからなにをすればいいのか、今ひとつ本人も理解できていなかったらしい。

「あ……あの……私一人では……ア、アスタルテさんも脱いでください」

弱り切った表情を浮かべた夏音が、人工生命体の少女に助力を求めた。

「命令受諾――」

アスタルテは無表情にうなずくと、着ていたメイド服を脱ぎ始める。

夏音よりもさらに小柄な幼い体つきがあらわになって、古城は激しく咳きこんだ。

「ちょ……お、おまえら……なんで……!?」

そもそも人工生命体であるアスタルテの体液は、古城の回復には貢献しない。アスタルテ自身もそのことは知っているはずだ。

だがしかし、彼女に性的興奮を覚えるかどうかというのは、それとは別の問題だ。

吸血衝動の引き金になるのは、食欲ではなく性欲なのである。密室で半裸の少女二人に囲まれているという異常な状況が、理性では逆らいがたい強い感情を古城の本能に訴えかけてくる。

「捕獲」

アスタルテが、後ずさる古城の背後に回りこんで逃げ道を塞いだ。

彼女の裸の胸が背中に押し当てられて、古城は身動きがとれなくなる。

「ちょ……ア、アスタルテ……!?」
「ふ、ふつつかものですが」
正面から古城に触れてきたのは、夏音だ。窓から射しこむ仄かな光が、彼女の美しい銀髪を照らす。甘い髪の香りと仄かな肌の温もりが、古城の五感を刺激する。
「待て、叶瀬。違う……おまえは騙されてる！　いや、献血行為には違いないけど……！」
「いえ。大丈夫でした。わかってました。お兄さんがいつも雪菜ちゃんにしてることですね」
ギリギリで理性をつないだ古城の精一杯の忠告に、夏音は柔らかく首を振る。
「いつもじゃねえよ！　あれは、いろいろと事情があって仕方なく――」
「でも、そうやって雪菜ちゃんとお兄さんは私を助けてくれました」
「え……!?」
間近で古城を見つめる夏音の碧眼には、揺るぎのない決意の光が浮かんでいた。
夏音の両腕が優しく古城を抱きしめる。慈愛に満ちた聖女のように。
「だから今度は私の番でした」
「叶瀬……」
夏音の抱擁に包まれて、古城は静かに息を吸った。
激しい喉の渇きを覚える。剝き出しになった牙が疼く。
古城は、かつて模造天使と化した夏音と戦った。だからこそ彼女の優しさを誰よりも知って

いる。そんな夏音に吸血衝動を覚える自分に、罪の意識すら覚えてしまう。
だが夏音が、それを知った上で古城を許してくれるというのなら。
そしてそのことで大切な人々を救えるのなら。
今はその罪に溺れてもいいのかもしれない――
「大丈夫です。セレスタさんに言ったことは、嘘ではありませんでした、から」
ほっそりとした首筋をあらわにして、夏音が古城の耳元で囁いた。
その白い首筋に、古城の牙が喰いこんでいく。
苦痛に耐えるような小さな吐息が、夏音の唇から漏れた。
古城を抱く夏音の両腕に力がこもる。彼女の吐息が、古城の耳元にかかる。
「ずっと好きでした。雪菜ちゃんのことも、お兄さんのことも……」

4

遺跡は、想像していたよりも遥かに広大だった。
しかも神殿に近づけば近づくほど、邪神の影響力が増していく。
遺跡を覆い尽くす蔓草だけでなく、大気や重力や、それらを含む世界のすべてが、敵となって侵入者の行く手を阻もうとしていた。この空間そのものが、邪神を生み出すために創り出さ

れた結界なのだから、そのような防衛機構の存在も当然だ。
だがそれでも、雪菜は足を止めようとはしなかった。
「獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る――！」
雪菜が構えた銀色の槍が、眩い神格振動波の輝きを放つ。
その輝きは強力な防護結界となって、雪菜に対する遺跡からの攻撃を阻害した。
雪菜にとって幸運だったのは、龍脈のエネルギーが生み出すザザラマギウの神気が、〝雪霞狼〟の神格振動波と、きわめて近い属性を有していたことだ。
相手の力を無効化することができないかわりに、敵として認識されることもない。環境に適応したウィルスに近い形で、遺跡の中を動き回ることができるのだ。
「雪霞の神狼、千剣破の響きをもて楯と成し、兇変災禍を祓い給え！」
雪菜の槍の一閃が、神殿の入り口を閉ざしていた扉を撃ち破る。
神格振動波の結界をまとって、雪菜は神殿内へと足を踏み入れた。
神殿内には、異様な光景が広がっていた。
上下の感覚のない、奇怪な広間だ。
雪菜が床だと思って立っていた場所は壁であり、天井だと思っていた方角が床になっている。
階段だと思っていた場所は、実はべつの階段の裏側に過ぎず、床に穿たれた落とし穴の底には美しい青空が広がっていた。天井にある窓の外の景色は海の底だ。

眺めているだけで正気を奪われそうな、狂った空間だ。
そしてその空間の中央には、黄金の祭壇が置かれていた。
祭壇には、蜂蜜色の髪を持つ少女の姿が見える。彼女は上下逆さになった姿で、祭壇の上に浮かんでいた。
「セレスタ……さん？」
雪菜が祭壇のほうへと走り出す。
だが、その瞬間、上下の感覚を奪われて、雪菜は床へと転がった。
重力の働きが明らかにおかしい。だが、それは遺跡の防御機構ですらない。ここは神の間。
ザザラマギウの〝花嫁〟だけが入ることを許された空間なのだ。
「お願いです！　答えてください、セレスタさん……！」
それを理解してもなお、雪菜は祭壇へと足を踏み出した。
雪菜の声が届いたのか、セレスタがゆっくりと目を開ける。その反応を見て雪菜は確信する。
セレスタはまだ生きている。彼女の精神は人間のままだ。
「地味……女……」
祭壇上でゆっくりと回転しながら、セレスタが答えた。
その声には絶望と諦観の響きがある。彼女の置かれている状況を思えば、それはごく当然の感情だ。そしてセレスタは、雪菜に告げる。

「あんた……なにやってんのよ、早く逃げなさいよ……見てよ、あたしはもう……」
雪菜の返事は速かった。銀色の槍を杖代わりに顔を上げ、真っ直ぐにセレスタを見て笑う。
「いえ、駄目です。あなたを連れて帰ります」
迷いなく返ってきた雪菜の言葉に、セレスタは、ひくっ、と喉を鳴らした。
「あたしがどうなろうと、あんたたちには関係ないことでしょ!?　あんたは古城と二人きりで家でイチャイチャしてなさいよ」
「言われなくてもそうします！」
雪菜が勢いで叫び返す。セレスタはその剣幕に一瞬気圧されて、
「……ひ、開き直ったわね……地味女のくせに！」
「だけど、その前にあなたをここから連れ出さなければ駄目なんです！」
雪菜はそう言って、さらに階段を上る。
セレスタは、理解できない、というふうに首を振った。雪菜とセレスタは、古くからの友人でもなんでもない。むしろ雪菜たちにとって自分の存在は、迷惑でしかないはずだ。
なのになぜ、雪菜は、危険を冒して自分を救おうとしているのか。
「……どう……して？」
セレスタは思わず呟いた。邪神の降臨を防ぐのが目的なら、雪菜は今すぐセレスタを殺すべきだった。それなら無理に祭壇に辿り着かなくてもどうにかなるはずだ。

しかし雪菜は、はにかむように頼りなく笑って首を振る。
「そうでなければ、わたしが救われないからです」
「え……？」
「わたしも、あなたと同じなんです。神を喚び出すための生贄として、殺されるはずでした。七歳の誕生日迎える前に……誰も……暁先輩も知らないことですけど……」
自分の胸元に手を当てて、雪菜が言った。忌まわしい秘密を一人で抱え続けていることに、罪悪感を覚えているかのように。
「だけど、殺される直前に、わたしを連れ出してくれた女性がいたんです」
重力の歪みに足を取られて、雪菜は再び転倒した。階段の高さはそれほどでもないが、受け身を取ることができないせいで、衝撃をまともに喰らうことになる。苦痛が身体の芯へと響く。
ふと雪菜は、幼いころに初めて出会った〝剣巫〟の姿を思い出す。
あのときは、ずいぶん大人びて見えた。だが今にして思えば、彼女も、今の雪菜と大差ない年齢だったはずだ。それでも彼女は、たった一人で雪菜を救い出してくれたのだ。
「その女性は、暁先輩と同じことを、わたしに言ってくれました。どうして助けてくれるのかと訊いたわたしに、理由が必要か、って」
歪んだ階段を這いずるように上って、雪菜は祭壇の真下に辿り着く。
古城が、セレスタを助けると言ってくれたとき、雪菜は嬉しかったのだ。邪神の生贄になる

はずの忌まわしい娘を、彼は迷わず助けると言ってくれた。雪菜には、それがまるで自分に向けられた言葉のように思えた。

「わたしは彼女のおかげで剣巫になって、先輩やあなたに出会えた。だから――」

自分にはセレスタを救う理由がある――そう言いかけた雪菜の身体が、祭壇に触れた瞬間、吹き飛んだ。神殿の壁を突き破って伸びてきた蔓草状の触手が、雪菜の身体を押し潰す。

「地味女――っ!?」

セレスタが甲高く悲鳴を上げた。そんな彼女の目の前で、眩い輝きが刃のように伸びる。

輝きの源は、雪菜の槍だ。

銀色の槍を構えた雪菜が、触手を斬り裂きながら立ち上がる。

だがそれは、絶望的な戦いだった。雪菜は傷つき、消耗し、残された霊力も有限だ。それに対して邪神の結界は、無尽蔵の神気を持っている。戦うまでもなく結末は見えていた。このままでは雪菜は確実に死ぬ。

「もうやめて！　あんた一人で神に勝てるはずがない！　そんなこともわからないの――!?」

「わかってます」

セレスタの絶叫に、雪菜は微笑む。それは最初からわかりきっていたことだった。

雪菜には、邪神の実体化を完全に止めるだけの力はない。だが祭壇に辿り着いた雪菜を排除するために、〝卵〟は、せっかく構築した魔術経路を、自ら破壊しなければならなくなった。

このまま雪菜が戦い続けていれば、それだけ〝卵〟は神気を消耗する。
そのぶん邪神の実体化は遅れることになる。そうやって一秒でも多く稼ぐのだ。
彼が回復するまでの時間を――
「わたし一人で勝てないことはわかってます。でも、ずっと監視てきたからわかるんです。あなたを助けようとしているのはわたし一人じゃない。あの吸血鬼が、必ず来てくれる――」
「雪……菜……」
セレスタの唇が小さく震えた。彼女の瞳に、失われていたはずの意思の光が戻る。
逆さになって浮かんでいたセレスタの腕が、かすかに動いた。
前に向かって手を伸ばす。彼女を縛りつけている祭壇の外へと――
そしてセレスタの指先が祭壇の外に届いた瞬間、ずぐん、と神殿全体が揺さぶられたように震えた。雪菜を苦しめていた重力のねじれが消失した。神殿があるべき姿へと還る。
床はただの床に。壁はただの壁に。
重力に引かれてセレスタは落下し、祭壇の外へと転げ落ちた。
「痛った……」
「セレスタさん！」
雪菜を襲っていた触手が消滅する。最後の一本を斬り裂いて、雪菜は倒れているセレスタへと駆け寄った。自力では立てないほど消耗しているが、セレスタは無事だ。

神殿が再び大きく揺さぶられた。

この結界そのものが震えているのだと、雪菜は気づく。

結界の中枢である生贄を失ったことで、邪神を実体化させるための魔術装置が、機能不全を起こしている。それまでかろうじて制御されていた莫大な神気が、不規則に乱れ始めていた。

このままでは邪神として実体化することもできないまま、溜めこんだエネルギーだけが解放されることになる。結果として生じる現象は、神気の暴発だ。

最低でも半径数十キロ内に甚大な被害が出るだろう。絃神島は確実に消滅する。

そして――

「セレスタさん……!?」

再び祭壇によじ登ろうとするセレスタに気づいて、雪菜が息を呑んだ。

ようやく解放されたばかりの結界の中心地に、セレスタは自ら戻ろうとしているのだ。咄嗟に制止しようとした雪菜を振り返り、セレスタは、心配いらない、と唇の端を吊り上げる。

「大丈夫よ……地味女。あたしがなんとかしてみせる……」

彼女に手を伸ばしかけたままの姿勢で、雪菜は、苦悩しながら動きを止めた。

邪神の〝卵〟を召喚したのはセレスタだ。彼女の絶望と同調することで、ザザラマギウの実体化は始まった。逆に言えば、ザザラマギウの実体化を止められるのも、〝花嫁〟である彼女だけだということだ。

もちろん上手くいくという保証はない。セレスタにも自信はないはずだ。
しかしわずかでも可能性が残されている以上、今は彼女を信じてみる――雪菜は祈るようにそう考えた。が――
まるでその祈りを踏みつけるように、ガン、と雪菜たちの眼前で、黄金の祭壇が砕け散った。
「――なっ!?」
祭壇と、そこへと続く階段が割れる。
石を敷き詰めた神殿の床に、見えない斧を叩きつけたような巨大な亀裂が生まれる。
その亀裂に阻まれて、再び雪菜とセレスタの距離が開いた。
神殿の床を斬り裂き、祭壇を砕いたのは、圧倒的な破壊力を持つ不可視の斬撃だ。
戦術魔具によって生み出される、その攻撃を雪菜は知っていた。
「よくやってくれた――と言っておこうか、民間人。貴様のおかげで、生贄の間に入れた」
感情のない機械に似た、冷酷な声が聞こえてくる。
神殿の入り口に立っていたのは、毛皮つきのコートを着た長身の女だ。
左腕を頭上に振り上げた姿勢で、彼女は、雪菜たちを冷ややかに睨んでいる。
アメリカ連合国陸軍特殊部隊少佐――
アンジェリカ・ハーミダが、静かに足を踏み出した。

5

巨大クルーザー内の静かな船室――
窮屈なリネン室の薄暗がりの中で、古城は身動きできずにいた。
背後にいるのは、ほぼ素っ裸の人工生命体の少女――
そして正面では、銀髪碧眼の後輩の少女が、あられもない姿で古城に密着している。
二人の間に挟まれて、古城は指先一本動かせない。彼女たちに下手に身じろぎでもされたら、いろいろと見てはいけないものまで見えてしまいそうだったからだ。
「あー……主ら、いつまでそうしておるつもりだ？」
そのとき古城たちのすぐ近くで、誰かの声が聞こえてきた。
声の主はリネン室の床上、約三十センチの場所に立っていた。
妖精めいたサイズの液体金属生命体。自称〝古の大錬金術師〟ニーナ・アデラードだ。
「おまえ……ニーナ!?　み、見てたのか!?」
「うむ。一部始終しっかりとな」
コホン、と咳払いするニーナに気づいて、古城がうげっと声にならない声を出す。
ニーナは、ものわかりのいい年長者という風情で重々しくうなずいて、

「まあ、安心せよ。妾はこう見えても口が堅い。なんせ金属生命体だからな。貴様が男として、きっちり責任を取るというのなら、夏音の保護者としても悪いようにはせぬ」

「せ、責任て……」

その単語に理由もなく焦りを覚えて、古城がうめいた。

古城の腕の中でぐったりしていた夏音が、そのときになってようやく顔を上げる。

間近で古城と目を合わせ、夏音は、頬をほんのりと赤く上気させた。今更ながら自分のしたことを思い出して、どんな顔をすればいいのかわからない、という表情だ。

「その……なんだ……すまん、叶瀬」

古城はぎこちなく彼女に頭を下げる。夏音は礼儀正しく背筋を伸ばしながら、

「お……お粗末さまでした……」

「いや、お粗末ってことは全然ないけどな。ありがとう、助かった」

夏音の裸身から目を逸らしつつ、古城が本音の感想を洩らす。

そんな古城の身体を見返して、夏音が驚いたように目を瞬く。

「お兄さん、傷が……」

「ああ。おまえのおかげだ」

古城は微笑んで立ち上がる。目眩も苦痛も感じない。失われた魔力が回復して、全身に異様な昂揚感が漲っている。アルディギア王族の血を引く夏音は、恐ろしく強力な霊媒だ。極めて

純度の高い彼女の霊気は、古城の体内に眠る眷獣たちにとって最高級の贄となる。

「――雪菜ちゃんとセレスタさんのことをお願い、でした」

脱がされた服を胸の前に抱きながら、夏音が言う。

わかってる、と古城は、彼女の目を見てうなずき返す。

船室のドアを開けて外に出た。

正面に見えるのは、斑模様の卵に似た巨大な球体だ。球体から滝のようにあふれ出した無数の蔓草が、絃神島の人工の大地に絡みつき、その構造材を浸蝕し続けている。

球体の直径は、すでに百メートルを超えていた。

だが、膨張を続けていたはずの球体の様子は、どこかおかしい。

球体内部で渦巻いていた濃密な神気が乱れ、通常空間との境界面が苦悶するように震えている。邪神の結界の内側で、なにか異変が起こっているのだ。邪神召喚の魔術にとって、想定外で致命的な異変が。

それは古城たちにとって歓迎すべき幸運の予兆だ。

ならば、と古城は頭上に向けて右腕を掲げる。

ここで一気に〝卵〟への魔力の供給を絶つ――

「――疾く在れ、七番目の眷獣、〝夜摩の黒剣〟！」

古城が撒き散らした瘴気が空間を歪め、剣の姿を虚空に生み出した。

刃渡り百メートルを超える馬鹿げた大剣――意思を持つ武器だ。
その正確な形は三鈷剣と呼ばれる古代の武具。神々が使ったといわれる降魔の利剣である。
最大の威力は必要なかった。求められているのは精密さだ。
絃神島の岸壁と、斑模様の球体。それらが接する境界を狙って、加速する剣を誘導する。
音速を超えた落下は巨大な衝撃波を生み、圧縮された大気が剣を灼熱の炎で包んだ。
破壊するという、たったひとつの目的に特化した眷獣の威力は絶大だ。
巨大な閃光と化した大剣が、斑模様の球体の縁をかすめて海へと達した。絃神島への影響を防ぐため、海面に激突する直前に、古城は眷獣の召喚を解除している。だがそれでも落下の衝撃の余波で、凄まじい爆風が巻き起こった。皮肉にも、緩衝材としてそれを防いだのは、球体が吐き出していた触手たちだった。人工島と融合していたすべての触手が一撃で切断され、巨大な球体が大きく揺らぐ。
侵蝕による質量供給を断ち切られた〝卵〟は、傍目にもはっきりと動揺していた。
古城の眷獣に斬り裂かれた境界面に亀裂が生じる。球体の直径そのものも、わずかに縮小したように感じられた。通常空間の復元力が、邪神の結界の侵蝕触力を上回り始めたのだ。
球体内部の神気の乱れが勢いを増し、異変がさらに加速する。
新たに蔓草状の触手を伸ばして、球体は再び絃神島を侵蝕しようと試みる。しかし撃ち出された触手に、かつての勢いはない。そして、

「征くぞ、夏音――！」
「はい。院長様！」
服を着終えた夏音の腕に抱かれて、ニーナが苛烈な閃光を放った。
重金属粒子のビーム砲撃だ。
純粋な物理攻撃である粒子ビームが相手では、触手の魔力吸収能力も役には立たない。灼熱の閃光の刃を受けて、緑の触手が次々に焼け落ちる。
攻撃の源である夏音たちを目がけて、新たな触手が鞭のように撃ち出された。
それを撃ち落としたのは、アスタルテが操る眷獣だ。神格振動波に覆われた眷獣の腕が、緑の触手を弾き飛ばし、それをニーナのビームが焼く。
「古城、現実側は、妾らに任せよ」
ニーナが得意げに微笑んで言った。
絶対の防御力を誇るアスタルテの眷獣に、ニーナのデタラメな攻撃力。そして無尽蔵に近い夏音の霊力。彼女たちの力は邪神の〝卵〟に対して、圧倒的な優位性を持っている。
それを認めて古城も力強くうなずいた。
「アスタルテ、頼む！」
「命令受諾――」
アスタルテの眷獣の巨大な腕が、古城の身体をつかみ上げた。そのまま砲丸投げの選手のよ

うに、肩の上へと振りかぶる。
「執行せよ、〝薔薇の指先〟」
ゴッ、と凄まじい加速で、アスタルテが古城を撃ち出した。標的はもちろん虚空に浮かんだ斑模様の巨大な球体だ。
「おおおお――っ！」
古城は顔面を蒼白にしながら、歯を喰いしばって強烈な加速に耐えた。
そして邪神の結界へと突入する。
濃密な神気の嵐が吹き荒れる世界。眼下に見えたのは、巨大な遺跡だ。蔓草に覆われた石柱の隙間を、複雑な電子回路のように、生々しい魔力が流れている。邪神を実体化させるための魔術儀式を実行しているのだ。
この遺跡そのものが巨大な魔術装置。それを理解した古城の唇に笑みが浮く。
深く考えるまでもなく、やるべきことは明らかだった。
この世界が、邪神を召喚するために存在するというのなら、片っ端から破壊すればいい。
「わかりやすくて助かるぜ！　疾く在れ、〝双角の深緋〟――！」
石造りの神殿を巨がけて落下しながら、古城は新たな眷獣を呼び出した。
緋色の双角獣が顕現し、凄まじい衝撃波の咆吼を放つ。
爆風にあおられて、古城はさらに加速した。

結界が崩壊を始めていく――

6

アメリカ連合国陸軍所属・第十七特殊任務部隊分遣隊――

アンジェリカ・ハーミダが率いる特殊部隊は、指示された戦闘隊形で神殿を包囲していた。前衛であるアンジェリカ・ハーミダは、目標を確保するために単独で先行。狙撃手一名が火力支援のために待機。残る二人は神殿の入り口を封鎖して、アンジェリカの脱出経路を確保している。同様の任務は、過去に何度も繰り返され、そのたびに数多くの血が流れた。敵の血も、味方の血もだ。〝血塗れ〟アンジェリカの名は伊達ではない。

アメリカ連合国の歴史は、戦争の歴史だ。

そもそもアメリカ連合国そのものが、欧州北海帝国に対する独立戦争や、北米連合との武力衝突の末に成立した国家だからだ。

戦争の直接の原因は経済問題だが、その背景には魔族に対する差別がある。人間と魔族の共存を目的とした〝聖域条約〟に、アメリカ連合国は調印していない。人類純血政策を掲げるアメリカ連合国にとって、魔族とは淘汰されるべき下等な存在なのだ。

過激な差別政策によって国際的に孤立したアメリカ連合国では、軍事力の整備こそが最優先

の課題とされていた。国家を存続させるためには、世界各地の紛争に常に介入し、軍事パワーバランスの調整を続ける必要があったからだ。

そのような軍事介入の主力となるのが、彼ら特殊部隊の隊員だった。

ゆえに彼らの国家に対する忠誠は篤い。そして彼らは死を恐れない。

そんな特殊部隊の一員であるサングラスの男――ブイエが、周囲の異変を察知して、機械化された眼を発光させる。

「……なんだ、今の衝撃は？」

首に埋めこんだ無線機に向かって、ブイエは訊いた。

「わからん。視界がこの有様ではな」

三十メートルほど離れた石柱の陰から、義手の男――マティスが答えてくる。

石柱と蔓草に邪魔された遺跡内の視界は、たしかに悪い。

しかしマティスも気づいているはずだ。

おそらくは現実側の世界で、結界の外殻に異変が起きたのだ。

邪神によって生み出された、巨大な結界が揺らいでいる。絃神島を侵蝕することで得られるはずの、魔力や質量の供給も途絶えているようだ。

強力な攻撃によって魔力の供給路が切断され、結界が絃神島から切り離された。その上で、結界の外殻が損傷したのだろう。実体化前の未熟な段階とはいえ、邪神の力で生み出された結

界を揺るがすほどの攻撃だ。想像を絶する巨大な〝力〟が、絃神島に出現している。
その事実が、冷静な戦闘機械であるはずの兵士たちを、わずかに動揺させていた。
膨大な戦闘経験を持つからこそ、彼らは直感的に理解したのだ。その〝力〟が、部隊の任務を妨げる障害となることを――
そんな彼らの直感を裏付けるように、結界内にあらたな異変が生じる。
上空に出現したのは、荒れ狂う大気が実体化したような緋色の双角獣だ。
撒き散らされる振動と衝撃波が、ほとんど無差別に遺跡を襲った。
石柱がへし折れ、敷き詰められた巨石が砕け散る。遺跡に刻みつけられていた魔術装置の術紋が消失し、蓄積されていた膨大な神気が洩れ出していく。さすがに静観できない状況だ。
「ボーランド、報告しろ！　ボーランド！」
ブイエが無線機に向かって怒鳴った。
上空に出現したのが、吸血鬼の眷獣だということはわかる。邪神の神気にも劣らぬ、濃密な魔力。その宿主にも心当たりがある。世界最強の吸血鬼――第四真祖。
しかし彼は瀕死の重傷を負い、凄まじく消耗していたはずだ。
不滅の真祖を滅ぼすことはできなくても、一時的に力を削ぐことはできる。それを知っていたからこそ、ブイエたちは彼を敵に回すことも恐れなかった。狙撃によって彼の心臓を潰し、力を封じたはずなのだ。

だが、緋色の眷獣を操る第四真祖は、ブイエたちが最初に遭遇したときとは違っている。単に魔力が回復しているというだけではない。

あの少年はセレスタ・シアーテの正体を知り、アンジェリカ・ハーミダの目的も理解した。未知の敵に対する不安や、得体の知れない状況への迷い。皮肉にもセレスタの暴走によって、彼は、それらすべての枷から解放された。天災にも匹敵するという第四真祖の禍々しい力を、今の彼は思うままに振るうことができるのだ。セレスタ・シアーテを連れ戻すためだけに。

あの少年は危険だ、とブイエは考える。

もう一度潰さなければならない――と。しかし、

「ボーランドというのは、この木偶の坊のことか？」

ブイエの通信に答えたのは、冷たいナイフを連想させる、美しい顔立ちの吸血鬼だった。肉体を機械化した大柄な兵士が、その吸血鬼の足元に転がっている。兵士の下半身は灼熱の炎に焼かれて消滅し、両腕は圧倒的な膂力で引きちぎられていた。いかに魔義化歩兵といえども、生きていられる損傷ではない。

「トビアス・ジャガン……貴様、ボーランドを……」

「罪もない人間を何百人も撃ち殺した狙撃兵だ。苦しまずに殺してやっただけでも慈悲と思え」

殺気混じりにうめくブイエに、ジャガンが侮蔑に満ちた口調で言い放つ。

ブイエは無言で己の服を裂いた。彼の両肩に埋めこまれた、銀色の魔具が露出する。灼熱の陽炎を生み出す金属プレートだ。

「――待て、ブイエ。こいつは俺がやる。援護しろ」

そのブイエを止めたのは、もう一人の部隊員マティスだった。

両腕の義手に埋めこんだ魔具を、彼はすでに起動している。マティスの周囲に出現したのは、空中に浮かぶ十六個もの籠手だった。籠手に握られているのは、様々な武器だ。剣や斧、槍や鎌、そして大口径の拳銃や、機関砲まで――

「面白い腕だな。背中をかくのに便利そうだ」

ほう、とジャガンが感心したように言った。己の魔具を〝孫の手〟呼ばわりされたマティスが、隠しきれない憤激に顔を歪める。

「舐めるなよ、吸血鬼。貴様の姿は、俺の〝神託照準器〟がとらえた。どこへ逃げても無駄だ！」

特殊部隊の兵士が操る籠手が、ジャガンを取り囲むように宙を舞った。

銃器が火を噴き、無数の武器が次々に突き出される。その攻撃の威力と精度は、それぞれの武器の達人の動きに匹敵する。しかも魔具によって生み出された籠手は、たとえ破壊されてもすぐに復活する。その波状攻撃から逃れられる者はいない。たとえ吸血鬼の貴族であっても。

だ。

「――なるほど、それなりに面白い見世物だ。惜しかったな」

しかしジャガンは、無傷のまま冷ややかな表情で立っていた。

マティスの攻撃をよけたのではない。籠手の攻撃はすべて外れた。マティスが自ら外したのだ。彼はジャガンを攻撃できない。ジャガンの正確な位置がつかめない。

「トビアス・ジャガン……貴様、まさか俺の脳を――」

「気づくのが、遅かったな。護符防壁程度で、俺の〝魔眼〟から逃れられると、本気で信じていたのか――？」

つまらなそうな口調で、ジャガンが言った。

籠手使いマティスは、すでにジャガンの〝魔眼〟を見ている。〝魔眼〟の正体は、ジャガンの眼に棲む精神支配系の眷獣だ。ジャガンが召喚を解除するまで、〝魔眼〟は敵に寄生し続ける。護符程度で防ぎきれるものではない。

吸血鬼の眷獣を倒すには、七式突撃降魔機槍のように魔力を無効化するか、あるいはかつての第三真祖のように、より強力な魔力をぶつけるしかないのだから――

「終わりだ、魔義化歩兵」

ジャガンが〝魔眼〟に攻撃を命じた。マティスが操っていたはずの籠手たちが、一斉にマティス本人に刃を向ける。魔具の発動を止める暇はなかった。その前にすべての武器がマティスに殺到し、所有者の全身を刺し貫く。

「まだだ、吸血鬼――！」

敵の絶命を確信したジャガンが、一瞬、〝魔眼〟の制御を弱めた。

その瞬間、瀕死のマティスがジャガンを目がけて跳んだ。

無数の籠手が再び実体化し、吸血鬼の全身を拘束する。そして、

「今だ、ブイエ！」

やれ、とマティスの唇が動くよりも速く、ブイエの肩の魔具が灼熱の陽炎を放っていた。

同時にマティスが体内の爆薬を炸裂させる。

凄まじい炎と爆風がジャガンを包んだ。やったか、とブイエが荒々しく息を吐く。

しかし吸血鬼を焼き尽くすはずの炎は、ジャガンの眼前で渦を巻き、一体の巨大な猛禽の姿へと変わった。炎の向こう側で、ジャガンは冷酷に笑う。

「〝焔扇〟か。めずらしい魔具を持っているな。連携も悪くない。が――温いな」

閃光と化して炎の猛禽が飛んだ。ブイエが立っていた場所を中心に、巨大な火柱が噴き上がる。それは爆風とともに燃え広がり、周囲一帯を焦土と化した。

ジャガンは眷獣を消滅させたが、炎の勢いは止まらない。

しかしその炎の中に、ブイエの死体は見当たらなかった。

破壊された魔具の破片が、わずかに溶け残っているだけ――

ブイエ本人は逃げたのだ。

「手間をかけさせてくれるな……まあいい……」

苛立たしげに呟きながら、ジャガンはふと頭上を見上げた。

そこには巨大な銀色の甲殻獣が実体化している。第四真祖の眷獣だ。

神殿の外壁を霧に変えて消滅させ、暁古城が生贄の間に侵入したのだろう。

ちっ、と乱暴に舌打ちしながらジャガンが歩き出す。

暁古城に手を貸すつもりはない。あの男と同じ空気を吸っていると思うだけで不快だ。だからこれは決して共闘ではない。ただ獲物を横取りされるのは性に合わない。それだけだ。

自分自身にそう言い聞かせながら、ジャガンは神殿へと入っていく。

7

神殿の周囲が、激しく揺らぎ始めていた。

セレスタが祭壇を降りたことだけが原因ではない。異変はザザラマギウの結界の内側と外側、その両方で起きている。現実世界を侵蝕していた外殻が傷を負い、外部からの魔力の供給が途絶えた。そして邪神の魔力で構築された神殿そのものも破壊されつつある。

そんな無茶苦茶なことができる存在はただ一人――第四真祖、暁古城だけだ。

しかしそのことを理解しつつも、雪菜の表情に安堵はなかった。

毛皮つきのコートを着た女が、彼女たちを静かに見据えていたからだ。
「獅子王機関の剣巫と言ったか。セレスタ・シアーテを渡してもらおう。なるべくなら民間人を殺したくはないのでな……」
左腕を頭上に掲げたまま、アンジェリカ・ハーミダが淡々と告げてくる。
神殿の外で起きている異変には、彼女も気づいているはずだ。しかし女兵士の表情に変化はない。思慮が足りないわけではない。彼女には、この異変を制御して乗り切る自信があるのだ。
「セレスタさんを、どうするつもりですか？」
槍を構えて、雪菜が訊いた。研ぎ澄まされた剣巫の霊感が、目の前にいる敵の危険さを伝えてくる。気を抜くと、凄まじい重圧に押し潰されそうになる。
いかなる魔族とも違う、人間の兵士。雪菜がこれまで戦ってきた敵とは異質の存在だ。
アンジェリカの攻撃は、雪菜の槍でも完全には防ぎきれない。それどころかアンジェリカは、まだ本来の力を見せていないのではないか、という疑念すらある。
それでも雪菜は退くわけにはいかなかった。
今ここでセレスタを護れるのは、雪菜しかいないのだ。
「その疑問への回答が、貴様からの要求か？」
女兵士が事務的な口調で訊き返してくる。
「回収し、〝混沌界域〟へと移送する。貴様たちにとっても望ましい条件のはずだが？」

「そんなことが――」

「可能だ。だから私はここにいる」

必要最低限の言葉で、アンジェリカが答える。突き放すような彼女の声音が、言外に交渉の終了を宣告していた。

「五つ数える。その間に私の視界から消えろ。さもなくば、貴様は死ぬ。五……四……」

「地味女……！」

セレスタが、雪菜の背後で叫んでいる。自分のことを見捨てて逃げろ、と言いたげな彼女の悲痛な声に、雪菜は迷いを振り切った。

神殿の床に穿たれた亀裂のせいで、セレスタの楯になることはできない。この状況で彼女を護る方法はひとつだけ――アンジェリカに対する先制攻撃だけだ。

全力で床を蹴りつけて、雪菜が跳んだ。しかしその渾身の突撃は、あっさりとアンジェリカにかわされる。

「三……二……」

アンジェリカは無情にカウントを続けていた。雪菜に与えた、わずかな時間の猶予は守る。すなわち制限時間を過ぎれば、容赦なく攻撃を仕掛ける、ということだ。

「……一……残念だ」

表情ひとつ動かさずに、アンジェリカが呟いた。

しかし、女兵士の左腕が振り下ろされることはなかった。
彼女が攻撃を仕掛ける直前に、神殿の外壁が、凄まじい勢いで爆散したからだ。
撒き散らされた膨大な魔力と、視界を埋め尽くす銀色の霧に、雪菜がハッと振り返る。
明らかに過剰な凄まじい破壊の中、霧に包まれて立っていたのは、血塗れのパーカーを着た気怠げな表情の少年だ。
「悪い……姫柊、待たせたな……！」
瞳を真紅に輝かせながら、暁古城が獰猛に牙を剝いて笑った。
雪菜は、そんな彼の姿を、しばし唖然と眺めていた。
古城の背後では、彼の喚び出した眷獣たちが、遺跡に対して破壊の限りを尽くしている。目的も手加減もない、破壊のための破壊だ。やりすぎだ、と雪菜は思う。
たしかにそれで現実世界への侵蝕や邪神の実体化は防げたが、一歩間違えば、蓄積された龍脈のエネルギーが暴走していたかもしれないのだ。こんなことだから、と雪菜は思う。こんなことだから、この少年から目を離したくなかったのだ。
「セレスタは!?」
「無事です！　ですけど、先輩、帰ったらあとで説教ですから――」
憤慨してそう言いかけた雪菜の表情が、不意に恐怖に凍りついた。
立ちこめる霧の隙間から、左手を振り下ろすアンジェリカ・ハーミダの姿が見えたからだ。

銀色の霧を裂いて、不可視の斬撃が放たれたる。見えない巨大な刃が狙っていたのは、無防備に立つ暁古城だ。

そして古城は、その攻撃をよけなかった。

「先輩――！」

雪菜が短く悲鳴を上げた。

不可視の刃が、巨石を敷き詰めた床を割り、古城の身体を袈裟懸けに両断する――

誰もがそう思った瞬間、古城の正面に浮き上がったのは、宝石のような美しい煌めきだった。

キン、と耳障りな高音が響いた。

不可視の斬撃が光に触れ、直後、凄まじい勢いで鮮血が散った。

雪菜は、信じられないというふうに目を見開いている。

「な……」

鮮血を吐いて倒れたのは、アンジェリカ・ハーミダだ。

古城は無傷のまま、その場に立っている。

「……んだ……と!?」

コートごと胴体を斬り裂かれて、アンジェリカが、ゴトン、と神殿の床に転がった。

古城はなにもしていない。女兵士が放った不可視の斬撃を、そのまま彼女へと撥ね返しただけだ。自分自身の攻撃を受けて、アンジェリカ・ハーミダは倒れたのだ。

「……これで、終わり……なのか？」

自分でも戸惑ったような口調で古城が呟く。

機械で強化されたアンジェリカは、身体を両断された状態でもまだ生きている。苦痛を感じている様子もなさそうだ。だがその姿で戦闘を続けることは不可能だろう。

今の彼女に、古城たちを止める力はない。

戦闘は終わりだ。もはやこの結界の中に残っている理由もない。セレスタを連れて脱出する。エネルギーの暴走を止める方法は、そのあとで考えれば済むことだ。

そう考えて古城が歩き出した直後――

聞こえてきたのは静かな笑い声だった。声の主は、アンジェリカ・ハーミダだ。

「まだだ……まだだよ、第四真祖。私の部隊を舐めるなよ、魔族ごときが――」

挑発的な女兵士の言葉に、古城が愕然と振り返る。

重傷を負って倒れたアンジェリカの横には、いつの間にか新たな人影が立っていた。

機械化した眼を持つ大柄な兵士だ。

ブイエと呼ばれていた、アンジェリカの部下の一人である。

「――少佐。遅くなりました」

そう言ってブイエは、アンジェリカの隣に屈みこむ。

彼の全身は、かなりの傷を負っていた。両肩に埋めこまれた魔具も破壊されている。そんな

部下を見上げて、女兵士が訊く。
「貴様一人か、ブイエ」
「はい。ボーランドとマティスは、トビアス・ジャガンに――」
ブイエが小さく首を振る。アンジェリカは一瞬だけ、戦死した部下たちを悼むように目を閉じた。そして次の瞬間、右手を伸ばして美しく笑う。
「そうか。ならば、貴様をもらうぞ、ブイエ――」
「我が祖国に永遠を――」
ブイエが満足げにうなずいて、アンジェリカの手を取った。
そして彼女の手の甲に口づけをする。君主に忠誠を誓う騎士のように――
あまりにも場違いな彼らの奇妙な小芝居を、古城たちは無言で眺めている。
その沈黙を破ったのは、神殿に走りこんできたトビアス・ジャガンの声だった。
「その女を止めろ、暁古城！」
「え!?」
焦りに唇を歪めたジャガンの言葉を、古城はすぐには理解できなかった。
瀕死のアンジェリカ・ハーミダは、ただ部下に右手で触れているだけだ。ジャガンが、それを恐れる理由がわからない。
「アンジェリカ・ハーミダの右腕は、〝女王の抱擁〟だ！」

古城に向かって怒鳴りながら、ジャガンは己の眷獣を召喚した。横たわるアンジェリカと彼女の部下に向けて、灼熱の猛禽を解き放つ。だが、

「が……ッ!?」

鮮血を撒き散らして倒れたのは、胴体を深々と斬り裂かれたジャガンのほうだった。

彼の眷獣が攻撃を仕掛ける直前に、敵の攻撃が彼に届いたのだ。

「――ジャガン!?」

立ち尽くす古城の見ている前で、ダメージに耐えきれずにジャガンが膝を突く。

巨大な斧の傷痕に似た不可視の斬撃。重傷を負って倒れたはずの、アンジェリカの技だった。

「〝斬首の左手〟……だ。トビアス・ジャガン」

ジャガンが召喚していた灼熱の猛禽が消滅した。

燃え残る炎の向こう側に立っていたのは、歪なほどに背の高い奇怪な人影だった。

人影の頭部は美しい女性。しかし彼女の両腕の下には、もう一対の腕と屈強な男性の身体がある。切断されたアンジェリカの下半身の代わりに、彼女の部下の肉体が融合しているのだ。

「仲間の身体を、奪ったのか……！」

女兵士の変貌の理由に気づいて、古城がうめいた。

彼女の右腕に埋めこまれた魔具は、抱き寄せた相手の肉体を、自分に取りこむという効果を持っていたらしい。アンジェリカは自分の部下を喰って、自らの一部に変えたのだ。

「我が右手は、私が望んだものすべてを私の肉体の一部へと変える。ゼンフォースとは、私のためだけに編成された部隊。隊員たちの肉体は、すべて私の予備部品に過ぎぬ。敵も味方も一様に殺す――ゆえに私は〝血塗れ〟アンジェリカなのだよ」

感情のない声でアンジェリカが言う。勝ち誇るでもなく、自嘲するでもなく、ただ古城たちの恐怖を煽るためだけの説明だ。忠実な部下の肉体を奪ったことすら、彼女の中では、任務遂行に必要なプロセスのひとつに過ぎないのだろう。

アンジェリカの体内に埋めこまれた機械が、独立した生物のようにメキメキと蠢いて、部下の体内の人工臓器に接続し、回路をつなぎ替えていく。単なる融合魔具の効果だけではない。全身を機械化した魔義化歩兵同士だからこそ可能な荒技だ。

「おまえは……！」

あまりにも異様な彼女たちの有り様に、古城は戦慄しながら牙を剝いた。拳を強く握り締め、異形と化した女兵士に殴りかかる。

そんな古城の行動を、最初から知っていたかのように、アンジェリカが左手を振りかぶった。その瞬間、古城は彼女の狙いに気づく。攻撃に気を取られた今の古城には、あの奇妙な反射は使えない――

女兵士の左手に埋めこまれた魔具が発動し、不可視の刃を形成した。

「――先輩！」

しかしその刃が振り下ろされる前に、古城とアンジェリカの間に割りこんだのは雪菜だった。銀色の槍が矢のように突き出され、女兵士の左手首を刺し貫く。

静電気が散ったような衝撃とともに、アンジェリカの手首に埋めこまれていた魔具が砕けた。不可視の刃が消滅した。〝斬首の左手〟と呼ばれた魔具はもう使えない。

それを見た女兵士が、なぜか満足げに微笑んだ。

「おまえがそう動くことは、視えていたよ、剣巫」

左手首がちぎれるのも構わず、アンジェリカが強引に槍を引き抜いた。

雪菜の表情が強張った。アンジェリカの目的は、雪菜をセレスタから引き離すことだったと気づいたのだ。

奪った部下の脚を使って、女兵士は凄まじい加速で跳ぶ。

その先にいたのはセレスタだ。恐怖に立ち竦むセレスタを、アンジェリカは乱暴に抱き寄せた。ザザラマギウの〝花嫁〟を、女兵士の右腕が――

「〝抱擁の右手〟――これがアメリカ連合国が誇る魔具の真の力だ」

アンジェリカの右腕が輝きを放ち、その光がセレスタを呑みこんでいく――

8

不吉な音が世界を満たしていた。
大地が――いや、古城たちのいる空間そのものが、ゴゴ、と激しく震えている。
広大な遺跡が消失を始めていた。生々しく存在していた巨石造りの神殿が、不意に現実感を失い、呆気なく揺らいで消えていく。
「アンジェリカ・ハーミダ……！」
しかし今の古城には、それに意識を向ける余裕はなかった。
古城たちの目の前で、再びアンジェリカが姿を変えていく。
その肌がすべての色をなくして、夜の闇のように暗く染まった。人間の輪郭を失った身体が、膨張しながら形を変える。それは巨大な鳥のようであり、同時に蛇のようでもあった。あるいは禍々しい卵から孵ったばかりの、凶獣の雛のようにも感じられた。人間だったころの面影を残しているのは、黒曜石の鱗に包まれた二本の腕だけだ。
翼を広げたその姿は全高七メートルを超え、なおも成長を続けている。
全身を覆う黒い鱗には、精緻な電子回路に似た黄金の魔術紋様が浮かんでいた。
回路の中枢にあるのはセレスタだ。怪物の額に四肢を埋めこまれたような姿で、彼女は恐

怖に目を見開いたまま彫像のように固まっている。

「おまえ……セレスタを……！」

古城は絶望と怒りに全身を震わせた。アンジェリカ・ハーミダは、〝女王の抱擁〟を使ってセレスタを自分の中に取りこんだ。邪神の依り代を手に入れたのだ。形はどうあれ、アンジェリカは、彼女の任務を果たしたことになる。

「ザザラマギウの〝花嫁〟と融合したか――」

立ち尽くす古城の背後から、少し舌足らずな女の声が聞こえてくる。南宮那月の声だった。豪奢なレースの日傘を傾けて、那月は、変貌した女兵士を哀れむように見上げている。

「なるほど……貴様、シアーテの神殿に刻みこまれていた魔術装置を、そっくり自分の体内に移植していたのだな、〝血塗れ〟アンジェリカ――」

「魔術装置を……移植した？」

那月の言葉が意味することに気づいて、古城の顔から血の気が引く。

セレスタが〝卵〟を召喚しても、邪神は実体化できなかった。絃神島には邪神を実体化するための魔術装置が――シアーテの神殿が存在しなかったからだ。

だからこそ邪神の〝卵〟は、異世界に結界を創り出し、絃神島を侵蝕してまでも、魔術的に遺跡を再現しようとした。古城たちは、その〝仮想〟の遺跡を破壊することで、邪神の実体化を防ごうとした。そして防いだはずだった。

だが、もしもアンジェリカ・ハーミダの体内に、〝実在〟のシアーテの神殿と同じ魔術装置が搭載されていたとしたら――？

「魔術装置としてのシアーテ神殿は、千年以上も前の技術で造られたものだ。現在の魔術集積技術を使えば、あのような大がかりな装置は必要ない。私一人の体内に、すべて埋めこむことも可能だ。一センチ四方の集積チップとしてな」

異形の怪物が、アンジェリカ・ハーミダの声で語り出す。

それは彼女が、〝邪神〟の力を完全に制御していることを示していた。〝花嫁〟であるセレスタを体内に取りこむことで、人類が神を支配しているのだ。

「生贄の回収は成功した。犠牲は出たが、想定内だ。任務は問題なく遂行されている――」

抑揚のない機械的な口調で、異形の怪物が宣言する。

神殿の崩壊が加速した。邪神の魔力によって維持されていた結界が消滅し、現実の世界へと復帰する。通常空間に放り出された古城たちは、重力に引かれて絃神島の岸壁に落下した。邪神の〝卵〟によって侵蝕された岸壁は、ボロボロの廃墟になっている。

那月は空間を操って安全な場所へと瞬間移動し、雪菜は危なげなく着地した。古城は海に落ちそうになりながらも、どうにか剝き出しの構造材にしがみつく。

そして邪神と化したアンジェリカは、闇色の翼を広げ、上空から古城たちを睥睨している。

「しかし〝冥き神王〟の降臨に対する我が国の関与が公表されるのは、望ましくない。ゆえに

目撃者の抹消を行う」

黒曜石の鱗に覆われた邪神の腕が、漆黒の炎に包まれた。凄まじい熱量に大気が揺らぐ。その黒炎を握り固めて、異形の怪物が古城を睨んだ。

「ザザラマギウは死を司る夜の神。冥き太陽の業火にて燃え尽きるがいい――」

光を持たない黒い炎が、音もなく地上へと落ちてくる。

凝縮されたその魔力は、ここにいる古城たちだけでなく、港一帯のすべてを焼き払うのに、十分すぎる熱量を持っていた。黒い輝きが大地を焼き、沸騰した海面を白く泡立たせる。

だが、その破壊的な高熱が、絃神島へと達することはなかった。

「やらせるかよ、寄生女――」

古城の眼前に、光が生じた。それは美しくも巨大な宝石の壁だった。

邪神が放った黒い炎は、白く透き通ったその壁に触れた瞬間、吸いこまれるように消滅した。同時に宝石の壁も砕け散り、無数の結晶へと変わって、邪神を目がけて一斉に降り注ぐ。

「なに……!?」

尖った宝石の破片は、邪神が放った黒い炎と同等の熱量を帯びていた。

放った攻撃の威力を自らに浴びて、異形の怪物が動揺する。

「……おまえらは知ってたんだろうがよ。セレスタが生贄にされてたことも、記憶を奪われ、殺されかけてたことも」

邪神と化した女兵士を睨んで、古城がギリギリと奥歯を鳴らす。
その全身から立ち上る膨大な魔力が、大気を震動させていた。
ザザラマギウを止める方法は、ふたつしかないとヴァトラーは言った。セレスタを殺して邪神の実体化を阻止するか、あるいは降臨した邪神を倒すか、だと。そして邪神が降臨したら、セレスタはその衝撃に耐えきれず消滅するだろう、とも。
しかしアンジェリカは邪神化したが、彼女の自我は失われていない。だとすればセレスタの意識や肉体も、まだ破壊されずに残っている可能性がある。ならば、やるべきことは明白だった。
「セレスタを見捨てて、神官たちを殺しまくって、その上でまだ神の力を戦争の道具に使う気か！　だったら俺が邪神をぶっ倒してセレスタを助ける。ここから先は、俺の戦争だ――！」
古城が宝石の壁を展開する。邪神が再び黒炎を放ち、両者の魔力が激突した。
砕け散った壁の破片が無数の弾丸と化して、異形の怪物へと反撃を仕掛ける。
だが、炎を放ち終えた邪神の姿は、すでに古城の視界から消えていた。古城の背後に回りこんだ邪神が、死角から新たな炎を撒き散らす。
反応の遅れた古城には、新たな障壁を作り出す余裕はない。
そして硬直した古城の眼前で、前触れもなく炎が割れた。
眩い純白の輝きが巨大な刃となって、漆黒の炎を斬り裂いていく。

光の刃の正体は獅子王機関の秘奥兵器――七式突撃降魔機槍が生み出す神格振動波の輝きだ。

「いいえ、先輩。わたしたちの戦争、です――！」

銀色の槍を翻した雪菜が、背中合わせに古城の背後を護っていた。

その言葉に力強くうなずいて、古城が右腕を高々と掲げる。

「焔光の夜伯の血脈を継ぎし者、暁古城が、汝の枷を解き放つ――」

古城の右腕から撒き散らされた鮮血が、閃光とともに巨大な獣の姿へと変わった。

自らの意思を持つほどの、濃密に渦巻く魔力の塊。それは金剛石の肉体を与えられた、途方もなく巨大な大角羊だった。

穢れなき絶対無謬の神の羊。第四真祖の新たな眷獣だ。

「――疾く在れ、一番目の眷獣、〝神羊の金剛〟！」

古城の叫びとともに、宝石の結晶を撒き散らして神羊が咆吼した。

いかなる攻撃にも傷つけられることのない金剛石の神羊は、自分を傷つけた者にその傷を返す。吸血鬼の不死の呪いを象徴する眷獣だ。

宙を舞う異形の怪物の動きを封じるように、古城の眷獣が生み出した無数の宝石の障壁が、空一面を覆い尽くした。その障壁を攻撃すれば、攻撃の威力はそのまま邪神に返る。

もはや邪神は絃神島を傷つけることはできない。逃亡することも不可能だ。

任務遂行を阻もうとする古城を睨んで、邪神と化したアンジェリカが、轟、と吼えた。

闇色の翼を羽ばたかせ、異形の怪物が降下する。

迫り来る漆黒の巨体を見上げて、古城が表情を硬くした。邪神は己の巨体を使って、そのまま古城たちを踏み潰そうとしているのだ。

邪神の逃亡を防ぐために眷獣を使っている古城は、新たな障壁を展開できない。魔力をともなわない単純な物理攻撃は、雪菜の槍でも防げない。

古城はほかの眷獣を喚び出して、邪神を撃ち落とそうとする。

しかし邪神の攻撃のほうが速い。漆黒の巨体が、壊れかけの岸壁ごと古城を押し潰す――その刹那、邪神の圧倒的な質量を受け止めたのは、鋼色に輝く巨大な土人形だ。

「〝崩撃の鋼王（アルラウト）〟よ！」

鋼鉄（こうてつ）製の土人形（ゴーレム）の腕が、力任せに邪神を殴りつけ、漆黒の巨体を押し返す。

土人形を操っていたのは、トビアス・ジャガンだった。重傷を負って倒れていたはずの彼が、胸の傷口を押さえながら、古城に怒鳴る。

「気を抜くな、暁古城！　眷獣を倒せなければ、宿主を狙ってくるのは当然だろうが！」

「いちいち偉そうなんだよ、おまえは――！」

「うるさい、黙れ」

間抜けめ、と吐き捨てるように呟くジャガンを、古城は苦々しげに睨み返した。これでは彼に礼を言うタイミングがつかめない。

「〝妖撃の暴王〟よ――！」
「疾く在れ、〝双角の深緋〟――！」
葛藤する古城をきっぱりと無視して、ジャガンが新たな眷獣を喚び出した。
同時に古城も動いていた。灼熱の猛禽と、緋色の双角獣が実体化し、左右から一斉に邪神を襲った。信じられないほど息の合った連携攻撃だ。
回避不可能なはずのその攻撃を、邪神は悠然とかわしてみせた。先ほど古城の障壁をかいくぐったときと同じだ。黒曜石の腕から放たれた黒炎が、二人の眷獣を撃ち落とす。
「馬鹿な！」
「――よけた、だと!?」
ジャガンと古城が共に絶句する。二人は傷ついた眷獣たちに再び攻撃を命じるが、結果はやはり同じだった。異形の怪物は、古城たちの動きを、完全に先読みして攻撃を捌いている。
邪神化したアンジェリカは、ザザラマギウの力を完全に引き出しているわけではない。本来の地脈から遠く離れた場所での実体化、そして魔具による強引な融合などの不完全な儀式が原因で、〝冥き神王〟本来の力のごくわずかしか再現できていない。セレスタが人間の姿を保ち、アンジェリカの自我が残っているのがその証拠だ。今なら、あの異形の怪物を倒して、セレスタを救い出すことができるはずなのだ。
だが攻撃を当てることができないのでは、どうにもならない。こうしている今も邪神は龍

脈から力を吸い上げて、徐々に力を増している。手に負えなくなるのも時間の問題だ。

「なるほど……そういうことか」

焦燥する古城の耳に届いたのは、空を呑気に見上げていた那月の、他人事のような呟きだった。試験問題を解説するような口調で、小柄な魔女が古城に告げてくる。

「聞け、暁古城。アンジェリカ・ハーミダの体内には、未来予測が可能な魔具が埋めこまれている。生半可な攻撃はすべてよけられると思え」

「未来予測……？　それって、姫柊と同じ……」

古城がハッと雪菜を見た。戦闘中に一瞬先の未来を霊視することで、魔族を上回る速度で動く。それが獅子王機関の剣巫が持つ、異様な戦闘能力の秘密だ。アンジェリカがそれと同じ能力を持っているのなら、古城たちの攻撃が当たらないのも当然だった。

「そういうことだ。なにをすればいいか、わかるな？」

小さな唇を吊り上げて、ニヤリ、と那月が笑う。

古城は雪菜と顔を見合わせ、どちらからともなくうなずいた。

口に出して確認する暇はない。時間が惜しい。

雪菜が無言で〝雪霞狼〟を置く。古城は雪菜の背後に回りこみ、彼女を背中から抱き寄せるように立つ。そして二人は、互いの右手を重ね合わせた。

「先輩――」

雪菜が顔を上げて振り返り、間近から古城を見上げてきた。
彼女の瞳に浮かんでいたのは、はにかむような淡い微笑みだ。
「無事にセレスタさんを助け出せたら、聞いて欲しい話があるんです。わたしが獅子王機関に入るきっかけになった出来事のことを……いいですか？」
「ああ、もちろん」
古城が迷いなくうなずいた。その瞬間、古城たちの中でなにかがつながったような気がした。見えない糸が二人の神経を結びつけ、触れ合った肌が互いの意思を伝えてくる。
古城と雪菜が同時に空を見上げた。
炎の色の空を背景に、漆黒の邪神が浮かんでいる。
邪神と化したアンジェリカが、未来を視ているというのなら、彼女が見ているその未来の、さらに先を視ればいい。ただし、それを実現するためには、雪菜の霊視力が、アンジェリカの魔具の力を上回らなければならないが――
雪菜ならできる、と古城は信じた。
そして古城が信じてくれるから、視える、と雪菜は確信した。
「先輩！」
「〝獅子の黄金〟――！」
二人の声が重なった。虚空から召喚されたのは、強烈な電磁場をまとった雷光の獅子だ。

それは紫電の輝きとなって、雪菜の指さす方角へと宙を駆け、邪神の巨体に喰らいつく――

自らの予測を越えた眷獣の攻撃に、アンジェリカが甲高い絶叫を放った。

感情のない戦闘機械であるはずの彼女が、初めて恐怖を抱いたのだ。

「上出来だ、教え子ども――」

那月が、広げた扇子で唇の笑みを覆い隠す。

足元の影の中から彼女が撃ち放ったのは、戦艦の錨鎖にも似た、巨大な黄金の鎖だった。

神々が鍛えた〝呪いの縛鎖〟――黄金の魔具につながれて、漆黒の邪神が地面へと引きずり落とされる。

「獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る――」

その瞬間、雪菜が、槍を握って疾った。祝詞とともに流しこまれた膨大な霊力が、銀色の槍を神格振動波の輝きに包む。

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

雪菜の槍が、黒曜石に覆われた邪神の肉体を貫いた。

彼女が狙っていたのは、ただ一点――アンジェリカの体内に埋めこまれた魔術装置のチップだった。邪神体内の神気の流れから、チップの位置はわかっていた。一センチ四方の小さな集積回路を、雪菜の一撃は正確に破壊する。

その瞬間、邪神を実体化させていた力は失われた。

異形の怪物の姿が揺らいだ。

邪神と融合していたアンジェリカの肉体が吐き出され、同時にセレスタも解放された。

空間を揺るがすような咆吼とともに、邪神の力が暴走を始める。

凝縮されていた膨大な神気が、無差別に解放されようとしているのだ。

「暁ッ！」

那月が古城を睨んで叫び、古城は新たな眷獣を召喚した。

「〝龍蛇の水銀（アル・メイサ・メルクーリ）〟ッ――！」

水銀色の双頭龍が、暴走直前の邪神の肉体へと喰らいつく。龍たちに喰われた邪神の肉体が、ごっそりと空間ごと削り取られたように消失する。邪神の神気がすべて解放されたら、神羊の障壁でも防ぎきれない。その前に〝次元喰い（ディメンション・イーター）〟である双頭龍の力で、神気そのものを、どこも知れない異世界へと飛ばすのだ。

肉体を喰われ続ける漆黒の邪神が、苦悶の咆吼を上げながら荒れ狂う。残された最後の力を振り絞り、自らの下半身を切り捨てて、邪神が双頭龍の顎を振りほどいた。

「なっ!?」

ちぎれた邪神の肉体が、地上へ向かって落下してくる。

それを見た古城たちの表情に焦りが浮く。

古城は〝神羊の金剛（メサルティム・アダマス）〟に命じて、無数の障壁を展開した。光の障壁に触れるたびに、邪神

の身体は削れて力を失っていく。だがそれでも、実体を失いつつある邪神のすべてを、防ぎきるのは不可能だった。

細かな破片と化した邪神の残骸が、流星雨のように絃神島へと降りそそぐ。そこに残されたわずかな神気だけでも、絃神島全土を消滅させる程度の威力はあるはずだ。

雪菜の槍でも、そのすべてを撃ち落とすことはできない。

新たな眷獣を喚び出している暇もない。

間に合わない、と古城が唇を噛んだその瞬間――

虚空から新たに無数の蛇が出現し、邪神の破片をひとつ残らず喰らい尽くした。

「え……!?」

突然訪れた静寂に、その場にいた誰もが動きを止めた。

世界から邪神の神気が消えていた。空の色も、いつの間にか元に戻っている。

視界を埋め尽くすほどの大量の蛇たちが、役目を終えて再び虚空へと消えていく。

その恐ろしい眷獣を喚び出したのが誰なのか、振り返るまでもなく古城は理解していた。

〝蛇遣い〟の異名を持つ貴族――アルデアル公ディミトリエ・ヴァトラーだ。

「ヴァトラー……あいつ……」

近づいてくる青年貴族に気づいて、古城は無意識に顔をしかめた。

邪神の侵蝕で大破した岸壁で、蜂蜜色の髪の少女が、弱々しく上体を起こしている。

融合された際に衣服を失った彼女は、なにも身に着けていなかった。少女の艶やかな褐色の肌には、目立つような大きな怪我はない。ひどく消耗しているが、記憶の混乱もないようだ。

そんな彼女の前で立ち止まり、ヴァトラーは優雅に微笑んだ。

「無事だったようだね、セレスタ・シアーテ――おめでとう、と言わせてもらおう」

ヴァトラーが裸のセレスタの肩に、自らのスーツの上着をかけてやる。

蜂蜜色の髪の少女が驚いたように顔を上げた。半ば無意識に青年貴族の名前を呼ぶ。

「ヴァトラー……様……」

彼女の呼びかけに答えずに、ヴァトラーはそのまま歩き出した。

傷ついたジャガンを労うように微笑んで、ヴァトラーは、そのまま彼を連れて去っていく。

映画のワンシーンにも似たその光景を、古城は呆気にとられながら眺めていた。

「……なんで、あいつがセレスタを助けたみたいなみたいなことになってんだ……」

最後の最後に手を貸した以外、ヴァトラーはほとんどなにもしていない。それどころかあの男は途中まで、セレスタを見捨てるつもりだったはずだ。

セレスタ・シアーテに同期していたザザラマギウの神気は、実体化したことで彼女から離れ、古城たちの眷獣に喰い尽くされた。彼女はもう邪神の〝花嫁〟ではない。

だからヴァトラーは、彼女に対する興味をなくしたのだろう。セレスタに対する優しい振る舞いは、彼の無関心さの表れだ。もっとも、セレスタがそれを理解しているとは思えない。

納得いかねえ、と呟いて、古城は首を振る。
そんな彼の横顔を見上げて、雪菜はクスッと小さく微笑んだ。
だが、そんな雪菜の微笑みは、すぐに不機嫌そうに引き攣ることになった。
ヴァトラーの上着を羽織っただけの半裸のセレスタを、古城がじっと見つめていたからだ。
「先輩……なんでいつまでも彼女を見てるんですか……？」
「え……ええ!?　ちょっと待て、今のは、ただ、あいつのことを心配して……！」
いやらしい、と憤慨する雪菜に、必死の言い訳を続ける古城。
そんな古城たちのやりとりに気づいて、セレスタが小さく噴き出した。
目の端に浮いた涙を拭って美しく笑うセレスタの横顔を、紘神島の夕陽が明るく染めている。
彼女が呟いた短い言葉は、強い海風に攫われて消える。古城の耳には届かないままに――

「ありがとう……古城……」

終章

その日、藍羽浅葱は、高価なエルゴノミクスチェアにだらしなく寝そべって、不機嫌そうに頬杖をついていた。

キーストーンゲート、第零層――

絃神島の中心に位置する巨大ビルの、さらにその中央にある特殊な区間。

人工島管理公社のサーバールーム――と呼ばれている場所である。少なくとも、表向きは。

完全に気密処理されたこの空間には、絃神島を管理する五基の超電算機のコアユニットが置かれ、神経のように張り巡らされた島内ネットワークのすべてが接続されていた。頑丈な外殻は核弾頭の直撃や、水深二万メートル級の水圧にも耐えるといわれている。

しかし単なるバイト女子高生であるところの浅葱にとっては、そんな非現実的なスペックや蘊蓄はどうでもいいことだ。

「基樹のヤツ……人を呼びつけといて、どういうつもりよ!?　ああ、もう……暇！」

行儀悪く机の上に脚を載せ、浅葱が苛々と呟いた。

急ぎの案件で給料もいい、新型スパコン使い放題、という幼なじみの甘い言葉につられて、せっかくの休日を潰してわざわざバイトに来てやったのだ。しかし実際にやらされたことは、机の前でぼーっと待機しているだけ。あまりの退屈さにソフトウェア特許を一ダースほど申請したり、コンピューターチェスの世界チャンプをこてんぱんにしたり、古城の自宅近所の監視カメラをハッキングしたりして遊んでいたのだが、さすがにそんな暇潰しも限界だった。

「ちょっとモグワイ、聞いてんのー!?　お腹空いたんだけどー……おなかすいたー！」
浅葱が子どものように手脚をじたばたさせながら監視カメラに呼びかける。と、そのタイミングで不意に浅葱の携帯が鳴った。新着メッセージの着信音だ。
メッセージの差出人は矢瀬だった。文面はシンプルだ。
曰く、今日の用事は終わったので帰っていい。お疲れさん――
「はあっ!?　なんなのよ、もう!?」
浅葱が携帯の画面を睨んで叫ぶ。彼女の背後で、空気が抜けるような音がした。浅葱を閉じこめていた気密隔壁のロックが解除されたのだ。
「あいつ……！　あとで、覚えてなさいよ……！」
わなわなと拳を震わせながら、浅葱が呟く。
彼女の一日は、こうして何事もなく終わっていく――

†

巨大クルーズ船〝オシアナス・グレイヴⅡ〟の船室で、ディミトリエ・ヴァトラーはワイングラスを傾けていた。鉄錆の臭いを漂わせた深紅の液体が、彼の手の中で揺れている。
テーブルに置かれたタブレット端末には、新聞社のサイトが表示されている。

トップページに躍っていたのは、内戦終了の文字だった。第三真祖〝混沌の皇女〟が出陣するまでもなく、〝混沌界域〟の反乱軍が鎮圧されたのだ。

戦闘は呆気なく終了し、市民の犠牲者はほとんど出なかった。そのことで第三真祖は、逆に為政者としての評価を上げた。

アメリカ連合国の軍部による、謀略工作の証拠も公表された。その中には負傷して捕虜となった、特殊部隊の女将校の名前もあったという。

結果、アメリカ連合国は国際的な非難を浴びることになり、〝混沌界域〟への賠償に頭を悩ませている――ということだった。

「よろしかったのですか、今回の件――〝混沌の皇女〟に肩入れしたことで、だいぶ長老たちの不興を買ったようですが」

窓の外を眺めているヴァトラーに、柔和な美貌を持つ吸血鬼の少年が訊いた。翡翠色の彼の瞳は、どこか物憂げにタブレット上の記事に向けられている。

ディミトリエ・ヴァトラーは、〝戦王領域〟出身の貴族。第一真祖〝忘却の戦王〟の血脈に連なる純血の吸血鬼だ。そんな彼が、他の血族の真祖に手を貸す――同族の吸血鬼たちにとって面白かろうはずもない。しかし、

「構わないよ。うちの真祖さんは、むしろ面白がってくれたんじゃないかな。少し面白いものが見られたしね」

ハンドカットの高価なグラスを光に透かしながら、ヴァトラーは微笑んで首を振る。
どこか愉しげな彼の瞳には、少年――キラを困らせて喜んでいるような印象が感じられた。
つまりは、いつもどおりということだ。
「〝C〟ですか」
溜息混じりに、キラが呟く。ヴァトラーは静かに唇を吊り上げて笑った。
「古城がザザラマギウを止めなければ、人工島管理公社は〝回路〟を起動したはずだ。だからこそ〝カインの巫女〟を〝薬室〟に入れた。おかげで紘神島のもうひとつの姿が、ほんの少しだけ見られたよ。〝魔族特区〟の真実の姿がね」
ヴァトラーの碧眼に、一瞬、真紅の輝きがよぎった。
その瞳が映していたのは、紘神島の中心――キーストーンゲートの建物だった。
ちょうど夕陽が水平線に沈む時間だ。眩い照り返しがビルを黄金に染めている。
「それに〝混沌の皇女〟に親切にしたおかげで、素敵な贈り物ももらえたことだしね」
深紅の液体を飲み干したヴァトラーが、新たな玩具を手に入れた子どものような表情で振り返った。そして壁際に立つ少女たちに呼びかける。
「そうだろ？　六番目、十番目――」
妖精めいた美貌を持つ二人の少女が、その呼びかけに黙ってうなずいた。
こぼれ落ちる二人の淡い金髪は、見る角度によって虹のように色を変えていく。

夕刻――

古城と雪菜は、病院の通路で落ち着きなく時計を見上げていた。人工島管理公社の付属病院。魔族や攻魔師の診療を専門とする〝魔族特区〟の専門病棟である。

近くのベンチには、途中で合流した夏音やアスタルテの姿もある。誰もが不安そうな表情を浮かべる中、ニーナだけが一人ふて腐れていた。病棟へのペットの持ち込みが禁止されているという理由で、動かない人形のフリをさせられていたからだ。

やがて診察室に続く扉が開いて、南宮那月が現れた。

豪奢なドレスにレースの扇子という、相変わらずの場違いな服装だ。

「那月ちゃん……セレスタは？」

そんな那月に駆け寄って古城が訊く。あれからすぐに意識をなくしたセレスタは、那月の手配で、この病院へと運びこまれた。そして検査を受けることになっていた。どうにか救出されたとはいえ、一度は邪神と融合したのだ。ひどく衰弱していたし、後遺症や反動の心配もある。

しかし那月は、不安げな古城たちを見回して、大げさなやつらだ、と嘆息し、

「簡易的な検査だが、邪神の残留神気は見つからなかった」

いつもの悠然とした態度でそう言った。

「それって――」

「あの娘はもう、〝冥き神王〟の〝花嫁〟ではない、ということだ」

「そうか……」

よかった、と古城が脱力して壁によりかかる。これでセレスタが生贄として、誰かに狙われる可能性はなくなった。今の彼女は自由の身だ。

話を聞いていた夏音たちも、ホッとしたように胸を撫で下ろしていた。

「セレスタさんの身体は、大丈夫だったんでしょうか？」

ずるずると床にずり落ちそうになる古城を支えながら、雪菜が質問する。

過去の儀式で使われた呪術や、今回浴びた神気の負荷で、セレスタの肉体には相当な負荷がかかったはずだ。精神的なダメージのこともある。

「それなりの後遺症は残っているから、絃神島で療養してもらう必要はあるが、そう深刻なものではないはずだ。あの娘はアンジェリカ・ハーミダと違って、正統な〝花嫁〟だからな。神気に対する適性があったということだろう」

那月が、やや無責任な口調でそう言った。簡易検査しか終わっていない今の段階では、彼女にもそれ以上のことは説明できないのだ。

「ああ、それからセレスタ・シアーテの治療費と今後の生活については、〝混沌界域〟からの

支援があるそうだ。そのうち正式な案内が送られてくるだろう」

「〝混沌界域〟って、ジャーダのところか？　どうしてあいつが……」

面喰らったような表情で、古城が目を瞬いた。今回の事件は、直接的には〝混沌界域〟は無関係だ。国籍上はセレスタも〝混沌界域〟の臣民ということになるのだろうが、だからといって異国で事件に巻きこまれた小娘一人を、国家が直々に援助するとも思えない。

「べつに驚くことではないだろう？」

疑問に思う古城を、那月がむしろ不思議そうに見返してくる。

「〝混沌界域〟はセレスタ・シアーテの事件のおかげで、アメリカ連合国に莫大な賠償金を請求できるんだ。それくらいの待遇はあって当然だと思うがな」

「ああ……そりゃそうか」

そう言われて古城も納得する。古城たちがアンジェリカ・ハーミダの任務を妨害したことで、結果的にいちばん得をしたのは、〝混沌界域〟だったというわけだ。

「それで俺や姫柊にはなんもなしって……なんか納得いかねえな……」

ぼそり、と古城は本音を洩らす。ヴァトラーの気まぐれに巻きこまれただけにもかかわらず、古城たちは今回の事件で、何度も死にそうな目に遭ったのだ。謝罪や慰謝料を請求するのは、むしろ当然の権利ではないかと思う。もちろん知り合いを助けることに理由は要らない、と言ったのも本心だが、それとこれとは別の問題だ。

そんな古城の呟きを聞きつけて、那月が怪訝そうに首を傾げた。
「おや？　貴様には今回、相応の役得があったはずだが……？」
「……役得？」
なんのことだ、と古城は思う。もちろん心当たりなどあるはずもない。
しかし雪菜はそうでもなかったらしい。彼女は突然、思い出したように古城を見上げて、
「そういえば、先輩、新しい眷獣を使っていたようですが、あれは――」
「……え!?」
古城の全身が、錆びた歯車のように固まった。
ぎこちなく首を回して雪菜を見返し、精一杯、すっとぼけた声を出す。
「そ……そうだったか？」
「はい。〝冥き神王〟と戦っていたときに」
雪菜の目つきが不穏な感じになってくる。
十二体の眷獣を従えているといわれる第四真祖だが、古城はまだ、そのすべてを掌握しているわけではない。新たな眷獣を支配下におくためには、吸血行為が必要だからだ。それも眷獣の贄に相応しいだけの、強力な霊媒の血を吸わなければならないのだ。
第四真祖の監視者である雪菜は、当然そのことを知っている。監視者の目を盗んで吸血行為を働いたとなると、それは由々しき大問題なのだった。

「あ、そういえば、姫柊、あのときなにか話があるって言ってなかったか？」

雪菜の疑惑の視線に追い詰められた古城は、強引に話題を変えてみた。

「え、ええ……でも……それはこんなところでは……」

意外にもあっさりと雪菜が動揺する。このまま押し切れるか、と古城が一縷の望みを抱いたそのとき、不意に通路が騒がしさを増した。

「――暁古城。そこのオモシロ外国人はおまえの知り合いか？」

「え？」

なぜか呆れ顔の那月に訊かれて、古城が視線を巡らせる。

気配もなくその場に立っていたのは、忍者装束風の改造軍服を着た銀髪の女騎士だった。

那月の服装も相当だが、女騎士の出で立ちはさらに目立つ。白衣の病院関係者たちが、何事かと訝しむような目つきで古城たちを睨んでいる。

「ユ、ユスティナさん……なんでここに？」

古城は当惑しながら彼女を見た。普段は夏音をこっそり護衛しているはずのユスティナが、なぜか堂々と姿を現していた。彼女が胸元に抱いているのは、大画面のタブレットPCだ。

「ユスティナ・カタヤ要撃騎士、我が主君、アルディギア王国、ラ・フォリア・リハヴァイン王女の命により罷り越しました。古城殿、まずはこちらを」

「は、はあ」

わけがわからないままうなずいて、古城はタブレットの画面に目を落とす。
映し出されていたのはネット経由のビデオチャットだ。夏音によく似た美しい銀髪の少女が、カメラの前に座っている。彼女が着ているのは、華やかな儀礼用の軍服だ。
『ふふ、お久しぶりですね、古城。雪菜も無事でなによりでした』
古城たちの姿が見えているのか、銀髪の少女は、気品あふれる優雅な笑顔でそう言った。
思いがけない人物の出現に、古城はぽかんと目を見張る。美の女神の再来とも讃えられる美貌の少女。北欧アルディギア王家の第一王女、ラ・フォリア・リハヴァイン――
美人で高貴で心優しく聡明で国民からの絶大な人気を誇るという、絵に描いたようなお姫様だが、実は古城は彼女のことが少々苦手だった。頭が良すぎてなにを考えているのかよくわからない上に、たまに腹黒く感じられて恐ろしかったりするからだ。
「ラ……フォリア……どうして……!?」
『ユスティナから報告がありました。本来なら今すぐそちらにうかがって、一緒にお祝いするべきなのですけれど、それが叶わないのは残念です』
北欧アルディギア王国の美貌の王女は、そう言って無念そうに目を伏せた。
なんのことでしょうか、と雪菜が古城を見つめている。
古城の背筋を、冷たい汗が流れ落ちる。
ユスティナ・カタヤ要撃騎士は、夏音のことを、常に陰から監視していたのだ。そんな彼女

が、はたしてなにを目撃というのか――

「ほ、報告って――」

『もちろんこちらの映像です』

王女の付き人とおぼしき女性が、ラ・フォリアの指示で端末を操作する。チャット画面が切り替わり、次に映し出されたのは編集済みのビデオ映像だった。

薄暗い船室の映像である。船室内に積み上げられているのは、シーツやタオルなどのリネン類だ。その隙間の狭い通路に、傷ついた古城が座っている。

古城の背後にいるのは半裸のアスタルテ。そして古城の腕の中には、下着姿の夏音がいた。

周囲の空気が凍りつき、古城の意識はすでに真っ白になっている。

「ちょ……こ、これって……まさか、のぞいてたのか!?」

『ユスティナは有能な護衛ですから。解像度や音声も申し分ありません』

再び画面に現れたラ・フォリアが、少し得意げに微笑んでいる。

古城は悲鳴混じりに頭を抱えて、

「護衛っていうか、ただの盗撮じゃねーかよ!?」

『なんでもアルデアル公所有の船内に不法侵入しての行為だとか。アルデアル公のお手元にも、監視カメラの映像が残っておられるそうですよ』

「な……!?」

もはや古城には言葉もない。言われてみれば当然のことだった。あのとき古城たちがいたのは、〝オシアナス・グレイヴⅡ〟の船内だったのだ。あのディミトリエ・ヴァトラーに限って、こんな面白い場面を見逃すはずがない。

『夏音はわたくしの大切な家族ですから、それが古城と契りを結んだことは、やはり祝福するべきでしょう。でも、さすがに少し妬けますね、ふふ』

冗談とも本気ともつかない口調で、古城を見つめてラ・フォリアが言う。

どことなく意味のズレた彼女の言い回しに、古城は激しい不安を覚えて、

「ち、契りを結んだって……ラ・フォリア、あのな……」

『それから、わたくしの祖父と父からの伝言が――近々ぜひ古城にお会いしたいので覚悟しておけコノヤロウ、と』

「ちょ、おまえの父親って、アルディギアの国王だろ!?　全軍統帥権とか持ってる……！」

『責任はとってくださいね、わたしたちのこと』

うあああああああ、と古城はついに絶叫した。ちゃっかり自分の存在も紛れこませておくラ・フォリアのしたたかさに気づく余裕もなかった。なにひとつ疚しい行動をしていないはずの自分が、なぜこれほどまでに追い詰められているのかわからない。

「だ、だからあれは献血の一種っていうか――叶瀬、おまえからも言ってやってくれ」

もう一人の当事者からの説明ならば、きっとラ・フォリアもわかってくれる。あれは医療行

為だったのだと。そう信じて古城は夏音を呼んだ。しかし夏音は今ひとつ状況を把握できていないのか、いつもと同じ控え目な微笑を浮かべて、恥じらうように目を伏せる。

「ふ、ふつつかものですが」

「違う――！　そうじゃなくて――！」

なぜここでそのセリフを繰り返すのか、と古城は絶望を覚えた。

焦る古城を呆れたように見つめて、雪菜が小さく溜息をついていた。

本当に仕方のない吸血鬼だ――とでも言いたげな、少し同情的な表情だ。

「姫柊――」

古城が救われたような視線を雪菜に向けた。

最後に邪神を撃ち落としたときの、彼女との一体感を思い出す。

雪菜は古城が負傷していたことも、新たな眷獣を使ってセレスタを救おうとしたことも知っている。結局また、今回も最後は彼女に頼るしかない、ということか。

すがるような古城の瞳を見返して、わかってます、と雪菜がうなずく。

「大丈夫です、わかってますから。先輩がそういうだらしない吸血鬼だってことは」

なんでだあああァッ――と古城は窓の外に向かって絶叫した。

邪神の脅威が過ぎ去って、世界最強の吸血鬼、第四真祖の苦悩がまた少し深くなる。

〝魔族特区（まぞくとっく）〟の平和な夜が更（ふ）けていく――

あとがき

前巻の刊行から、少し間が空いてしまいました。お久しぶりです。

そんなわけで『ストライク・ザ・ブラッド10』をお届けしております。

過去のストライク・ザ・ブラッドらしさ、は踏襲しつつも、今回は少し毛色を変えて、ここまであまり描いてあげられなかったキャラたちが活躍するエピソードを目指してみました。ジャガンやキラ、オシアナス・グレイヴⅡのお嬢様軍団、そしてニーナやユスティナさんなど、それぞれ好き勝手に絃神島での生活に馴染んでいるみたいで、とりあえずよかったです。

この巻では直接描かれなかった〝混沌界域〟での出来事についても、いずれ、あちら側の視点で語られることがあるかもしれません。某国の王女様も再登場フラグを匂わせておりますし、適当に期待しつつお待ちいただければと思います。

今回の心残りは、古城と雪菜が二人きりでいる場面があまり描けなかったことでしょうか。凪沙不在のマンションで彼らがどんな会話をするのか、もう少し見ていたかったのですが。

それから、作中で使われている「魔力」と「霊力」の使い分けについて説明して欲しい、というリクエストをいただいておりました。このふたつは、人間が勝手に分類しているだけで、

よその高次元空間から引き出しているエネルギーという意味では、どちらも共通。ただしエネルギーの性質としては、ちょうど正反対の振る舞いをする、という設定です。同じ位相の魔力と霊力をぶつけると対消滅します。魔術や呪術は、それぞれ魔力や霊力を高次元空間から引き出すための技術です。魔族や巫女のように、体質的に魔力や霊力を操る回路を持って生まれた者も存在しています。いくつかの例外や、混同されている部分もありますが、大雑把にはこんな感じ。細かいことは気にしたら負けです。

それに対して神気（または負の神気）は、高次元空間側のエネルギーそのもので、こちらは人間や魔族には制御できません。今回の〝敵〟は腐っても神様の端くれだったので、不完全ながら神気を使いこなしておりました。

というわけで（ネタバレ回避のため）作品の内容に関する質問は基本スルーさせていただいておりますが、それでもいいよ、という方は、リクエストいただければ、こんなふうに（忘れたころに）解説させていただくかもです。主にあとがきの穴埋めのためにな……

さて、本作発売と並行して放送されておりますTVアニメ『ストライク・ザ・ブラッド』ですが、ご視聴いただけておりますでしょうか。ご感想はいかがですか。個人的には素晴らしいスタッフの皆様に恵まれて、原作読者の皆様にも楽しんでいただける作品になったのではないか、と思っています。アニメで作品を知って原作を読んでみた、という方も多くて嬉しい限り。

発売中のブルーレイやＤＶＤには、私も書き下ろし作品を寄稿させてもらっております。機会があればぜひ手に取ってみてください。

またコミック版『ストライク・ザ・ブラッド』も『月刊コミック電撃大王』誌上で連載させてもらっています。単行本も発売中。コミカライズを担当してくださっているＴＡＴＥ先生、いつもありがとうございます。引き続きよろしくお願いいたします！

そしてイラストを担当してくださったマニャ子さま、大変お世話になっております。ストライク・ザ・ブラッドの表紙は毎回とても気に入っているのですが、今回は特にヤバいです。清潔感とか透明感とかエロスとか。今回お披露目の新キャラたちも恰好よかったり可愛かったりで大満足です。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、この本の制作・流通に関わってくださった（そしてスケジュール面でご迷惑をおかけした）すべての皆様に、心からお礼を申し上げます。

もちろんこの本を読んでくださった皆様にも精一杯の感謝を。

それではどうか、また次巻でお目にかかれますように。

三雲岳斗

◉三雲岳斗著作リスト

「コールド・ゲヘナ」（電撃文庫）
「コールド・ゲヘナ②」（同）
「コールド・ゲヘナ③」（同）

「コールド・ゲヘナ④」（同）
「コールド・ゲヘナ　あんぷらぐど」（同）
「レベリオン　放課後の殺戮者」（同）
「レベリオン　拭殺校庭園」（同）
「レベリオン　炎を背負う少年たち」（同）
「レベリオン　彼女のいない教室」（同）
「レベリオン　楽園に紅き翼の詩を」（同）
「i・d・　I　神使いたちの長い放課後」（同）
「i・d・　II　seven」（同）
「i・d・　III　滅びの王国」（同）
「道士さまといっしょ」（同）
「道士さまにおねがい」（同）
「アスラクライン」（同）
「アスラクライン②　夜とUMAとDカップ」（同）
「アスラクライン③　やまいはきから」（同）
「アスラクライン④　秘密の転校生のヒミツ」（同）
「アスラクライン⑤　洛高アンダーワールド」（同）
「アスラクライン⑥　おしえて生徒会長！」（同）

「アスラクライン⑦　凍えて眠れ」（同）
「アスラクライン⑧　真夏の夜のナイトメア」（同）
「アスラクライン⑨　KLEIN Re-MIX」（同）
「アスラクライン⑩　科學部カイメツ」（同）
「アスラクライン⑪　めぐりあい異世界」（同）
「アスラクライン⑫　世界崩壊カウントダウン」（同）
「アスラクライン⑬　さくらさくら」（同）
「アスラクライン⑭　The Lost Files」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド1　聖者の右腕」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド2　戦王の使者」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド3　天使炎上」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド4　蒼き魔女の迷宮」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド5　観測者たちの宴」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド6　錬金術師の帰還」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド7　焔光の夜伯」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド8　愚者と暴君」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド9　黒の剣巫」（同）
「ストライク・ザ・ブラッド10　冥き神王の花嫁」（同）

「サイハテの聖衣（シュラウド）」（同）
「サイハテの聖衣（シュラウド）2」（同）
「M・G・H　楽園の鏡像」（単行本　徳間書店刊）
「聖遺の天使」（単行本　双葉社刊）
「カーマロカ」（同）
「煉獄の鬼王」（双葉文庫）
「海底密室」（デュアル文庫）
「ワイヤレスハート・チャイルド」（同）
「アース・リバース」（スニーカー文庫）
「ランブルフィッシュ①　新学期乱入編」（同）
「ランブルフィッシュ②　中間試験暴走編」（同）
「ランブルフィッシュ③　場外乱闘恋心編」（同）
「ランブルフィッシュ④　伝説崩壊編」（同）
「ランブルフィッシュ⑤　凶天使襲来編」（同）
「ランブルフィッシュ⑥　亡霊殲滅編〈上〉」（同）
「ランブルフィッシュ⑦　亡霊殲滅編〈下〉」（同）
「ランブルフィッシュ⑧　決戦前夜秘湯編」（同）
「ランブルフィッシュ⑨　大会開幕奇襲編」（同）

「ランブルフィッシュ⑩　学園炎上終幕編」（同）
「ランブルフィッシュ　あんぷらぐど」（同）
「ダンタリアンの書架1」（同）
「ダンタリアンの書架2」（同）
「ダンタリアンの書架3」（同）
「ダンタリアンの書架4」（同）
「ダンタリアンの書架5」（同）
「ダンタリアンの書架6」（同）
「ダンタリアンの書架7」（同）
「ダンタリアンの書架8」（同）
「旧宮殿にて」（単行本　光文社刊）
「少女ノイズ」（同）
「少女ノイズ」（光文社文庫）
「絶対可憐チルドレン・THE NOVELS」（ガガガ文庫）
「幻獣坐 -The Scarlet Sinner -」（講談社ノベルズ）
「幻獣坐2 -The Ice Edge -」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
http://dengekibunko.dengeki.com/
※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「三雲岳斗先生」係
「マニャ子先生」係

本書は書き下ろしです。

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド10
冥き神王の花嫁

三雲岳斗

発　行　2014年3月8日　初版発行

発行者　塚田正晃
発行所　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8521（営業）
プロデュース　アスキー・メディアワークス
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
03-5216-8399（編集）
装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）
印刷・製本　加藤製版印刷株式会社

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、アスキー・メディアワークスお問い合わせ窓口あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。
※定価はカバーに表示してあります。

©2014　GAKUTO MIKUMO
ISBN978-4-04-866428-8　C0193　Printed in Japan

電撃文庫　http://dengekibunko.dengeki.com/
株式会社KADOKAWA　http://www.kadokawa.co.jp/

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦